

鹽原多助一代記

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

序詞

すみうり

炭売のおのが妻こそ黒からめと。吟ぜし秀句ならなくに。黒き

小袖に鉢巻や。其の助六がせりふに云う。遠くは八王寺の炭焼。

売炭ばいたんの齒欠爺はつかけじい。近くは山谷さんやの梅干婆うめぼしばに至る迄。いぬる天保の頃までは。茶呑咄ちやのみばなしに残したる。炭売多助たすけが一代記を。拙せ作つさくながら枝炭えだずみの。枝葉を添そえて脱稿やきあげしも、原もとより来落語なるを以もつて。小説稗史はいしに比較くらべなば。所謂いわゆる雪と炭俵くち。弁舌べんぜきは飾れど実の薄うすかるも。御馴染おなじみが打寄うちよする冠詞まくらことばの前席ぜんせきから。ギツシり詰おおいりる大入おおいりは、誠に僥倖まぐれあた当り炭ずみ。俵よきの縁語えんごに評さえ宜よきを。例の若林先生が。火鉢おほこにあらぬ得意おほこの速記しやべに。演舌しやべるが儘よきを書取ら

れしが。写るに速きは消炭けしずみも。三舎しやを避さける出来栄できばえに、忽たちまち一部
の册子そうしとなりぬ。抑そもこの話説はなしの初集二集は土竈どがまのパツトせし事も
なく。起炭おこりずみの賑にぎやかなる場とてもあらねど後編は。駱駝らくだずみ炭
の立消たちぎえなく。鹽原しおばら多助が忠孝の道を炭荷とこと俱ともに重んじ。節義
は恰あたかも固炭かたずみの固く取て動かぬのみか。獸炭じゆうたん炭たんを作りて酒あたを煖
めし晋しんの羊よう琇じゆうが例ためしに倣ならい。自己おのれを節して費用を省き。天下てんの
民寒たみき者多し独り温煖あたたかならんやと曰のたまいし。宋そうの太祖たいとが大度たいどを慕
い。普あまねく慈善を施せしも。始め蛩ひだねの資本ひだねより。炭たんも焼やくべき大おおかま
竈どと成りし始末まんびの満尾迄。御覽ねがを冀いううと言いうよしの。端書はしがき書せよ
との需もとめはあれど。筆持もつすべも白炭しらすみや。焼ぬ昔の雪の枝炭屋やの妻
程黒すみからで鈍すみき作意すみの炭手前すみ。曲なりり形なりなる飾り炭。唯管たゞくだずみ炭炭の

くだくしけれど。
 輪炭わすみ 洞炭どうすみ 点炭てんすみ と重ねて御求めのこれあるよう有之様。
 出版人に差さしかわ代り。代り榮せぬ序はしがき詞を。斯かくは物しつ。

三遊亭圓朝記

扱さて申上げまするお話は、鹽原多助一代記と申しまして、本所ほんじよ
 相生町あいおいちよう 二丁目で薪炭を商い、天保の頃まで伝わり、大分盛んだいぶん
 で、地面二十四ヶ所も所持して居りました。其の元は上州沼じようしゆうぬ
 田またの下新田しもしんでんから六百文の銭ぜにをもつて出て参りました身代でござ
 ります。其の頃の落首らくしゆに一本所ほんじように過ぎたるものが二つあり津軽
 大名炭屋鹽原」と歌にまで謡うたわれまして、十万石のお大名様と一
 緒たとに喩たとえられます位になる其の起源おこりは、僅わずかの端はした銭ぜにから取立
 てまして、五代目まで続きました。其の多助の身の行いの正しい

のと、孝行なのと、殊ことに商法の名人で經濟に長じていることは、立派な學者でもかなわん程で、多助は別に學問もありませんが、實そなに具そなわつて居りますので、今に浅草あさくさ八軒寺町けんてらまちの東陽寺とうようじと、
いう寺の墓場に鹽原多助の石碑がありますが、其の石碑に實父鹽原角右衛門かくえもん、養父も鹽原角右衛門と法名が二つございしますが、實父も養父も同姓同どうみよう名なでござりますから種いろく々くと調べて見ますと、上州沼田の下新田にまだ縁類も残つて居りますから聞き糺たゞしますと、實父角右衛門は元もと阿部伊豫守あべいよのかみ様の御家来で、八百石を領とりました者ですが、何ういう訳か浪人して行方知れずになりました。其の角右衛門の家に勤めました岸田右内きしだうないという御家来がありました。其の者が若氣の至りで、角右衛門の御新造ごしんぞの妹いもおかめ

と密通をして家出をいたし、本郷ほんごう春木町はるきまちに裏家住うらやずまいをいたしまして、名も岸田屋宇之助きしだやうのすけと改め、旅商きいをして居りますが、実に恋は思案ほかの外ほかでございます。右内は忠心の者でございませうから、旅商きいをしながらも、旦那様どちらは何方にお出でか、どうかお目にかゝりたいと主人の事を片時も忘れたことはありません。ふと沼田に主人の居る事を聞いてから、日光の中ちゆうぜんじ禪寺の奥へ三里入ると温泉がありますから、商いながら参りましたが。其の頃は開けませんから、湯場も鶴の湯と川原かわらの湯と二ヶ所で、宿屋もあります。其の中に吉見屋よしみやという宿に泊りましたが、道連さかいやでんは堺屋さかいやでん傳吉でんきちという岸田屋の宇之助と旅商人たびあきんど仲間なかにで、両人ふたりは仲好なかよしでございませうから、両人はこれから沼田へ山越しをしようと言ふの

で、道で聞きますと、山道でとんと往来がありませんので、極難ごくなん所んじよですから案内者がなければいけませんと聞いて、其の夜よの中うちに案内者を頼みまして、翌よくちよう朝あさになると、

宇「傳吉さん案内者は」

傳「今聞いてるんだが、モシ〜宿の旦那、御案内者は宜しゅうございますかね」

主「はい〜心得ましたが、昨夜さくやはどうも、商あきなにお出でなすつて

多分のお茶代を戴いて済みません、何卒どうぞ明年も御心配なくなア」

傳「いや、ほんの心ばかりです、此の宇之助さんは沼田へ行きゆた
いという、私も煙草を少し仕入に往ゆこうと思うのだが、大分道だいぶんが
知れにくいそうだから、昨夜ゆうべから案内者をお頼み申したのだが、

ありましたかえ」

主「はい、案内者はもう頼み置きました、お弁当も拵こしらえましたから」

傳「何卒強どうぞきつそうなものを頼んでおくんなせえ」

主「え、強きついのを頼みました、これ磯之丞いそのじよう々々々」

傳「磯之丞というのが案内者ですか」

主「左様でございます」

傳「弱そうな名で、なまめいた名ですなあ」

主「なあに頑丈なものでござりやす」

という所へ出て来たのは、丈せいは五尺七八寸もあつて、臙すねに毛の生えて居る、熊をみたような男がのそりと立つて、

案内「へい御案内しやしよう」

傳「どうも芝居なら磯之丞なんというと、突つ転ころばしがする役だが、こりや強つよそうだ、そうしてお前は素足かえ」

案「え、素足です」

脚きやはん半も穿はかないで、単ひとえもの物に小倉の帯をちよつ切り結びに

して、鉄砲を担かついでおります。

傳「モシ、腰にある毛の生えた巾きんちやく着ははなんだえ」

案「これは狐の皮で拵こしらえたんてがんす」

傳「こう、どうだえ、狼は出やしますまいねえ」

案「狼は出ねえが、鱗うわばみしや猪しがたまさア、なアに出ても飛とび道具どうぐウ持もつているから大だい丈夫じやうぶでござりやす、あんた方の荷物をお出し

なせえ」

と二人の荷物を連れんじやく尺すくのような物で脊負い、其の上に鉈なたを付けて出かけて往ゆく。

主「左様なら御機嫌宜しく、磯之丞氣をつけて上げろ」

傳、宇「左様なら、御機嫌宜しく」

と暇いとまご乞こいをして西の方へ出かけましたが、花野原を二三町往

きますと、ちよろ／＼流れがあつて、別に路みちとはなく、沢を渡

つて歩く、と七八町まいますと、これから山手へかゝるに従い、

熊笹が生えていて、歩きたびにゴソ／＼として、朝露に袖を濡ら

しまして、段々と登るほどに熊笹は丈せいを越し向うが見えず、

傳「おい／＼案内さん、少し待ってくんな、狼が出てうわばみも蟒うわばみが出て

も分らねえじゃねえかえ」

案「狼が出てても大丈夫でがんす」

宇「こんな所はどの位くらゐあるえ」

案「まだ廿町ばかりありやす」

傳「どうも驚いた、熊笹も鮎屋すしやにあると随分粹いなもんだが、此様

なにあつちやア不意ぶいき気なもんだのう」

と話をしながら漸く登りますると、是れから金精峠こんせいとうげと申し

て実に難所なんじよで、樹木は榧松かやまつと羅漢柏あすなろうの大樹ばかりで、かれ

これ一里半ばかり登りますと、西の方は日光の男体山いづるさん、此方こちらは

白根山しらねさんが見えまする。

傳「どうだい、ひどい所だねえ、どうだえ、何んとか云つたツけ、

磯之丞さん、ひどい所だねえ、此様な所じゃアないと思つたが、これじゃアうわばみ鱗も出ましよう、どうだい宇之さん」

宇「ひどい所でございます、わたくし私も是程とは思いません、是れから又登るのかえ」

案「これからアはアくだ下ります」

と云いながら、これより一里ばかり下りますと、たにながれ溪の流で、どうくくと流れる。山には草に花が咲いて居りますが、見馴れぬ草で、名も知れない草の花が咲いております。たに溪の水でのどうる咽喉を湿おして、それから一里半ばかりも登りますと、見上げる程の大樹ばかりで、ふたり兩人は草くたび臥れたから大樹の根にどっかり腰を掛けて、傳「宇之さん弁当を遣つかおうじやないか、案内さん弁当を出して下

さい」

案「ハア随分草臥れやす」

傳「お前はよく馴れてるから草臥れないようだねえ」

案「私わしなんざア年中こ斯ういう所を歩いてるから、平地ひらちは却かえつて歩
きにきにくい」

といいながらふたり兩人が弁当あを開けると、大きな握飯むすびが二つと、梅
干うめの堅かいのが入れてある。

傳「何どうだい、大變大きな握飯むすびじゃないか、もつと幾つにもして
くれゝばいゝに、梅干うめは真赤まつかで堅かいねえ、あゝ酢すぱい、案内あんない者しや
さんの握飯むすびは大きいねえ」

案「私わしアこいつを半分喰つて、また明日あした半分喰うのだ」

傳「苛ひどいねえ、茶か何か貰もらいてえものだねえ」

案「茶も何もありやしねえ、六里の間家うちがねえから」

宇「それじゃア水を汲くんで来てくんねえ」

案「水もありやしねえ」

宇「それでも先刻さつき流ながれていたじやアねえか」

案「ハテ山の上から搾しぼれて打落うちおとしてめえるだから、下にはある

が、山の上には水はありやしねえ」

宇「苛ひどいねえ、すつぽり飯いを喰くうのだ」

と小言を云いながら弁当をつかつて、さア／＼下おりましようど、

これから二里ばかり下りますと、里近ちかくなつたと見えて水がどう

どツと流ながれて、雑木山があつて、向うに薪をこなして居るは此の

山村の^{そま}柚と見えて、^{かたわら}傍の方に^{やますげ}山菅で作った^{こしみの}腰蓑に、^{やちぐさ}谷地草で編んだ^{やまおかずきん}山岡頭巾を^{ほう}抛り出してあつて、^{くす}燻ぶつた薬罐と茶碗が二つと弁当が投げ出してあるを見て、

傳「宇之さん、水のある処へ来ると茶があらア、向うに^{そま}柚だか何だか居るようだぜ、申し少々お願い申しますがね、私共は日光から^{やまごし}山越をして来ましたが、^{こゝ}此処に茶か何かありますが、戴けましょうか」

柚「はい、ぬるくなりましたらうが、宜しければお飲みなさい」
宇「モシ、あなたのお宅は此の近所ですかえ」

柚「はい、これより二里ばかり下でございます」

傳「それじゃア此の薪は^{しよ}背負つて^{おり}下るのでですかえ」

柚「いゝえ、此の難所を薪を担いでは下りられません」

傳「それじゃア馬の脊で下おろしますのかね」

柚「いや馬では猶なほいけません」

傳「それじゃア何どうしますえ」

柚「この谷川へ投ほうり込んで置きますと、ちようど翌あした日の昼時分に

私わしども共の村に流れて着きます」

傳「へえ、のんきなものですなア、お茶を一つ戴かきますよ」

と云っている所へ雑木山から出て来たのは、その柚そまの女房と見

えて、歳ごろは二十七八で色白く鼻筋通り、山家やまがには稀まれな女でご

ざいます。細帯はしよに両裾を端折はしより、亭主の手助けをして居りますも

のと見え、両人とも中よく働いて居りますを見て、

傳「宇之さん、こういう山の中の女だから猶お目立ちやすが、斯様なにくすぶつて居るが、これを江戸へ持つて往つて磨いて見ねえ、どんな紙屑買が見倒しても奥様の価値があるぜ」

宇「へえ成程、いゝ人柄ですなえ」

と思わず宇之助が見ると、八年前に別れました主人鹽原角右衛門夫婦ゆえ、

宇「お懐かしい、どうして此様な処にお出でなさいました」

と女の側にばら／＼と駈寄りまして、草原へ手を突きますと、お清「おやまア右内だよ、旦那岸田右内でございますよ」

鹽「おゝ右内か、懐かしかった」

と云われて右内は涙ぐみ、

右「えゝ、そんなお身形みなりにお成りなさいまして、此こ様な山の中に
 お出でなさいますか、お情なさけない事ことでございませすなア」

鹽「いやもう浪人して、別に便たよる所もないから、此の村に元家来
 の惣助そうすけという者がいるから、それを使つかつて来て、少しは山も田で
 地んじも持つていたが、四ヶ年あとの出水でみずで押流されて、どうも仕方
 がないから此の通り秋は樵きこりをして、冬になれば 獵かり人ゆうどをして漸よ
 ううく々くに暮くしている、実に尾羽打枯くらした此の姿で、此所こゝで逢あおう
 とは思おもわなんだのう」

右「へいわたくし、私が家出いをしましたのは八年あと、其の時はさぞ御
 立腹たふをなさいましたらうな」

鹽「其の折おりは悪い奴、主人の妹をそゝのかし、家出をいたすは不ふ

うちもの
 埒者と云つていたが、此の五六年此かたの方懐かしくて、実に逢いたく存じていたな」

清「そうして妹のおかめは無事でいるかえ」

右「へい達者でございます、お宅を家出しましてから、只今では本郷の春木町に裏家住うらやずまいをして居ります、外ほかに斯うという事も

存じませんから、只今では斯うやつて旅商いをいたして居りまして、
 ても、あなたにお目にかゝつてお詫わびごと事をして戴きたいと、旦あけく

暮れ存じて居りましたが、此こん様な山の中においでとは存じませんが、沼田の方にいらつしやるといふ事ですから、日光から山越やまごし

をしてまいりましたも、若もしや貴方にお目にかゝられる事もあり
 ましようかと、神かみほとけ 仏ほとけ を信じて居りました甲斐があつて、お目

にかゝる事が出来ました」

と涙拭えば、

鹽「伴つれもある様子だが、今晚は私の家うちへ泊つてはくれまいか」

右「へい、泊つても宜しゆうございますが、商あきんど人仲間の伴つれが有りますから、あの男を先へ帰しましょう」

と話していると、

傳「おい宇之助さんく、おや、あの女にへいくお辞儀をして
いるよ、弁当の余りでも貰う氣じゃアねえか、宇之助さん何どうし
たい」

右「私は今少し訳のある人に逢つて、今晚泊らなければなりません
から、あなたは明日沼田あしたの大竹屋おおだけやという宿屋へお泊りなすつ

て下さい、事に寄つたら二日ぐらい遅くなるかも知れないが」

傳「左様そうかい、それじゃア先へ往つているよ、お前が三日位かゝ

つても待つているよ、それじゃア磯之丞さん先へ往ゆこう」

とこれから別れて、案内と兩人連立ふたりつてまいります。此方こなたは三

人で女房が薬罐さを提さげて、右内が脇さに附きまして、漸よう々山道を

小川村へ二里ばかり下おりて、横に又四五町入つて見ますと、屋根

には板の上に石を載せて嵐を防ぎ、実に見るかげもない山住いで、

中へはいると大きな囲炉裏が切つてあつて、竹自在へ燻くすぶつた薬

罐がかゝつて居ります。留守居をして居りますのが多助という、

八歳になる角右衛門が一人子ですが、これが後に鹽原多助と申し

て、天下に名高い人になります者ですから、自然ほかに他の子供とは

違ひまして、おとなしやかに居ります。右内は如何いかにに御運ごうんが悪いとて、八百石取のお身の上みまが、人も通わぬ山さんちゆう中の斯こん様な茅あばら屋やに住すまつておいでになるのか、お情ないと気の毒なそうに上あつて来きました。

右「誠に思いがけなくお目にかゝりましたなア」

お清「あの、右内や、お前が屋敷やしきを出る前に産れた多助たすけというせがれ悴せがれはこれだよ」

右「えゝ、あのお坊ぼつちやま様さまでございますか、お父様とつさまによく似ていらつしやいますわたくし、私は右内みぎうちでございますが、あなたは御存ごぞんじじございますまいなア」

多「何なにだか知しんねえやい」

右「どうもまるで田舎語いなかことばになつておしまい遊ばしたなア」

と涙を拭き、

右「成程獵師の家のよううちでございますなア」

鹽「何しろ一杯つけな」

と是から女房が支度をするのに、前川まえがわで捕れた山女やもめに岩魚いわなと

いう魚に、其の頃会津辺からみりん味淋みりんのような真赤まっかな酒で、

鹽「えゝ、これは奥州から来る石首魚いしもちという魚の干物だ、一つお

食べな」

右「へゝ、どうも御新造さまのお酌わたくしで恐入りますな、私が家出を

しましたのは矢張八月朔日ついたち、其の年の三月のお節句に、お客様

の歸つた跡で、御新造様のお酌しろざけで白酒しろざけを頂戴した事などを、

かめとお噂をして居りました、家出をしたのも、かめが懐妊かいにんを致しました故でございます、只今では七歳になり、名をおえいと申します」

清「お、左様そうかえ、お前に似てもかめに似ても好子いっこだろうが、見ることも出来ないのう」

右「それでも彼あれが裏家住うらやずまいに馴れて、誠に当節はよく馴れて居ります、働はたらきのない私わたくしでございますから不自由勝で、へい、妙なお酒ですなア」

清「お前は喫たべた事はないだろう」

右「へい、甘いような酢すぱいような変ですなア、へえ、これが会津から来るので」

鹽「あの、其方そなたの親父うへい右平は屋敷に永年奉公をしてくれて、其の悴せの其方も屋敷に勤めて居たのだから、家来とは云いながら家来でない、殊ことには私わしの妹を女房にしているから弟も同様での中」

清「旦那様は故あって御浪人あそばしても、お固い御氣性だから、二君に仕えずと云つておいでだが、此の悴せはどうか世に出したいと思つているが、私の甥せうに当る戸田様の御家来で野澤のざわ源作げんさくという者が宇都宮の藩中だから、それへ頼もうと思つて、度々たびく手紙をやつた処ところが、どうか重役に相談して世話をして上げますから、それに就つて、どうか話をしたいから出て来いと云つて、返事を寄越よこしたが、四年あとの山水で田地から諸道具衣類しよどうぐいれいまで皆流ながされてしまつたゆえ、今ではどうする事も出で事きず、今お金が五十金あれ

ば、江戸のお屋敷へお住込が出来るのだから、此処で私がお頼みだが、かめと兩人ふたりでどのようにも才覚して送ってはくれまいか」

右「へい、どうか致しましょう」

鹽「馬鹿ア云うな、旅商人たびあきんどの右内に五十金出来よう筈はない」

清「それだつて良人あなた、これに頼むより他に仕方がございません、それに右内は家出をする時、家のお金を甘金持つて逃げておいでだよ」

右「え、誠に恐入ります、只今では金子の出来よう筈はございませんが、来年の三月までお待ち下されば、どうにか致しましょう」
清「来年の三月じゃ遅いじゃないか、是非今年の中うちにと云つても、雪があつて来られまいが、どうか今年の中に送っておくれ」

右「なに、どうか致しましょう、なアに子がなければおかめを勤め奉公に売つても、え、これは御新造様の前で、なにどうか致しましょう」

と口には云つても右内が今の身の上では才覚の出来よう道理はございませんが、どのようにも才覚しようと考えながら、其の晩は寐ねまして、翌日立とうとするを彼是と引留められまして、昼少し過ぎに漸よう々振切つて出立しますと、此方こなたは親子三人で須賀川すかがわの堤どてまで送つてまいりました。

右「左様なら御機嫌よろしゅう」

と云うので此方こちらも見送る、右内は見返りながら、金の出来よう筈はないが、神かみ 仏ほとけの恵めぐみで、何うか才覚したいものだと考えな

がら、うかくと大原村という処へ掛りました所が、大きに草くたび臥ひれましたから茶店に腰を掛けて休んでいと、其そこ処へ入つて来たお百姓は年としごろ齡四十四五で、木綿のぼうた布子ぬのこに羽織を上に着て、ちくさ千草の股引で、お納戸色なんどいろの足袋たびに草鞋わらじを穿はき、客「誠に久しく逢いません」

婆「おやまア角右衛門さん、おあがなんしよ」

角「ちよつと来てえと思うが、秋口になると用が多くつて来られねえで、まアあんたも達者で」

婆「まことに此こねえだ間もあんたの方へ向けてやつたら、演劇しべえを見せしてくれると云うから、遣やつた所が、角さんなればこそ世話アして見せてくれて、娘あまつこ子を遣やつたら宜よく世話アして呉れやした、帰けえ

って来てどんな狂言だったと云うも、何だかしんねえが弁慶縞の
 衣物きものを着たお侍さむれえが出て来て、脇差のあたまへ徳利とくりを提さげていたが、
 余よっぼど程酒の好きなお侍さむれえで、跡から機織はたおりつこ女おだまきが緒手巻おだまきを持って出て
 来たところが、其の娘子を侍が脇差で突ツ通すと、女が振ふり髪打がみぶ
 って眼晴めぐるまわしてほっこりきエツたつて云いやんすから、跡で聞
 いたら妹脊山いもせやまの狂言だツて」
 角「はい、碌かめに構かえませんでハア、家うちのお爺とつさんは居いやんすかな
 ア」

婆「へい、居りやんす、新田しんでんの角さんが来きやしたよ」

爺「へい、あんた無沙汰むさたをしやんした、あんたに見みせべえと思おもつ
 ていた青爪あおづめで、三歳せい五ヶ月ごげつになる馬うまで、いゝ馬うまだ、今見みせるか

ら待つて下せえ」

角「あゝ馬かえ」

爺「マア物を見なせえ」

と云いつゝ引出して来たのは実に駿ときうま馬ともいふべき名馬で。

角「やア、いゝ馬でがんすなア」

爺「あんた、此の馬は実に珍らしい馬でね、えら一つ起して、くさめ噓一つした事がねえ、どんなに引いて引まわしても、足に血溜ちだまり一つ出来る馬じゃアねえ、見なんせえ」

角「まア見べえか」

と云いながら齒を見たり爪を見たり、前足を撫でたり、暫く見て居りましたが、

角「こりやア買いてえねえ、幾許いくらだアな」

爺「五兩いっつぶ五粒ぶだツて」

角「高たけえなア」

爺「高たけえつて五兩五粒がものはあらア」

角「そうけえ、己おらア今金はあるが、千鳥村へ田地でんじの掛合かけあいに来た

んだから、田地うりけえが売買けえにならなければ歸りに直ぐ買つて往ゆくか

ら、何しろ手附を置いて往くから、馬を置いて下せえ」

と懷から取出す胴卷は、木綿つむぎか紬つむぎか知れませんが、つるくと

こいて落ちた金は七八十両もありましようか、其の中から一兩出して、

角「さア此処へ置きやす」

と残りの大金を懐中へ括し附けまして、

角「外へ売らねえように、左様なら」

婆「左様なら、歸りにお寄んなしよ」

先刻から兩人で話をしているのを岸田が見るとはなしに、其処

へ落ちたのは大金、あゝ有る所には有り余るものだ、あの金さえ

あれば主人を世に出し、御恩報しも出来るものだと思いますと、

面砲の出るほど欲くつて堪らないから、うか〜と思わず知らず

追貝村まで彼の百姓の跡を尾けて来ました。百姓はそれと知ら

ず谷合までかゝりますと、

右「もし旦那え〜」

角「なんだえ」

右「へえ先程大原村の茶店で馬を買ってお手附をお出しになる時、側に茶を喫のんで居りましたわたくしたびあきんど私は旅商人でございます」

角「はい」

右「始めてお目にかゝって恥入りますが、わたくし私は元は武士でありましたが、あきんど商人になりました、岸田屋宇之助と申します、わたくし私の主人が故あつて浪人をして、此の先の小川村に住んで居りまして、きのう昨日図らず逢いましたところ、五十両の金があれば世に出られるから才覚をしてくれと云われましたが、わたくし私の只今の身の上では、とて逆も才覚は出来ませんから、心配している所へ、あなたが手附をお出しになった時見た金は、七八十両はあると思います、誠に押付けたお願いですが、きつと屹度御返却申しますから、来年の三月まで五

十金拝借はなりますまいか」

と云われて角右衛門は驚きまして、そつと懐へ手を入れ胴巻を
押えながら、

角「なに五十両貸してくれと、己は数坂越かずさかごえを幾度もするが、汝われ
エような盗賊どろぼうがいるから旅人が難渋するのだ、さア名主へ連れ
て往ゆくから来い」

宇「盗賊どろぼうなんのと云うものではございません、名前までお明し
申す程でございますから、お得心下されば、これから主人の所へ
まいりまして、兩人で連印れんいんの上拝借します、どうも主人を世に
出さなければ済みません、神かけて御損は掛けませんから、何卒どうぞ
来年の三月までお貸し下さい、印形を押して証文を入れますから、

なア申し」

角「馬鹿野郎、五十両という大金を汝われがような始めて逢った奴に誰たれが貸す、主人のためだの忠義だなんと云やアがつて、己が金へ目を附ける盗賊どろぼうめ、さア名主へ来い、往ゆかねえか」

と拳を固めて右内の横よこ面こつを打ぶったから、顔から火の出るよ
うだが、

右「ア痛いたたく、御尤もでございませが、明かして願うのですから、私わたくしの身体は主人のためなら十や廿打ぶたれましても厭いといません、主人は立派な侍で、あんな所へ置く人ではありません、江戸表へ参りさえすれば、百石取りぐらいになるのは造作もございません、主人さえ世に出ればお金の融通も出来ますから、もっと早く御返

却致します、何うぞ貸しておくんなさい」

角「黙れ、汝え己に打たれるか」

右「へえ、お打ちなさい」

角「さア此処へ来い」

と髻を取つて引寄せて、二十ばかり続けて打ちましたから、実に頭の割れるほど痛いが耐えて、

右「それで貴方御承知なら主人の所へどうか御一緒に御出で下さい」

角「馬鹿野郎、まだ金を借りたいと云うか、名主へ連れて往くのは面倒だから打のめしたんだ、往けつたら往かねえか」

と云いながら力に任せて右内の胸を蹴て、横面をポーンと打つ

たから、其処へ倒れました。日頃柔和な右内だが、余りのことと思わず道中差へ手をかけて角右衛門を瞋む。

角「汝われア脇差見たようなものをさして、己を斬る気か」

右「なに斬る気はございせんが、打たれぶば金を貸してやると仰しやつたから打たせたのに、打つた上に土足に掛けて金も貸さず、私も武士の禄を食はんだもの、見ず知らずの土民に足下そっかに掛けられましては捨ておかれません、何うあつても貸されませんか」

と威おどして取ろうと思ひまして、ピカリと引抜く刀の光りに、百姓だから驚きまして、トツ／＼と逃出したから、右内は跡を追掛けて往ゆきますと、彼の百姓は運悪く木の根へ躓つまずいて倒れる処へ、右内得たりと上に乗し掛りて百姓の頬ほへ抜刀ぬきみを差附けて、

右「さア貸しておくんなさい、お前さんは人を土足に掛けるとは
あんまり余ではありませんか、さア貸して下さい、どうあつても貸して呉
よんどころれなければ抛なくお前さんを殺さなければなりません、さア貸し
つつぶて下さい、さア貸さなければ殺しますよ、お前さんは五両五
粒の馬を買うような立派な人ではありませんか、貸して下さい、
貸せないかい、」

と責めつけられても百姓は生命いのちより金の方が欲しいと見えて、
「盗賊どろぼう々々」と云う声こたまが袂たれに響たれきますが、誰たれあつても助ける者
はありませぬ。此処おつかいむらは追貝村の入口で、西の方は穂高山ほたかやま、東
は荒山あちやま、北の方は火打山ひうちやまで、南の方は赤城山あかぎやま、山又山の数か
ずさかとうげ坂峠、大樹は生茂つて居りまして、大泉たいせんこせん小泉という掘割の

岩間に浮島の観音というのがあつて、赤松が四五本川^{かわべり}辺へ枝を
 垂れ、其処に塚が在^あつて、翁^{おきな}の詠んだ「夏来ても只一つ葉の一つ
 かな」という碑があります、此の大泉小泉の掘割から堅^{かたしな}科川と
 いう利根の水^{みなかみ}上へ、ドツくと岩へあたつて落します水に移る
 は夕日影、さしひらめく刀の光り、右内は心がせきますから、サ
 アくと責めつけられ、下では只^{ひと}人^{ころし}殺々々と云つている。
 此の時向う山を通りかゝりましたのは鹽原角右衛門で、先刻右内
 に別れてより、家に帰つて只うつくと致して居りましたが、
 「お猟にでもいらした方が宜しゆうございませう」と女房の
 勧めに、鉄砲を担いで山狩に出ましたが、小鹿を見失つて帰る折
 から、向の岸で「盗^{どろぼう}賊々々」という声がするが、雑木山の林で

生茂つて、下は薄暗く、確しかとは見えませんが、旅人が山賊に出逢つたに違いないから助けてやりたいと、片膝立って有合わす鉄砲に玉込めいたし、引金へ手を掛けて、現在自分の家来なる忠臣岸田右内と知りませんから、胸元へ狙いをつけましたが、是から何う相成りますか、この次に申上げます。

二

引続きまする鹽原多助一代記は多助が八歳の時のお話でござります。彼かの岸田右内は忠義のためとは云いながら、心得違いに見ず知らずの百姓が五十両懐中致して居りますを知って、無心を云

いかけますと、彼の百姓は驚きまして争いとなり、右内は百姓の
 転びし上へ乗つかゝり、お主しゆうのためには換えられぬと、嚇おどして五
 十金を奪おうとする。下では百姓が人殺しくくと云つて居ります
 が、往来は稀な山村やまむらで、名にお上野こうずけのくに国東口の追貝村、頃
 は寛延元年八月の二日、山曇りと云うので、今まで晴天でいたの
 が暗くなつて、霧が顔へかゝりました、暗さは暗し、向う山では
 鹽原角右衛門が山賊を打とめ、旅人を助けんと家来と知らず鉄砲
 の狙いを定めて、ガチリツと引金を引く拍子に、どうんとこだま罅へ響
 いて、無惨や右内は乳の上を打抜かれて一度は倒れましたが、
 一方かたへ刀一方かたへ草を掴んで立上り、足を爪立て身をふる慄わせ、
 ウーンと云いながら、がらくと血を吐き出しますと、其の血が

百姓の顔へ掛りますから、百姓は自分が打たれた心持がして、人殺し／＼／＼と慄えながら云っている所へ、鹽原角右衛門まるきが独ぼし木橋を渡つてトツ／＼／＼と駈けて来ました。

鹽「これサ御旅人ごりよじんお怪我はありませんか」

角「はい怪我アしたかもしんねえ、真赤な血が出やした」

鹽「それは私が今上の賊を打留めたによつて、其の血が貴方にかゝつたのだらう、それとも少しは切られましたかな」

角「へえ、道理で痛くも何ともなかつた、助かつたかな、有難うござえやす」

と血だらけになつた百姓が仰向いて見ますと、氈かもしか鹿あぶらなの膏無しよしに山猫の皮を前掛にしまして、野地草やちぐさの笠を背負い、八百目の

鉄砲を提げて、

鹽「まアお怪我が無くつて宜よかつたなア」

角「かりゆうど獵夫ゆうどさんでござえやすか、既に此こ奴いつに殺される所を助か

りやした、私わしの懐中に金のあるのを知つて跡を尾つけて来て、取ろ

うとするから、名主へ連れて往ゆくべえと思つていた所が、既に殺

される所でがんした」

鹽「いや悪い奴でございます」

と云いながら賊を見ると右内だから恟びっくりして、

鹽「右内やア〜、心得違ちがいをしたな、右内やア〜」

と呼ぶ声が忠義の心に通じましたか、右内は漸よう々細き目を開

いて見れば、目の前に主人の顔、

右「旦那様々々々」

と云いながら鹽原の手に縋り付く。

鹽「何故^{なぜ}心得違ないをした、手前も元は侍ではないか、如何に落ぶれ果て、食うや食わずの身となるともナア、何故其の様なさもしい了簡なに成つてくれた、渴かつしても盜泉とうせんの水を飲まず位の事は心得ているではないか、何ういう訳で人の物を奪とる氣になつた、手前とは知らずナ、此の角右衛門が旅たび人を助けようとして打留めたのであるぞ、これ許してくれえ〜」

というに、右内はハツ〜と息を吐ついて、ものが云いたいが、外へ出る息ばかりで、漸く微かすかな声を出しまして、

右「旦那様、八年ぶりで貴方にお目にかゝりました所、彼のあの通り

見る影もないお身の上、御新造様からも五十金才覚してくれと家
来わたくしの私へ手をついてのお頼み、此の旅人が金を所持して居ります
のを見て、あなたを世にお出し申したいばかりで心得違いをい
たしました、あなたのお手に掛つて死ぬのは本望でございませ、
永らく御奉公をいたして、御恩を戴いた御主人の妹を連れ出して
逃げるような心得違いを致しました右内ゆえ、天罰主しゅうぼつむく罰報い
来きたつて、只今此の所で旦那様のお手にかゝつて死ぬのはあたりまえ当前
でございませが、江戸表に残つた女房おかめと、まだ年のいかな
い娘が此の事を聞きましたらさぞおげ嘸歎きましようが、決してどろぼう盜賊を
して殺されたのではない、旦那様を江戸表へお連れ申したいと思
う心得で、かよう斯様な事を致しましたと云う事を、旦那様から仰せ聞

けられて下されませ、あゝ最^もう目が見えん、此の世のお別れ」

と云いながらバタリと倒れましたから、鹽原も思わず声が出ま
して、

鹽「あゝ不憫^{ふびん}な事をした、家内が聞いたら嘸歎くであろう、許し
てくれ」

と歎くのを百姓が聞いていて、ホロリ／＼と泣出しました。

角「とんだ事になりました、あゝ金を貸せば宜かった、道理で主
人のために金が入るだ、主人も私^{わし}も印形を捺^ついて証文を張るから
って名前さえ明かしたが、よもや、嘘だと思ふから貸さなかつた
ツけ」

鹽「はい全く私^{わたくしども}共の家来でございまして、手前を世に出したいば

かりで、此の様な事をいたしました、何卒御勘弁を願います」

角「御勘弁どころじゃねえ、鉄砲を打たなけりやア己が殺される所だ、何とそう云う良い家来を鉄砲で打つたら嘸悲しかんべえ」

鹽「あなたも不憫と思召すならば、此の屍骸は私一人では持つ

てまいることは出来ませんが、此処に細索ほそびきがありますから、こ

れで括からげて吊りまして、鉄砲の差荷さしにないで、一方担かたいではくれま

せんか」

角「ハア担ぎますべえ」

と泣なくく担いで小川手前まで帰って来ました。家うちではお清は

角右衛門の帰りが遅いから案じて居ります所へ、

鹽「今帰ったよ」

清「お父様とつさまがお帰りだよ、おやく／＼あなたお一人でいけないからお手伝いが入りましたか、猪いのでも打ちましたか」

鹽「いや飛んだ物を打ちました、お前が聞いたら嘸驚くだろう、話をするからマア貴方、此方こちらへお上り」

と百姓を上へあげ、これ／＼の訳だと話をして、

鹽「おせい、間違ひとは云いながら、今朝別れた右内を鉄砲で打とうとは思わなかつた」

清「何処どこに居ります」

と云うから簞笠を反除はねのけますると、情ない死状しにざま。

清「あゝ、今朝お前に別れる時、金さえあれば旦那様が元の侍になられると無理な事を頼んだから、私共わたしども兩人を世に出したいばかり

りで、非業ひごうな死をさせたのも、私わたくしが酷ひどく頼たのんだから心得違こころあはいをしたのだろう、あなた何なにうして人ひとと獸けだものと見違まえました」

鹽「いゝえ、獸と間違まちがえて打うったのではありません、此この方かたにかゝつた山賊さんぞくと心得こころえて打うつたのだ、泣なくどころじやない、お詫わびごとを申ませ」

清「はい、悲かなしいのに取とり紛まぎれ、御挨拶ごあいさつも申ましません、これは家来けらいとは申ましながら、私共わたくしどもの妹いもうとを女房にようぼうにして居ゐりますから、家来けらいと申ましても弟あとうと同じ事こと、後あとには七歳ななつになる子こもありまして、不憫ふくわんなものでござごいます、何卒どうぞ忠義ちゅうぎゆえと思召おぼしまして御勘弁ごくわんなされなて下くださいまし」

角わし「私も斯かういう事ことになるんなら話合わいにしたものを、打擲ぶちなぐる

べえと思つたら此様な事になつてしまつて、誠に氣の毒だ」

多「お父さん、なんで叔父さんを鉄砲で打つたかなア、江戸にいる叔母さんだのおえいという従弟が聞いたら、どんなに怨むか知れねえから、若し叔母さんが来たら、多助が間違て打つたと云うから、あんたは殺さねえふりをするが宜いよ」

鹽「あゝ宜いゝゝ、小兒にまで苦勞をかけて濟まない」

角「誠に年はいかねえが、へえ八歳ぐれえなもんで、へえ実のなる木は花から違うつて、あんたお侍えでござえやすな」

鹽「取紛れまして、まだ名前も申上げません、手前は鹽原角右衛門と申します浪士で」

角「イヤサ私が鹽原角右衛門という百姓さ」

鹽「へえ私が」

角「あんた何時から鹽原角右衛門と云いやす」

鹽「何時からと云つて先祖から」

角「私が^{わし}名前も先祖から」

鹽「手前の先祖は下野の国塩谷郡塩原村の郷土鹽原角右衛門という事が書類に残つて居りますが、精^{くわ}しくも調べては見ません」

角「私が^{わし}先祖も野州塩谷郡塩原村で、沼田へ来て鋤一つから今では田地や山も持つて居りやすが、それじゃア貴方も、元を洗えば同じ血統^{ちよじ}で」

鹽「妙な縁ですなア」

角「縁は縁だが、此^{こん}様な事になつては悪縁だねえ、さア此処に金

が五十両あるから、これで身形みなりを整えて、立派なお士さむれえになつて下せえ」

鹽「何う致しまして、見ず知らずの貴方に頂戴することは出来ません」

角「だつて元を洗えば、同じ血統ちすじじゃないか」

鹽「左様ではございますが、大金を戴く訳はありません」

角「訳がねえツていうが、あんたが鉄砲で打ぶたなければ、己おらア命を取られて、金も取られてしもうのだ、それを助かつたのだから貰つて下せえ、あんた此の金で江戸へ帰けえらねえと、此の右内どのが犬死になりやす、命を捨てゝも主人を助けてえというのだから、此の事が世間へ知れせえしなけりやアいゝのだ、貰つて早くお屋

敷へ歸かえつて下せえ」

鹽「いえ、家来が悪い事を致したのだから、手打ちにしても宜しいので」

角「それでは五十両で貴方あんたの大事でえじな物を買つて往ゆきやすべえ」

鹽「はい左様でしょうが、四年前ぜんの山水だいじで大事なものは皆流されてしまつて何もありません」

角「こりやア貴方あんたの悴せがれでしょう、これを私わしに下さい」

鹽「何う致しまして、これは一人の悴せがれですからいけません」

角「お前めえがた方は年わけが若わかえから未いまだいくらも子が出来るよ、己おらア四

十二歳になるが、いまだに子がねえから、斯ういう子を貰つて往ゆけば、こんな有ありがて難がたえ事はねえ」

清「これは何う致して上げられませんか」

角「鹽原の子を鹽原が貰うのだから、宜いじやないか」

鹽「上げられませんか」

清「とんだ事を仰しやいます、家来に無心を申したのも此の悴を世に出したいからでございます、何う致しまして出来ません」

角「よく考えて御覧なせえ、あんたが江戸へ往つて此の家来を此方へ埋めて、江戸から此の数坂峠を越して追善供養をしに来るこ

とは出来やアしねえ、私が此の子を貰つて往けば、私は沼田の下

新田、此所までは半日で来られるから、墓参をさせて、追善

供養もしようじやないか、私は三百石も田地があり、山もあり、

不自由はさせねえから、殊には、此の子のためには叔父さんに当

ると云うだから、子のねえ昔と諦めて下せえ」

鹽「成程面白い事を云う、親切な方だ、宜しい、上げましょう」

清「何を仰しやいます、多助を遣つて良人あなたどうなさいますえ」

鹽「宜しい、黙っている、これく多助、此処へ来い」

というと、多助はハイと云つて、愛らしい紅葉もみじのような手をついて其処へ坐る。

鹽「これく手前は私わしの本当の子ではない、此の沼田のお百姓の子だが、乳がないので藁の上から預かつて育て、くれとのお頼みゆえ、八歳まで育てたから、もう下新田とやらへ歸つて、角右衛門様御両親に孝行を尽せ、そうして此の死んだ叔父さんの追善供養をしろ、よ、いゝか解つたか、其のお前を育てた礼として五十

両を下すつた、此の金子で私が身形わしみなりを整えて江戸の屋敷へ帰るから、よう、よう分つたか」

多「あい、毎時いっでもお母さんつかが私を抱いて寝ていて、お父さんとっが金があれば江戸のお屋敷へ帰れると云うから、あゝ金が欲しいと思つても仕様がねえから、坊が今に大きくなれば稼いで上げべえと思つていたが、それじゃ厭だけれど、此の下新田の叔父さんの子のつもりで往ゆきやすべえ」

角「あゝ何でも知つてるからいけねえ、どうか聞き分けてくれよ」
鹽「宜く聞き分けてくれた」

清「お前お母さんつかが毎晩愚痴を云つたのをよく聞き分けておくれだ、お前も悪いたずら戯や何かすると不孝になりますよ、私どもはない

ものとお思ひよ」

角「有ありがて難えな、それではお達者で、また此地こつちの田舎のお父さんとつの家うちの方へも来て逢う事がありやすべえ」

鹽「いや屋敷奉公をたよりすると便が出来ん、殊にお前の為めにならんから、こりや多助、此の親は仮の親と心得て、沼田のお父さんとつに孝行をしろ」

多「はいく孝行をしますから、早くお屋敷へお帰りなさいまし」
と云われてお清は堪こらえかねて泣きながら、

清「寝ますと踏脱ふみぬきますから氣を注つけて下さるように、どうかお目にかゝりませぬが、御家内様に宜しく、御面倒を願います」
角「なアに心配するには及びやせん」

これから祝いに酒肴さけさかなで親類固めに仏の通夜と酒宴さかもりをして、

翌日三日の朝、村の倉田平四郎くらたへいしろうという名主へ届とどけをして、百姓角

右衛門が多助を十文字に背負いまして、夫婦は須賀川まで送つて来まして、夫婦は「どうか道をお厭いといなすツて」

角「へえ、道は気を注つげるから大丈夫でがんす、どうか屋敷へ帰つて御奉公をなされたら便たよりを聞かせて下さいよ」

鹽「御無音勝ごぶいんがちでございますから何分願います」

多「お父とつさん、お母つかさん、達者で屋敷へお帰んなせえよ」

と後身うしろみになつて此方こなたを伸び上つて見る。鹽原夫婦も見送りノ

泣く泣く帰りがゝりますと、向うからわい々という声で大勢いぜい駈けて来る其の先へ、真ましぐらに駆けて来たのは青馬あおうまで、

荒れに荒れてトツ／＼と来ます。此の道は左右が谷川で、一騎打きうちで何処どつちへ往くゆことも出来ません。あゝ此の子に怪我をさせては濟まないと気をもんでいると、見るより浪人鹽原角右衛門が馬の前に仁王立になつて、馬の轡くつわを押えて百姓に渡すと、幸い此の馬は角右衛門が買おうと云つた馬だから、直ぐに馬を受取つて、多助を馬に乗せて沼田の下新田へ参ります。浪人鹽原は角右衛門から恵まれた金で支度を整え、名主の所へ別れを告げに参りますと、名主も名残が惜いからお立たちい祝いわいをしたいと云うので、村で鹽原に劍術を教えて貰つた者もありますから、九月の三日まで留められました。これが鹽原多助の生おいたち立たちでございます。さてお話替つて江戸表に居りますおかめは、娘おえいが毎日お父とつさま様は未だ歸

りませんかと云われるので、おかめも案じて居りますと、堺屋傳吉は歸つて来まして、

傳「宇之助さんは上州の小川村で知人しるべに逢つて、別れて私は沼田の大竹屋で待つていたが来ないので、何時までもばかりくと待つてもいられないから歸つて来たが、未だ宇之さんは歸らないか」と云われたので、種々いろく心配して神鬮みくじを取つたり売卜者うらないしやに見て貰いなどしたが分らない、殊に借財方から責められて、逆も身代が持切れませんかから、身代をしましまして、七歳ななつになるおえいを十文字に背負しよいまして、心当りを尋ねようと出立しましたは九月の三日、唯上州小川村と聞いた計りで、女の独旅ひとりたびでござりますから、馬士まごや雲助などの人の悪い奴にからかわれ、心細くも

漸々よう／＼のことで中仙道の 大宮宿泊り、翌四日は鴻巢こうのすの田本たもとが中食ちゆうじきです。例の旅費が乏しいから勿論駕籠なんぞを雇うことは出来ず、馬を雇うくらいですが、それも十分には往ゆきません。漸々田本で中食を誂あつらっていると、側にいる客は年とし齡ごころ四十一二になる女で、衣裳なりは小弁慶の衣物きものに細かい縞しまの半纏はんまぎを着ている商あきゆ人うどてい体たいのおかみさん、今一人は息子が供か、年とし齡ごころは廿一二になる商あきんどてい人たいの人品のいゝ男で、盲めくらじま 縞しまの脚絆こうがけ甲か掛かけも旅馴れた様子で、頻りに中食をしておりますと、男「お母つかさん、いゝお子でございますねえ」女「あゝ、いゝお子だねえ、もしえ、おかみさん、あなたのお娘むすめ子こでございますか」

かめ「はい、左様でございます」

女「お幾歳いくつになりますえ」

かめ「はい七歳ななつでございます」

女「あなたは何処へおいでゞす」

かめ「私は上州小川村までまいりますのですが、小川村というと何処へ出ましたら宜しゅうございましょう」

男「小川村というのは上州も東口とやら、山国やまぐにと聞きましたが、大層遠方へおいでゞございますねえ」

女「お前さんは江戸言葉のようですが、何の御用で小川村へお出いでになります」

かめ「はい私の良人わたしつれあいが小川村に居りまして、それへまいります、

誠に旅馴れませんから困ります」

女「左様ですか、わたくし私どもは前橋に居りますが、もとは中橋で生まれまして、江戸生れでございますから、前橋でさえ寂しくついていけませんに、そんな山の中へおいでになるのは、お一人でさぞ嘸マアお心細いでしょう、ねえさん此処へお出で」

人見知りをしない子ですから、

えい「おばアさん」

と顔を横にして云うから、

女「さア此のお肴をとくお喫りあが」

かめ「あれさ、いけないよ、どなたさま誰方様の所へでも構わずあがつて

困ります」

女「私はわたし子煩悩ですが、子と云うのは此の悴ばかりで、女の子は
 どうも可愛かあいらしくツて、さア、これをおたべ」

と彼是いう内に直すぐに馴染みまして、取附とついたり引附ひついたりする
 から、

女「どうせ熊谷くまがいへ泊るつもりで、松坂屋というのが宜しゅうござ
 いますから、そこへ泊りましょう、貴方はお草臥くたびれでしょうから、
 私おふが負おつて上げましょう」

というので、おかめも一人旅で、連が出来たから心嬉しく思っ
 ておりますと、最すつう悉かり皆そのおかみさんに馴染んで、おかみさ
 んと一緒に寝なければ聞かない。

女「今夜は私が抱いて寝ますよ」

というので、かみさんが抱いて寐て、翌日出立しました。前には熊谷より前橋へ出ますには本庄宿の手前に御堂坂みどうざかと申す所より榎木戸村えのきどむらから八丁川岸ちやうがし、それより五料りようと申す所に日光一の関所がございます。当今馬車道になりましたが、其の頃は女は手形がなければ通られぬとて、久下村くげむらより中瀬なかせに出て、渡しを越えて、漸々さかい堺さかいという所まで来ますと、七つ下りさがになりました、足が疲れて歩かれませんか。

女「何うしよう、伊勢崎いせさきまで往ゆけようかね」

男「お母つかさん、此の辺には好いい宿屋がないから、伊勢崎の銭屋へ泊とりましょう」

女「そうしよう、そうしておかみさんも疲れているから駕籠を、

アレサどうせ私どもが乗るんですから、宜しゅうございます」

と云つている中に、男が暫く経うちつて、馬を一疋駕籠を一挺頼んで来ました。

男「お母さん、駕籠は一挺ほかありませんから、おかみさんは馬に乗り附けますまいから、おかみさんを駕籠に乗せて、お母さんは馬でお出でなさい」

女「それじゃアそうしよう、お前はお母さんとお駕籠へお乗りよ」
えい「いゝえ、わたし私や叔母さんと一緒になくツちやいや」

かめ「あれまア聞き分けのない事ばかり」

女「それでは仕方がないから、少しの間気味が悪くも乗つて御覧なさいな、馬には乗つて見ろ、人には添つて見ろということがあ

りますから」

かめ「はいく乗つて見ましよう」

とこわ／＼乗りますと、乗り付けませんで、殊に道中馬は危ないから、油汗が出て確しつかり捉つかまっている。シャン／＼／＼と馬方が曳き出す。これから百々どうくむら村へ出まして、与久よくむら村から保泉ほずみむら村へかゝりますと、駕籠より馬の方が余程よっぽど後おれましたから、心は焦せけど馬は緩のろく、後あとより来る男は遅く、姿は見えませんが、雑木山がありまして、左右から生茂りて薄暗い所へ往ゆきますと、馬士まごが立留つて、

馬「あんた、此処から下りて下さい」

かめ「此処から下りちやア仕様がないよ、伊勢崎の錢屋まで往いく

のじやないか」

馬「私^{わし}は与久村の者だから駄賃より出越して来たんだから、此処で下りて下せえ」

かめ「私は始めてゞ困るから、跡から兄さんの来るまで待つておくんなさい」

馬「いけねえから下りておくんなせい」

と云いながら無理におかめの腰を押えて引きずり下してしまいました。おかめは道中馴れないから、

かめ「何をするんだ」

と云つても仕様がな、其の中馬方^{うち}はシャン／＼と馬を曳いて往つてしまいましたから、

かめ「誠に道中の馬士というものは悪いものだ、あゝ彼の兄さんは何うしたろう」

とおどく／＼していると、雑木山から草を踏んで来る悪者が、物をも云わず掴まえるから、「アレー」という中うちに一人が足を縛ゆわえ、一人が手を縛え、担いで行ゆきますところへ通りかゝりましたのは、沼田下新田の角右衛門で、木崎から帰り道、暗さは暗し分らないから、悪者に突き当ると、おかめを担いだなり倒れました。角右衛門は見ると、女を担いでいるから、此こいつ奴は盗どろぼう賊だなど、突いきな然り拳骨で打ちぶますと、百姓で力があるから、痛いの痛くないの、悪者は驚いて逃げ出しました。

角「おかみさん／＼怪我はありませんか」

かめ「はい、誠に有難うございます、女一人でございますから、
 どうも苛い目に逢うところで、お蔭様で助かりました」

角「全体あんたは何処へお出でになるんで」

かめ「伊勢崎の銭屋へまいります」

角「私も銭屋へ往くんだから一緒に往こう、お前さんお一人かえ」

かめ「先へ娘がまいつて居ります」

角「何しろ一緒に往きなさい」

とこれから伊勢崎へ来て銭屋へ往くと、左様な娘さんを連れて
 来たお客はありませんと云うから、ひよつと宿屋の名前でも違い
 はしないかと、外の宿屋を捜しても知れないから、角右衛門は、
 こりやア此のおかみさんは悪者のために、娘を勾引されはしな

いかと思ひしゆえ、

角「おかみさん、娘子むすめっこさんは器量は宜いかえ、フウン、親だから
 よく見えるだろうが、七歳ななつとはいいいながら、勾引かどわかと云うものがあるから、見ず知らずの子を可愛かあいがるのは、了簡があつてかどわか
 したのではねえかと思つてサ」

かめ「はい、私の良人やどが帰りませんから、尋ねて参りますのでござ
 いますが、假令夫たとふつとめぐに逢あひましても、一人の娘をかどわかさ
 れましては、どうも良人に濟みません、何処の御方かは存じませ
 んが、娘を取返すことは出来ませうまいか」

角「取戻すことも何も出来ねえが、お前めえさんは何処の者だい」

かめ「私わたくしは江戸の本郷春木町に居ります旅商人たびあきんどの、岸田宇之助

と申す者の女房でございます」

角「え、それじゃアお前はまえ鹽原角右衛門というお侍さむらえの妹で、其の家来けれえの岸田右内さんのおかみさんで、おかめさんと云いやすんかえ」

かめ「何うして御存じですネ」

角「何うしてツて、もう魂たまげ消た、実に不思議な縁さ、併しかしあゝ気の毒なことだが、あんたのお兄あにいさん角右衛門様という人は、小川村に浪人して居るだが」

と云われて驚き、

かめ「あなた、何うしてそれを御存じでございます」

角「兄あにさんにも御亭主にも私わしが逢わせようが、まだ兄さんは支度

も出来めえから逢わして上げやすべえ、心配しねえが宜ようがんす」
と云いましたけれども、沼田の角右衛門は、それでは夫が非業おつとに死んだ事も知らず、子供を連れて来る道で、娘をかどわかされるとは気の毒な事と、おかめを不憫に思ひまして、これから娘をかどわかされた事を、其の地の名主にかゝり、八州様へ願つて手配してもらい、おかめは計らず下新田の角右衛門の世話になりますというお話は次に申上げましょう。

三

沼田下新田の百姓角右衛門は、私用がありまして木崎までまい

って帰りがけ、保泉村という処で計らず岸田右内の妻おかめの災
 難を助け、親切に世話をして身の上話を聞くと、これ〜という
 から、あゝ不憫なものだ、小川村で非業な死を遂げた岸田右内の
 妻か、殊には夫を尋ねて来る途で、娘までかどわかされたか、如
 何にも気の毒な事と心得ましたから、直ぐに伊勢崎の名主へ掛り、
 八州へ願つて、其の悪者をいろ〜と捜しました所が、三日ほど
 経ちまして縛られてまいりました悪者三人は、百々村の倉八と太
 田の金山かなやまの松五郎、今一人いちにんは江田村の源藏げんぞうで、段々お調べ
 になると、其の者共の申口もうしぐちに、旅稼たびかせぎの親子連の者に金を
 三両宛ずつもらつて頼まれたので、何と申すか其の者の名は知れませ
 んと云うので、いろ〜お調べになつたが、親子連れの旅人は更

に行方が分りませんゆえ、三人の悪者は江戸表へ送られました。

おかめと角右衛門は日数ひかずが長く掛りまして、伊勢崎に長くも居おら

れませんから、角右衛門が「私わしは沼田の下新田の者で、お前の兄あに

さんにも逢わしてやるから、私の家うちへ来なさい」というので、一

緒に下新田へ連れ帰りましたが、五日程かゝりましたから、下新

田の角右衛門の宅では余り主人の帰りが遅いゆえ、案じくらし

居ります所へ、

角「今帰けえつたよ」

妻「おや良人あんたマアこんな遅くなる訳はねえが、何処どけへ往ゆきやん

した」

角「少し訳えあつて、飛んでもねえ間違まちげえが出来て、此方こつちの災難見

たような訳で、ハア大きに日数ひかずもかゝったから案じていべえと思つていたが、手紙も出さねえでハアどうも」

妻「そうでがんすか、多助も父様とっさまが帰けえらねえつて心配しんぺえして、五八も案じているし、村でも心配しんぺえして、見舞みめえに来やすから、何も追剥に逢う筈はねえが、久しぶりで往つたんだから、木崎の親類で留められて居るんだんべーつて云つて居やんした、五八、われえ其所を片付けて盥たれえをあげろ、戸口に立つて居りやんすのは誰だ」

と見ますと、年齢としごろは廿四五で器量はよし愛敬のある婦人でございますから、

妻「あんた此処えお掛けなせえ、お連れじゃありませんかえ」

角「あゝ、これは己が伊勢崎で合宿あいやどになつたおかみさんよ」

妻「はアイー」

かめ「誠に不思議な御縁で、此の度は此方こちらの旦那様に助けられまして、行き所ゆもない身の上で、可愛かあいそうだと仰しやつてお連れ下さいましたものでございます、どうか行末長くお目を掛けられまして下さいまし」

女房はハイと云つたが、見馴ぬ女、殊に姿といい言葉遣いとい、近所の者でないから、

妻「旦那さん何処から此の方を連れて来やんした」

角「おれが保泉村を通りかけて、此の内儀かみさんの難儀を助けてから、余儀なく此の内儀さんの事にかゝつて、泊つて居るような訳

で、五日銭屋へ逗留していたのよ」

妻「へえ、此の内儀さんと一緒に銭屋へ逗留していて、へえ、そうとも知らねえで、家^{うち}じゃア案じていたのに、銭屋へ泊つて此^{こん}様な美しくい内儀さんと五日も逗留して娯^{たの}しんでいたんでがんすか、良人^{あんた}マア幾^{いくつ}歳になるだか」

角「馬鹿ア云え、此の内儀さんに災^{せい}難^{なん}があつて、伊勢崎の名主へ掛つて、八州様へ頼んでいたのだ」

妻「八州様へ頼んだかお女郎屋へ頼んだか知んねえが、五日銭屋へ泊つて居^いれば知れたもんだ、ハア、だめな、家^{うち}じゃア案じて居るものを、そりよう家を五日も明けてよくのめくと帰^{けえ}られた義理だかマア」

角「あゝ云う事をいう、マアおかみさん心配しねえが宜い、仕様のねえ婆だ、四十面をさげて飛んだ事をいやアがつて、マア貴方心配しねえがようがんす」

と云つて少しも訳をおかめにも云わず、又女房にも云わないから、おかめは居にくうございます。四五日経つ中、雪が降りまして、道が絶えてしまいましたから、角右衛門はおかめを小川村へ連れて往つて、鹽原角右衛門に逢わせたいと思つても、連れて行くことが出来ませんので、其の年も暮れて、翌年寛延二年三月になりまして、角右衛門はおかめを連れて、小川村の鹽原の所へ尋ねて往きますと、鹽原は去年九月の三日に此の村を出立したと云うから、あゝ、それでは直ぐに支度をして立つた事かと思ひ、角

右衛門も仕方がないから岸田右内の墓場へまいりますと、まだ新しい卒塔婆が立ちまして、村の者が手向けますか、香花こうはなはたえずに上げてあります。其の石塔の前へまいります、

角「もしお内儀かみさん、此処へ来なせえ、お前めえの御亭主に逢わせてやるから此処へお出でなんしよ」

かめ「誠に不思議な御縁で、あなたがお助け下さつて、今年まで御厄介になつて居りましたが、兄も江戸表へ出立しましたとの事ですわたくしが、私の夫岸田屋宇之助は此の村に居りますか」

角「はい、これがお前めえの御亭主でがんす」

かめ「はい、何処に居ります」

角「そこに徹巖忠操信士てつがんちゆうそうしんしと書いてある、これがお前めえの亭主さ」

かめ「えゝ、それでは私の亭主は、あの亡りましたのですか」

角「訳をいうのも気の毒だから、今までは云わなかったが、云わなけりやア分らねえから云うべえが去年九月の二日、私が用があつて金を持って千鳥村まで往くと、あんたの御亭主が後から来て、もし旅人さんく〜というから、はいと云つて振りかえると、私が主人の為に五十両入るだから貸して呉れ、ば、主人が江戸へ帰れる、損は掛けねえから貸して呉れると手をついての頼みだが、見ず知らずの者に其様な事を云うのだから、盗賊だと思つて打ち撲るべえと思つたら、お前の御亭主が脇差を抜いて追掛る時に、私が打倒んだ上へ跨がつて殺すべえとするから、一生懸命に人殺しいく〜と云うと、其の時向山を通り掛けたのは貴方の兄

さんで、鹿を打遁ぶちのがして帰る路けえで、私等わしらを見て盗賊どろぼうが旅人に掛
 ったのだと思つて、鉄砲を撃つて、其の玉が宇之助さんの胸へ当
 つて、現在自分の家来けらいと知らずに兄さんあにが鉄砲で打つたと云つて、
 おい／＼泣きやんすから、私もわし氣の毒になつて、死骸しがいを小川村へ
 送つて往つて身の上話をすると、あんたの兄さんあにも、私もわし元は先
 祖が一つで、一人は沼田へ出て百姓になり、一人は阿部様の家来けらい
 に成つて又此処で巡り逢おうとはハア実に驚いた訳で、不思議な
 縁でがんすから、私がわし五十兩遣るべえと云つた処が、受けねえと
 云うから、何うしたら宜かんべいと思つて、岸田が犬死になつて
 可愛ひとりむすこそうだから、独息子むりむていを無理無体に貰つて来たのが家うちにいる
 多助さ、あんたの為には甥でがんす、其処そけえ又貴方あんたを私がわし助けて、

家に連れて来て見れば伯母甥が斯うやって一つ所に来て、委くわしい話をすると云うのは、前世からの約束と諦めて、あんたも御亭主さんの死んだ事は、何時までも鬱々と思つていて身体にでも障るといけねえから、諦めておくんなし」

かめ「誠にそう云う事とは知らず、連の者が先へ歸つて来ても良や人では歸つて来ませんから、何うした訳かと案じて居りましたが、田舎では其の地に長らく居りますと、養子にすると云う事を聞きましたから、良やど人も外ほかへ養子にでも往つたのではないか、女房子を振捨て、他ほかへ養子に入るとは余り情ない不実な人と怨んでいたのは私の過わたくしまり、良つれ人が左様あいいう訳になりました、唯たつた一人の娘を勾かど引わかされましては生甲斐のない身の上、寧いっそ一思いに死に

とうございますから、先刻さつぎ来る道にありました谷川へ身を投げて死にますから、貴方あなたはお先へお帰り下さいまし」

と泣倒れますから。

角「そんな馬鹿な事を云うもんじゃねえ、あなたの娘は勾かどわか引わかされても、死んだか生きているか知んねえのだから、それよりも私わしが家うちへ帰けえつて多助ふたりと兩人で娘の行方を捜し、私も亦捜してやるから、手分をして尋ねたらおえいさんとやらにも逢えねえという訳もねえから、今早まって命を捨てるよりも、生いきていて、死んだ宇之助さんの菩提ぼだいを弔うのは貴方あなたと多助ばかりだ、何卒どうぞ私の云うことを聞いて下さい、ようく」

と云われて、おかめは「はいく」とばかりで泣いて居りまし

たが、角右衛門の言葉も捨兼ねて、是非なく兩人ふたりで沼田へ歸つて
参りましたが、扱さてお話ふた両つに分れまして、鹽原角右衛門は其の前
年の九月の三日に小川村を出立致しまして、沼田の御城下に泊り
まして、翌日は前橋に泊り、其の翌日が熊ヶ谷泊りで、それから
鴻の巣、桶川と中仙道を下りましたが、足あしよわ弱よわの連で道も抄はかど取り
ませんので、天神橋へ掛りますと日はトツプリ暮れ、足は疲れま
したから御新造は歩けませんから、蔦屋という茶屋へ寄りました。
鹽「誠に困ったものだなア、足は痛むかな」
清「へい、幾ら薬を付けても癒なおりませんので困ります」
鹽「誠に草鞋わらじくい喰いと云うものは悪いものでな、其の癖山道は歩き
つけていたが、平地ひらちは却かえつて草くた臥びるといふのは何ういうものだろ

う、これ／＼女中、これから大宮宿までは幾程あるな」

女「これから一里四町ありやんすが、ハア日は暮れてお困りですがんしょう」

鹽「当家では泊めて呉れまいかな」

女「こゝな宅ではハア堅うござえやすから、どんな馴染のお客で

も泊めましねえから三味線や芸はいりやしねえよ、私どもは堅え

家でなくつちやア勤まりましねえ、其の代りにやアこゝな家は忙

がしくて、庭の中を一日に十里位の道は歩くから、夜は草臥れて

顛倒ぶつくりけえつてしまうのサ、それから見ると熊ヶ谷の女共は柔え着

物を着ていて楽な代りに、此家へ来ると三日も勤まりやせんで、

ハア誠にどうも何もござえやせん、玉子焼に鱒汁どじょうじるに生節豆腐なまりどうふ

でハア」

鹽「よし／＼、何でも好いから早く」

と云うので、此の家で支度を致しまして、

鹽「これ／＼女中勘定をしておくれ、これお清、此の包をお前持
つて往つてお呉れ、これは端錢はしたで出して置くから、これは私わしが持
つて行く」

と云いながら荷を分けて居りますと、側にいた年としごろ齡廿二三で
半合羽はんがっぱを着ている商人あきんどの男が、草鞋よこの穢れたのを穿はいて頬ほ頬うか
冠むりをしながら、此の男も出に掛りますと、突いきなり然なり傍はたにあつた

角右衛門の風呂敷包を引攪ひっさらつて逃げましたから、角右衛門は驚
きまして、盜賊どろぼう待てと云いながら追掛けました。彼は一町余り

も追掛けて、加茂宮村という所から西へ別れて加村かむらまで三町ばかり追掛けましたが、鹽原は最早間に合いませんから脇差にあつた小柄をズツと抜いて手裏しゅりけん劔に打ちますと、打人うちては名におう鹽原角右衛門の腕前ですから、狙い違たがわず悪者の右の太股へ立ちましたから、アツと云つて畑へたおれました所を、角右衛門は悪者の髻たぶさを取つて引ひきたお仆し、

鹽「やい盗ぬすつと人、旅りよちゆう中の事ゆえ助けて遣るまいものでもないが、包をよこせ」

悪「はいく貧ひんの盗みでございます、どうか命ばかりは助けて下さい」

鹽「黙れ、貧の盗みだなどと申し、左様な事に欺だまされるようなも

のではない、今度は免ゆるして遣わす、以後たしなむか」

と云いながら、側にあつた榎えのきの根株へ頬ほつぺた片こすを擦り付けますから悪者は痛くて堪たまりません。

悪「どうか御勘弁を願います、盗賊どろぼうではございません、実は私

の母親おふくろが眼病で難渋して居ります、それに七歳ななつになる妹がござ

いまして生計くらしに差支えますから、母親に良薬いよくすりを服ませる事が

出来ませんので、何卒どうかして良薬を服ませて癒して遣りたいと思

まして、実は今こんにち日鴻の巢まで薬を買いに参りまして、天神橋の

蔦屋で休んでおりますと、旦那様が荷物をお分けなすつて、これ

だけは端金はしたで出して置くと仰しやつたのを側で聞いておりました、

不図ふと悪い了簡を出して、お包を持って逃げにましたが、中にお書付

でも在あつてはお氣の毒でございますから、今晚のお泊りへ持つて出て返そうと思つて居りましたのでございます、誠に悪い事を致して済みません、どうか御勘弁を願います、足が痛くて歩けませんから、どうか小柄をお抜きなすつて下さいまし」

と泣きながら申しますと、

鹽「成程賊という者は様々のことを云うものだな、先刻荷物を攫さらつて往ゆく様子が貧の盗みとは思えんわい」

悪「いえ真ほん実とうの盗どろ賊ぼうではございません、其処わたくしうちが私の家でございますから、嘘だと思ふなら往つて御覧なすつて下さい」

と云いながら、ダク／＼血の流れる足を引摺ひきずつて、上総戸かずさどのもとにいざり寄り、

悪「お母つかア、お前の眼病を治そうと思つて飛んだことを致しました、此のお侍さむらい様にお詫わびごと言をしておくれよ」

と云いながら戸を明けますと、四十三四の母が眼病の様子にて、其の側に七歳ななつぐらいになる女の子が居ります側へ這いより、

悪「お母ア、お前の病氣を癒そうと思つて済まねえ事と知りながら悪い心を出して、此処にいる旦那の荷物を奪とろうとする所を捕つかまつて、今お詫をしてゐる所だ、お母アお前もお詫をしておくれ、お母ア、よう、よう、」

母「何か悴せがれが不調法を致しまして申訳がありません、何卒どうぞお免ゆるし下さいまし」

鹽「これは手前の宅か」

と云つて居る所へおせいも駆けて参りまして、

鹽「よくお前来たねえ」

清「はい、様子が分りませんで心配になりますから参りましたが、アノ包はございましたか」

鹽「なに、包は奪とられはせん」

母「何方どなたさま様でございますか、さっぱり見えませんが、どうか御

勘弁を願います、不届至極な奴でございます、サアこれへ来いノ
」

といいながら悴たぶさの髻を取つて引寄せまして、三つ四つ続け打うちに
撲うちました。

悪「お母つかア勘忍してくれく」

母「勘忍して呉れと云つて、コレ手前も元は禄を取つた者の子ではないか、たとい仮令如何に貧乏すればとて、人様の物を奪つては亡なつたお父様とつさまに濟まない、どういう了簡でそんな事をした」

と泣きながらむしりついて打擲ちようちやくしますから、側に見ていた鹽原角右衛門も氣の毒に思ひまして、

鹽「お母免ふくゆるして遣つて呉れ、これが貧の盗みだという事だから、併しかし仮令親たといの為でも人の物を取るのは宜しくないぞ、以後斯こん様な事があつてはならんよ、これは少しばかりだが、小児こどもが怖いくと云つて泣いているではないか、さ、これは聊いさかだが小遣いに遣るから何か好きな物でも母はに買つて遣れ、だがそれと知らず氣の毒なは足に手裏劔を打つたから嘸痛さぞむであらう、余程痛むかな、

それは貴様が心得違ひをした故仕方ない、よろしくこれで別れる」
母「どう致しまして、悴が悪い事を致したのに金子を戴くなんぞ
という事は出来ません」

鹽「少しばかりだが取つて置け」

悪「はい〜お母さんつか折角の思召だから戴いて置きな」

母「面目次第もございません」

と云いながら親子の者が夫婦を見送りまして礼を申します。此
方も取急ぎますから出て行きました。親子は上総戸かずさどの所まで鹽原
夫婦を見送り、雨戸を閉て、顔見合わせ、彼の母親おふくろは眼病だと
云つたのが眼をパツチり明きまして悴に向い、

母「間拔、どじをふんじやアいけねえじやねえか」

悪「え、悉すつかり皆遣り損なつてしまつた」

母「躰びつこに成つてしまつて高飛をする時どうする積りだ」

悪「此の小柄は滅法いてに痛えや、お母つかア彼奴あいつは今夜大宮の栗原へ泊ると云つたから、今夜後あとから往つて意趣返いしゆげえしに仕事をして来るからよ」

母「よしねえ、お前めえのすることは何でもどじばかりで仕様がねえ、又遣り損うといけねえから止しねえよ」

と親子で争つてゐる所へ、ガラツと戸を明けて来たのは繼立つぎたての仁助にすけという胡麻の灰。

仁「お母ア何しろ此処こゝにいる事は出来ねえ、あの子を勾引かどわかした事からづきがまわつたという訳は、百々村どゞむらくらの倉八と金かな山やまの松まつと

えだむら
江田村の源藏げんぞうが捕まつて、己達へ足がついて来たから、直すぐに逃げなくつちやアいけねえぜ」

母「それ見ねえな、躰に成つて何うするんだい、此処に薬があるから附けねえな」

仁「どうしたんだい小平こへい兄貴、やア何うしたんだ」

小「なアに詰らねえ仕事を仕損なつて」

母「此の野郎は遣り損つて足へ小柄を刺されて、痛くつて逃げる事が出来ねえ、本当に半間はんまな野郎で仕様がねえよ」

小「其代りにやアこれから此の小柄を持って行つて、足を痛められただけの仕返しけえしをしなくつちやならねえ」

と言つている所へガラリツと戸を明け、鹽原が息を切つて参り

まして、

鹽「今小柄を忘れて行つたから返して呉れ」

と云われたから、今まで眼を明けて居たおかくは急いで眼を閉ふさいでしまい、小平もまご／＼して、

小「へい小柄は此処にあります」

と差出すのを受取つて鹽原は脇差へはめて、

鹽「考えて見れば誠に気の毒な事をしたな」

と云いながら急いで歸つて往ゆきました。

母「これだよ、する事為す事半間じやねえか、彼の侍あの金を取つて、足へ小柄を刺されやがつて、これを取りに来ればハイと云つて渡すんだもの仕様がねえじやねえか、このどじさをよ」

仁「そうサ、小平兄い失錯遣つちやアいけねえぜ、何しろ此処には長くは居られねえから、是から信州路へ掛るにやア秩父へ直に山越して逃げよう」

と悪者三人相談して、勾引したおえいを脊負いまして、此処を逐電致しましたが、悪事というものは遁れ難いもので、再び追手に掛りますというお話になります。此方は鹽原角右衛門夫婦、其の夜は大宮宿の栗原と申す旅籠屋に泊り、翌七日江戸に着し、本郷春木町に参りまして、岸田宇之助方を尋ね、妹おかめに逢い、右内が変死の事と、其の事より沼田の百姓角右衛門に五十両貰い受け、支度をして帰府致した事を知らせようと右内の家を捜しますと、近辺の者の申すには、おかめは宇之助さんが帰らな

いから世帯しよたいをしまい、此の月の三日に子供を連れて旅立たびだちしたと聞いて鹽原夫婦は残念に思いましたが、返らぬ事故ゆえ、直すぐに筋すじか違い橋ばしうち内戸田能登守の家来野澤源作のざわけんさくと申す者は、妻お清が従弟どちなれば、是を便り戸田侯へ奉公ずみ致し、新地五十石にて馬まり組りに召抱めえられましたが、翌寛延二つちのとみ巳みの四月、御主人は野州やしゆう宇都宮より肥前の島原へ国替仰付けられ、鹽原も戸田侯の御供を致しまして国詰の身と相成りましたから、とんと沼田下新田の角右衛門方へ音信おとずれは打絶うえましたが、再び実子多助めくにり逢あいますお話は、一息つきまして申し上げます。

四

引続きますお話は鹽原多助一代記でござります。是は文化文政の頃まで おおひょうばん 大評判のもので本所相生町に居りまして地面の廿四ヶ所も持ち、炭薪の大問屋でござりますが、わずかの間に儲け出し、斯様な おおしんだい 大身代に成つたと申しますが、なんでも其の頃は未だ世の中が開けぬ時分でござりますが、当節は追々開けてまいり、仕合せの事には大火という者が頓とんとございませぬ、是は家造やづくりが いしづくりあるい 石造みせぐら 或は店蔵に成つたり、又は煉瓦造に成りましたので、マア火事がございまして、焼ける道が塞がつて居りますから、大きな火事がございませぬが、開けぬ昔は折々大火がございました事で、うしどし 丑年の火事、うまどし 午年の火事、或は佐久間町の さみせん 三味線屋

やかじ
 火事など種々^{いろく}大火もございました。其の中で一番大きいのは本
 郷丸山本妙寺火事、目黒^{ぎよう}行人坂^{にんざか}の火事、これは皆様^{みなさん}方も御
 案内の事で、それに赤坂の今井谷から出まして、麻布十番から古
 川^{ぞうしきつなざか}雑色^{ざうしきつなざか}綱坂を焼払い、三田寺町、^{ひじりざか}聖坂^{ひじりざか}から三角^{かく}へ掛け、
 田町へ出まして、これが品川で鎮火致しました、大きな火事でご
 ざいましたが、これが宝暦十年二月四日の夜^よに出まして、一日お
 いて又六日に出火致しましたのが神田旅籠町から佐久間町を残り
 ず焼払い遂に浅草茅^{かやちよう}町^{かやちよう}二丁目まで延焼し、見附を越して両国
 へ飛火^{とびひ}致し、両国一面火になって、馬喰^{ばくろちよう}町^{ばくろちよう}を焼き、横山町三丁
 目残らず、本^{ほん}町^{ちようどお}通り^{ほんちようどお}を出て日本橋通りから江戸橋の方へ焼け、
 四日市小網町一面の火になり、深川へ飛火いたし、深川一面の火

となり、漸く鎮火致しました。すると、其の翌晩また芝神明前しんめいまえから出火致しまして、芝片門前かたもんぜん本芝ほんしば残らず焼払つて、お浜で鎮火致し、たった二日の間に江戸大半を焼き尽しましたが、これは開けぬ昔のお話で、只今斯様な事はございません。田舎のお話も此の時分のお話を致しますと、とんと嘘のように聞えます。沼田下新田などと申しますと甚しい山国の片田舎のようでございます。さすが、只今では沼田から前橋まで人力車で参られ、前橋から汽車に乗り、パイと上野まで忽ちに来られ、一日の内に東京から往ゆきか復えりが出来まする事で、追々開けて参りました故、これからは鉄道が日本国中へ蜘蛛の巣を掛けた様になります。そうですが、マア何どの位便利になるか知れませんが、其の頃は一寸ちよつと旅立するにも

中々億劫おつくうな事で、田舎のお方が江戸見物に出るにも泣きの涙で出ましたもので、江戸ツ子が上方見物に往ゆくにも実に億劫なこと
に思い、留守中何ういう事のあるも知れぬ、万一これが永い別
れになるかも知れないと云つて、水盃などをして、刺青ほりものだらけ
いなせの侠な兄せいが、おい／＼泣きながら川崎あたりまで送られてまいり、
朋輩「そんなら達者で往つて来なよ」

男「お母つかあの事を留守中何分頼む」

なぞと云つて泣き出します。これが遠国へでも往ゆくのかと云
うと、僅か百三十里ばかりの処へ往ゆくにも此の通りでございます
が、現ただいま今では大違いで、「君鞆を提げて何処へ」「いや鳥渡ちよつと
亜米利加まで行つて来ます」などと云うような訳で、隣の家うちへで

も行くように思つていらつしやいますが、其の頃沼田下新田と申しては随分山国の片田舎でございました。さておかめは角右衛門に連れられて此処へ参りまして、一年半ばかり居ります中に角右衛門の女房が歿みまかりましたが、角右衛門も未だ老朽おいくちる年でもなく、殊に縁えんあい合あになつて居るおかめさん、多助さんにも叔母さんに当るそうだから、これを後添に直したら宜かろうと村の者等が切しきりに勧めますが、角右衛門は中々堅固な人だから容易に承知せず、あんな年の違つて居る若い女を女房に持つては世間へ対して誠に宜しくないからと云つて聞入れませんのを、そうでない、貴方あんたの跡目相続をする多助さんの叔母なり、殊に彼あの子を可愛がつて宜く世話をしなされるから女房に持つがよいと、分家の者始め

村方一同の勧めに、止むを得ず承知いたし、不思議な縁でおかめを後妻のちぞえに直しました。これから十二年経ちましてのお話で、丁度宝暦十年に相成りますから、角右衛門は年が五十四歳になりました。五八という奉公人を供に連れ、江戸見物ながら余儀ない用事があつて国元を出立致し、馬喰町に宿を取つて居りますと、二月四日の大火で、赤坂今井谷から出火し、品川まで焼け込んで鎮火したと申しますから、怖ねえおっかこんだと思つて居ると、又一日隔たつて神田旅籠町から出た火事は、前申ぜん上げました通り故、角右衛門も馬喰町を焼け出され、五八は大きな包を脊負しよつてせつくと逃げ出しましたが、往来々々アリアア〜などと云いながら、大きな荷を担かついで右往左往に駈ける此方こちらからはお使番つかいばんが

馬に乗って駆けて来る。仕事師は纏まとを振り鉤かぎをかついで威勢よ能く繰出してまいる騒さわぎに、二人はまご／＼しながら漸く逃にげしました。が、行ゆき所ところがありません。

五「旦那おっかさん怖おとねえじゃねえか、一昨日おと、いでつ大おとけえ火事いでつがあつて、又今日おとこんな火事いでつが始おとまるとは怖おとねえこんだ、江戸は火早おといと云いでついやんすが、こんな大おとけえ火事いでつがこおとう続いでついてあるとは魂たまげ消おとやした、火おとには追おっか掛かけられるようだよ、危あぶねえとも危あぶねえとも、あんな何あぶねうも先あぶねの尖あぶねつた鳶あぶね口あぶねを担あぶねいで駆あぶねけていやすから、頭あぶねへでも打あぶねつぶツけられあぶねて怪あぶね我あぶねでもしてはあぶね大あぶね変あぶねでがあぶねんす、旦那あぶねさん何あぶね処あぶねへ逃あぶねげあぶねやすか」

角「己あぶねも始めて江戸へ出たのだから困あぶねつた、仕あぶね様あぶねがねえが此あぶねの間あぶね一度あぶね尋あぶねねた小網町あぶねの積荷問屋あぶねな、彼あぶね処あぶねへ行あぶねくべい」

とこれから小網町へ参りますと、此の火事が日本橋から江戸橋、四日市、小網町へ焼け込んで参りましたゆえ、角右衛門は又此処を焼け出されました。

五「怖おっかねえ処だ、江戸てえ所にやア二度と再び来る所じやねえ、火に追おっかけられて居るんだねえ、旦那さん何処へ逃げべえか」

角「仕方ほかがねえ、外ゆに往どこき所もねえから深川の出でふねやど船宿へでも行ゆくべい」

と深川高橋までまいり、ホツと一息吐つく間もなく、又此の火事の飛火とびひがしまして、深川一面の火となり、火の粉がばら／＼落ちかゝりますから、

五「旦那さん、又何処へ逃げべえねえ」

角「何処へも行きようがねえ」

五「あゝ二度と再び来る所じやありやしねえ」

角「仕様がねえ、馬喰町は焼けてしまったから、板橋へでも往つて泊るべえ」

五「板橋まで焼けて来やしねえか」

角「そうしたら沼田へ帰るべえ」

五「沼田まで焼けて来たたら何うする」

角「馬鹿言え」

と言いながら二ツ目の橋を渡り、お竹蔵^{あたり}までまいり、ホツと一息吐きながら後^{うしろ}の方を見かえせば、天は一面に梨地の色を現わし、火事の明りで往来を見え透き、人々皆疲れて一^{いちにん}人も出るも

のはなく、往来はパツタリ止つてしまいました。夜も段々と更け、
 以前のお竹蔵前で当今交番所のある所から割下水の方へ掛ります
 と、女の金切声で、「アレー人殺しく」というから、角右衛門
 は気が付き向うを屹と見ますと、一人の悪者が島田鬻の女を
 捕えて打擲するのみならず、娘の持つたる包を引攫つて逃げ行
 きました。跡に娘は泣き仆れて居りましたが、何思いましたか起
 上り、前なるお竹蔵の大溝へ身を跳らして飛込もうとする様子
 に驚き、角右衛門は親切な男ゆえ、駈け寄つて突然娘の帯際
 取つて引留め、
 角「おい娘子、お前此の溝へ飛込むのか、身投じゃねえか、何だ
 か様子は知んねえが、男がお前の荷物を攫つて逃げ、それに大そ

う打ぶたれた様子だが、一体何ういう訳でがんす」

娘「有り難う存じますが、どうぞお放しなすつてくださいまし、

私わたくしは深川の火事で焼け出され、母おふくろ親と一緒に逃げて参りまする

途中、母おふくろ親にはぐれ、一人ひとりで此処までまいりますと、跡から附

けて来た悪者が突いきなわたくし然私を突つきたお仆し、撲ぶち打擲致しまして、大事

な荷物を持って行つてしまいましたが、彼あの中には金子かねも入つて

居り、殊に大事な櫛笄かんざしや衣類も入つて居ります故、あれを取られ

ましては母おふくろ親にどんな苛ひどいめに逢わされ、殺されますか知れま

せんから、寧いっその事死のうと思つたのでございます」

角「まア待ちなせえ、私わしは田舎者で、始めて江戸へ出て来たもん

だが、宜く物を考えて見なせい、盗どろぼう賊に荷物を取られるくらい

は災難とはいいいながら些細ささいの事だ、此のママ大でつけえ江戸の火事を
 見なせえ、何千軒とも知んねえ家が焼うちけ、土蔵倉を落す中で、盗ど
 賊ろぼうに包を取られた位ぐらいはなんでもねえに、母おふくろ親に済まねえから
 と云つて此の溝へ飛込んでおツ死ちぬとは、年はいかねえが余あまり
 分別ぶんべつがねえ話だ、お前めえさん様がお母つかさん様に逢つて斯ういう訳の災せえな
 難んで取られたと云つて、あんたが詫わびごと事をしたら、お母つかさん様も
 聞かない事もあんめえ」

娘「でも何うぞお殺しなすつて」

角「馬鹿な事を云わねえもんだよ、あんたがお母つかさん様に云いにく
 ければ、私わしが一緒いっしょに往つて詫わ事をして上げべえから、あれさ、マ
 ア心得ちげ違ちがえをしちやいけましねえ」

と留るも肯かず、娘は泣いて身をもがき騒ぎまするに困り果て、

角「仕様がねえな、五八やく、此処へ来う」

五八「何んだかねえ」

角「早く此処へ出て来う、何処え往った」

五八「己ア人殺しくくと云うから、怖かなくって堪りやしねえから、此処に引下つて居りやすのだ」

角「今此の娘が身い投げようとして、留めても肯かねえから此処え来て手伝つて押えてくれ」

と言われ五八出て参り、

五八「なに身い投るつて、止しなせえ、止すが宜えよ、此んな小
けえ所へ這入つて死ねるもんじゃアねえ」

角「なアに母様に済まねえから身い投るだつて」

五八「よすがいゝよ、死んじやア命がなくなるよ」

角「あたりめえ当然の事だ、娘わしツ子私わしア田舎者ですが、此の火事に焼け

出され、あつちこつちにげまわ彼方此方逃つて、包を背負しよつたまゝ泊る所もねえので、

此処らをうろくして居る所だが、あんた貴女の死のうとするのを見掛

け、ゆどうも此の儘見捨てゝ往ゆく訳にやアいきやしねえから、あんた貴方

の家うちまで一緒に送つて上げやんしよう」

娘「有難わたくしうございますが、私も焼出されて家うちはないのでございま

す、赤坂の火事で焼け出され、深川櫓下の親類共へ参つて居りま

すと、今晚の火事で焼けてしまい、ゆ行き所どこはございません」

角「仕様がねえ、困つたもんだアねえ、どうか捜したら知んねえ

事もあんめえ」

五八「何うか捜したら知んねえ事もあんめえ」

角「私わしらも馬喰町から焼出され、小網町から高橋の方へ逃とこる所もないが、何しろ此処は往来だから、マア一緒にお出でな
せえ」

五八「此処は往来だから、マア一緒に来なせえ」

角「なんだ同じ事ばかり言っついていやアがる」

と三人連立ち、山の宿しゆくへまいり、山形屋と申す宿屋へ泊り、段々娘に様子を聞くと、

「私わたくしは三田の三角のあだやと申します引手茶屋の娘で、お梅と申す者でございませうが、おかくと申す母と二人で深川櫓下の親類内

に居りますると、又焼出され、逃げる途中母親にはぐれてしまい、先刻さつきの男に包を奪とられました。あの中には金子もあり大切な櫛くしに衣類も入って居りますから、あれを奪とられた事を母が聞きますれば、どんなに詫びても許す事じゃアございませんから、何卒どうぞ身を投げますからお見逃しく下さい」

とばかり云つて居りますゆえ、角右衛門も困り果て、
角「困ほかつたもんだねえ、何しろ捜して見ましよう」

と外ほかに仕様がございせんから、当てもないことでございます
が、三田の三角へ尋ねに行きますのに、若い娘を一人置いて、心得違いな事でもあつてはならんと存じまして、五八を附けて置き、
角右衛門は出掛けまして、三角から深川を彼方あっちこっち此方と三日の間捜

しましたが、とんと心当りもなく、鼻の穴を黒くして、埃だらけになつて歸つてまいりました。

五八「お帰んなんし、旦那さん知れやしねえかね」

角「知んねえよ、どうも困つたもんだ、あの何とか云つたつけね、姉さんあねまア此処こけえお出いでなせえ、あんたも知つての通り、今日で三日の間捜しやすが、なにしろ焼け原べいで尋ねる所もなし、自身番へかゝつて尋ねても何うも知んねえ、誠に困つたもんだが、斯んな事を云つて気にしちやアいけねえが、是程の火事だつて、なんぼ私わしらが田舎者だつて、こうやつて手間をかけて尋ねて知んねえ訳はねえが、何しろ大火の事だから、お母つかさん様も己おらと同じ五十の坂を越している人、殊に女のこつちやアあるしするから、殊に

よつたら焼原へ突飛されて、おつ転んだ上へ人がぶち乗つて、マアそんな事もあんめえが、焼け死んだような事があつたら、貴方あんだの身の上は何処へ連れて参めえつたら宜いいか知んねえから、それが心しんべえ配へいでなんねえ」

娘「御親切様、有難う存じます、私共わたくしどもの母親おふくろは事によつたら焼け死んだかも知れませんが、焼け死にますれば、私の身体わたくしは身抜けが出来て、却かえつて仕合しあわせでございます」

角「馬鹿なことを云うもんじやアねえ、年イいかねえつて、母かみ様に小言ま云われるのが辛つれえもんだから、焼け死ねば宜いいなんぞと、苟かりめにもそんなことを云つちやア済みやしねえよ」

娘「いえ、本当の母親おふくろではございませぬ、嘘の母親でございま

す、それに心得違いな人で、悪い事ばかり致し、私は幼さい内から育て、くれましたから仕方なく附いて居りますが、ヤレ妾に出ろの、それが否いやなら女郎に売ると無理難題を申し、まだそれ計りではありません、阿兄あにきと云う者がございしますが、私には義理ある兄でございまして、私のような者を捕えい猥いやらしいことを云いかけますが、仮にも兄弟でそんなことは出来ませんと衝放つっぱねましたら、私を憎み出し、母親と二人して虐めいじますゆえ、四五年前から駈出してしまおうかと思いましたが、参る所もないので、仕方なく悪党の親子の側に喰く附ついて居りますが、母親が焼死やけしにますれば、どんな辛い奉公をしても、私は堅気になりたいと思つて居ります」角「そりやアえれえこんだが、何か外に親類でもあつて、預けて

往く所はありやしねえか」

娘「私には、親も兄弟もない者を助けて幼さい内から育てたのだ

と母親が申して居りますから、何にもございませぬ」

角「いくつ位から育てたのでがんす」

娘「七歳のときから育てたのだと申します」

角「でも実の親が有りやしよう」

娘「あるのでございませうが、何処に居りますやら一向私には

分りませぬ」

角「こりやア困つたが、実の母様の名は何と云いやすか」

娘「なんと申すか存じませぬ」

角「それじゃア尋ねる手掛りがねえが、実のお父さんの名も知れ

ねえかえ」

娘「親父おやじの名は私わたくしの少ちいさい時分懐かに抱かいて寝ねていながら、迷子まよこにならないようにと口くちで教おしえたことを幽かすかに覺おぼえて居ゐります、本ほん当とうか嘘うそか知りませんが、慥たしか本郷春木町味噌屋みそやの裏うらで岸田宇之助かしたのりすけの娘むすめおえいと云いえば、はぐれないと云いわれた事ことが耳みみに残のこつて居ゐります」

角「なに岸田宇之助かしたのりすけの娘むすめだと、はてね、そんなら慥たしか十三年じゅうさんねんあと保泉村ほせんむらの原中はらなかで賊あしひらのために勾引かどわかされた岸田屋宇之助かしたのりすけさんの娘むすめおえいさんか」

娘「はい、貴方あなたはどうして御存ごぞんじじ」

角「これは魂消たまげた、五八ごはちなんとマア不思議ふしぎなことだのう」

五八「どうもマア不思議なことで、おえいさんが出て来るとは不思議なわけだ、して見ると此の火事も中々好い火事だ」

角「ええ、まア心配をぶたねえでも、貴方の実の母様は達者であるから、逢わせてやるべし」

娘「ほんとうのお母様に逢わせて下さいますと」

角「それには種々訳があるが、話は家へ帰ってから緩くりしべし、己は沼田の下新田という山国だが、お前さんの実のお母様は己が家にいるんだ」

娘「どうもマア不思議な御縁で、どうぞお伴れなすってくださいまし」

角「実に不思議な縁だ、構わねえで行きやしよう、其の母様は尋

ねないでもいゝ」

と急に支度をして三人連立ち、道ではお榮には何も深い話もせず国へ帰りましたが、国の方では江戸は大火事で、江戸中丸で焼けてしまったようなことを話して居る所へ帰りました故。

かめ「おやまあ旦那お帰り遊ばせ、江戸は大火事であつたと云いますから、お怪我でも無ければいゝと何んなに心配をして居りましたろう、なんだか江戸は残らず焼けてしまったようなことを申しますし、又後あとで聞けば、観音様は残っているという人もあり、どんなに心配していましたが知れませんが、五八さんおお大きに御苦勞おだつた」

五八「へい只今戻りやした、どうも江戸はえれえ怖おっかねえ所で、

なかく、いい好い所だと云うのは嘘でがんす、側からく、火事が追掛おつかけて来て、あつちこつち彼方此方逃 　　つて、漸くのこん帰けえつてめえりやしたが、孫子の代まで遣る処じやアありやしねえ」

角「おかめ、江戸へ往つた土産にいい物を連れて来た、おい此方こつちへおはいんなんし」

かめ「おや何処から連れて来たの」

というに、角右衛門は娘に向い、

角「こりや己おらア鼻かアだ」

娘「これはお初にお目にかゝります、わたくし私は旦那様のお蔭様で此方こちらへまいりました者、何分宜しくお願い申します」

かめ「そうでございますか、こんな山の中へ宜くマアお出いでだねえ、

久し振で江戸の風を見たが、何うもいゝ器量だこと、年は幾許、なに十九だとえ、オヤそう、焼け出されてそれで、それはマアお気の毒な、旦那これは何処の娘です」

角「これは十三年あと、保泉の原で勾引かされたお前の娘のおえいだよ、よく顔を見ろ」

かめ「なにえー」

角「これがお前の実の母親だアよ」

と云われ、親子は思い掛けなき再会に、おかめは娘の手を取つてつく／＼顔をながめながら、

かめ「旦那様、どうして此の子を連れて来て下さいましたか」

角「なんとマア不思議なわけで、此間の火事の時、此の娘も焼

出され逃げる途中母親おふくろに別れ、一人で来る後うしろから悪者に附かれ、持っていた包を奪とられ、母親に濟まないという所から身を投げようとする所へ己おれたちが通り掛り、助けた上で様子を聞けばこれくという話に、己も飛立つばかり嬉しく思い、直すぐに連れて来たんだが、何なんと嬉しかんべい」

かめ「どうもまあ思いがけない事、大層大きくなつたんで、一寸表で逢とつたつて知れる氣遣いはありません、お前が七歳ななつの時、私がお前を負おぶい、馴れない旅をして、お前は勾引かどわかされ、私は悪者のために既に殺されようとした所を、こゝの旦那が助けて下さり、それから後御厄介になり、今でも何一つ不足はないが、暑いにつけ寒いにつけ朝夕共にお前の事を些すこしも私は忘れた事はありません

ません、本当にマア幼な顔を見覚えてゐるよ、旦那の前でこんな事を云つて誠に済みませんが、先のせん配偶つれあいの宇之助さんに誠によく似て居りますよ、どうもマア本当に思い掛けない事で、夢のような心持です、一寸立つて見なよ、まア大きくなつたこと、そして風ふうのいゝこと、一寸坐つて見なよ、一と　り　りなよ」

なぞといろんな事を申し、先まず安心して、先せんの名を呼ぶがいと、これから名をも改め、おえいと呼び、多助とは従兄いとこ同士の事故ゆえ、行末は、※めあわせるの心得で、二月の末から五月の頃まで中よく日を送りました。一日あるひ角右衛門が多助に云うのに、おえいがまだ御城下を見たことはあんめえから、一緒に連れていつて見せて来こう。沼田は土岐様の御領地でございます。多助はおえいをつれ

て参り、見物させて帰つてくると、其の跡から続いて内へ入つて来た男は、胴金造りの長物ながものをさし、菅すげの三度笠を手に下げ、月つき代かやきを生し、刷毛先はけさきを散ちらばし、素足に草鞋わらじを穿はいて、

男「はい、御免ねえ」

五八「ヒエー何所どこから来た」

男「鹽原角右衛門さんと云うのは此方こちらでござえやすか」

五八「へい、此処でござえやす」

男「今こゝの家うちへ二人連れで這入はいつた若いお方は此方こちらの若旦那でござえますか」

五八「へい、今こけえ這入はいつたのは己おら家の息子うちどんの多助さんだが、なんだえ」

男「その若旦那と一緒に附いて這入った美しくい姉さんは此の家の娘でございやすか」

五八「己ア家のおえいさんと云う娘さんだが、なんだえ」

男「へい、そうですか、そんならお前さんのところの娘に違えねえのだね、おいお母ア、こつちへ入んねえな」

婆「はい御免なさい」

と云いながら這入つて来た婆アは、年頃は五十五六で、でつぷり肥り、頭を結髪にして、細かい飛白の単衣に、黒鷲絨の帯を前にしめ、白縮緬のふんどしを長くしめ、鼠甲斐絹の脚絆に、白足袋麻裏草履という姿ですから、五八はいろんな人が来るなアと呟やいて居ますと、

婆「角右衛門さんというお方にお目にかゝりてえもんだねえ」

五八「己おらア旦那は高平村まで用があつて往ゆきやして居りやしねえ、

若旦那べいだ」

婆「そんなら若旦那に一寸ちよつとお目に懸りとう存じます」

五八「多助さん、何んだか知んねえが、貴方あんたに逢いてえという人

が来やした」

というに、奥より出て来る多助は今年廿歳はたちで、おとなしやかな

息子で、慇懃に手をつかえ、

多「生あいにくおやじ憎親父は居りましたねえが、お言置いいおきで宜しいことなれば、

私わたくしが承あなわり置なきまして親父に申聞もうしきけましょう」

婆「貴方あなたは御子息さんでございますか、只今貴方と一緒に此処の

家へ這入りました娘は、此方の娘子だと此の御奉公人が云つたさうでございいますが、一体あの娘は何方からお貰いなさいましたか、それを承わりとうございます」

多「いえ、貰つた訳ではございません、あれは私の家の先からの娘でござります」

婆「お惚けなすつちやアいけません、ありや私の娘だよ、私しア三田の三角のあだやと云う引手茶屋のおかくという婆アだが、あれは私の大事な金箱娘、此の二月大火事の時深川を焼出され、逃げ出す途中ではぐれてしまい、今日が日まで行方が知れないから、※々《だんく》手分けをして捜がしたが、何うしても知れなかつたのが、不図山の宿の山形屋という宿屋に泊っていた客が、

娘を連れて沼田のこれくの処へ一緒に歸つたと聞いた故、私も娘がいなけりやア商売も出来ない事故、悴ゆえを連れて怖ろしい開けない白井八崎はっさきなんぞと云う怖い山越しをして、此処へ来て、沼田の御城下へ宿を取り、三月の間尋ねたが知れぬも道理、こんな山の中に居るんだものを、阿魔女あまつちよも罰ばちだ、さつき御城下でお前めえと一緒に歩いていたのを見掛けたから尋ねて来たのさ、この家うちの御子息が悪わるあし足になつて居るか何うだか知らねえが、どういう訳で、誰に沙汰をしてお前の処の娘にしたか、それを承わりたいので」

多「はい、どういふ訳でがんすか、私わたくしから精くわしい事を申した所がお聞入れもありやすめえし、親父は留守でがんすから、親父の歸

るまでお待ちなすつてお呉んなせえ、高平まで参りやしたのですから、明日は慥たしか戻りやしよう、待たれやすなら明日まで待つてください」

婆「待たれませんよ、お帰りまで宿を取り銭を遣つかつていられるものか、今までの位路銀を遣つかつているか知れねえ」

多「沼田の何処へ宿を取りなさるか、そこを聞かせて下さりヤア、親父が帰けえつたらお迎いに出すようにいたしましょうから」

婆「出来ませんお腹なかがすいたから御膳を御馳走になり、旦那のお帰りまで泊めて置いて下さい、若わかいしゆ衆さん、盥へ水を汲んで来ておくんなさい」

五八「旦那が留守だから、若旦那がいろく話をするのに解ら

ねえことをいう」

婆「何でもいゝ、私の娘をこゝへ連れて来て、我物顔に娘でござ
 いますと云われて、はい左様でございませうかと云つて帰けえるよう
 な人間じゃアございませんよ、田舎じゃアちいさい時から木綿着物
 で育て、教える事は糸いとく繰くりから機はた織おりぐらいで済むけれど、江戸
 育ちの娘というものは少うさい中うちから絹お布かいぐるみ、其の上金にあ
 かけて芸事を仕込み、これから親が楽を仕ようと思つて居るのに、
 其の恩を忘れ、親を見捨てゝ家出をするような阿あ魔ま女ぢよだから唯
 は置かれないのだ、マア御免なさい」

と云いながら上りにかゝるから、

五八「上つちやア駄目だ、名主どんにそう云うぞ」

婆「何処へでも往つてそう云え、こつちで名主へ出るのだ、ぐずぐずすると勾かどわか引しの罪に落すぞ」

五八「なに、勾引しとは何んだ」

と云いながら屹度きつと詰寄るを、

小平「やい、何をするので、手前てめえおれのお母ふくろを打つのか、やい

百姓、大間抜け、おれのお母に指でもさすときかねえぞ、まご／＼

しやアがると此の家うちへ火を付けるからそう思え」

五八「たまげた、火を付けられちやアたまんねえ」

と五八は江戸の火事で懲りて居りますから驚きました。此の権幕に奥ではおかめとおえいが何うしたら宜かろうと途方に暮れて居ります所へ、角右衛門が帰つてまいりましたが、此の人は名主

から三番目の席に坐る家柄と云い、殊に分別ある人ゆえ少しも騒がず落着き払い、彼の親子連の大悪人お角婆アと道連の小平を向うへ　わし、掛合のお話は此の次に申し上げます。

五

さて百姓鹽原角右衛門という人は、田地の三百石も持つて居りますが、村方で田地の三百石も持つてしていると大したものでございませぬ。殊に家柄もいゝから、座席も名主から三番目というので、其の頃は家柄を尊びました。其の百姓の家だから旨く往つたら二三百両も強請ゆすつて往いこうという権幕で、相手は名に負う又旅お角、

是はちよく／＼旅へ出て、昨日歸つたかと思うと又今日旅へ出た、
 又旅へ出たという所から自然又旅のお角と綽名あだなを取りました者で、
 其の子として道連の小平、是も胡麻の灰の頭かしらぶん分ぶんで、此奴こいつがど
 ツさりと上げ胡座あぐらを搔かくと梃てこでも動かないという、親子諸共名う
 ての悪党だから、其の権幕の強いのに怖れて五八あとも後へ下り、名
 主へ訴えようとしている所へ歸つて来たのが主人角右衛門で、奥
 へ往つて様子を聞くと、これ／＼と云いますと、なか／＼の沈おちつ
 着きものですから、直すぐに出てまいりまして、
 角「はい、是はお初にお目にかゝります、私わしは鹽原角右衛門でござ
 います、生憎只今高平まで参めえつて居りやせんでござりやした
 が、何かマア訳は知りやせんが、悴わけや若わえもんどもが頻りに心しんぺ

配いして居りやすが、どういふ訳で私の所ところへお出でなすつて、人

の娘をかどわかしたから名主へ届けるといふのでがなす、其の次第を一通り承わつた上で御挨拶を致しやすが、一体貴所あなたがた方は何処どこのお方でございやす」

かく「はい、貴方が角右衛門さんですか、お初にお目にかゝります、私は江戸三田の三角であだ屋という引手茶屋の主人あるじおかくと

いう婆アでございしますが、此の間の深川の火事で娘を見はぐり、

行方が知れませんか、只今も申すとおり漸々よう／＼の事で突き留めて、怖ろしい峠を越し、此の沼田という所へまいり、宿を取つて

捜して見たが知れませんか、今日不図御城下まわりで見掛ける

女は娘に肖にているから、跡を附けて来て見ると、此方こちらの家うちへ這入

ったから、此の奉公人に尋ねると、家の娘だと云いなさるから、
 それはどう云う訳で他人の娘を誰たれへ沙汰をして娘にしなすつたか
 承わりますと、此の奉公人が名主へ訴えるとか打ぶつとか叩くとか
 云うから、売言葉に買言葉、果ては遂に大きな声を出しました所、
 忤が腹を立て、大声を出しましたが、其そん様な事をしないで何う
 でもお話に成る事だが、お前さん一体どういふ訳で己の娘だと仰
 しゃいますか、それを承わりたいねえ」
 角「なる程、ハイ御尤もの次第でござりやす、実はお話をしな
 い事は訊わかりましねえが、少しマア用向が有つて、今度初めて江戸
 へ参めえり、馬喰町へ逗留して居りやすと、御案内の通り大でっけい火事、
 私わしも始めて火事に逢いやした事ゆえ、誠にたまげやして、彼方あつちこ此

方逃つち 　　つて、本所のお竹蔵へかゝると、美し姉ねえさんがお竹蔵の溝どぶへ身い投げて死ぬべいと云う処を、私がお助け申して段々仔細を聞いて見れば、これくでお母ふくろにはぐれ、悪者のために包を攫さらわれしました、中には大事な櫛笄こうがいもあり金も入へいつて居りやすから、あれを取られては何うもお母に云訳がないからおつ死ぬと云うから、マア待たつしええと、いらざる事だが私も見兼て、マア兎も角もと宿屋へ連れて往つて、それから貴方あんたの行方を搜したとも捜さねえとも、三日の間焼原を探しやしたが、どうしても貴方の行方が知れやしねえ、困つたもんだと思つたが、何処へ預けると云う処もなく、親類もないというし、仕方がねえから私わしの家うちへ連つて参めえつて段々様子を聞くと、親御もなく兄弟もないというもんだ

から、私の娘にするより外に仕様がねえじやアあんめえじやねえか」

かく「お惚けなすつてはいけませんよ、何だといえ親の行方が知れないから、お前さんは自分の娘にしたとお云いだが、それが立派なお百姓さんの御挨拶でございますかえ、承わりますれば此の村方でもお前さんは名主から何番目へとかへ坐るとかいう立派なお家柄で、田地の三百石もお持ちなさる立派なお百姓さんが、何の挨拶だ、たとい仮令親の行方が知れないと云つても、其の町内に自身番も有れば名主もある事だから、それ／＼へ掛つて名主へでも預けて帰らなければ、本当の親切とは云えない、私がこれから彼あの阿あま魔女で少し息をつこうと思つて居たに、大事な娘を攫さらわれた

お蔭で家うちを持つ事も出来ないから、岡おか引びきに頼んで金を遣つかい、娘の行方を尋ねて貰ったが知れない、その内よう漸々山やまの宿の宿屋で、沼田の是々の二人連の百姓が、斯う云う娘を連れて国へ帰つたと云うから、跡を附けて来て見ると、沼田から三里も引込んだ処とは知らず、宿錢を遣つかつて長い間捜し、漸々突留めてお掛合をする、そんな御挨拶、又阿魔女も阿魔女だ、親が知れないからと云つて、ずう／＼しく此処の娘になつて居る了簡にんが悪いや、他ひとの娘を一晚でも泊めて見れば瑕きずを附けたとしか思われませんか、私はもう連れては帰られません」

角「そんなら私わしの方へお貰い申しやしよう」

かく「貰うなら貰うように、私の方へ話の極きまりを附けて、得心の

上で貰うようにおしなさいな、只は上げられませんよ」

角「なアる程、是は御尤な次第だが、貴方あんたが愛想が尽きて私わしの処へ呉れるなら、貴方から慥たしかに娘にくれたという書付を一本お貰い申していもんだが、たゞは上げられないとは何ういう訳でがんです」

かく「旦那、お金を三百両おくんなさい」

角「なに三百両とえ、そんな事を云つたつて出来ねえ相談だ、何故三百両呉れると云うのでがんです」

かく「何故と云つて二月から五月まで他ひとの娘を引攪ひっさげつて、斯こん様な山の中へ連れて来て居るんだよ、私は引手茶屋をして居るから娘が居なくつては商売をすることも出来ねえから長休みをするの

みならず、路銀を遣^{つか}つて山の中へまで尋ねて来てサ、はい上げましよう^とと云つて江戸へ歸られますかえ、呉れるなら上げまいものでもないから、それだけの入^{にゆうひ}費をお出しなさいな、私も十九まで育てた埋^{うめくさ}草をしなけりやなりませんよ、金が出来ねえなら直ぐお返しなすつて下さい、連れて歸つて女郎にでも何にでも打^ぶち売つて埋草をするから」

角「誠にお気の毒でございませぬが出来ませぬ、どうもハア三百兩は逆^{とて}も上げる訳には参^{めえ}りやせん」

かく「旦那、ただ参^{めえ}りませんで済みますかえ、そんなら何故^{ひと}他の娘を無沙汰で連れて来たよ」

角「親に無沙汰で連れて来た其処は重々済まないが、何分親御の

行方が知んねえもんだから、よんどころ 抛ななく連れて来やしたので」

かく「親の行方が知れないから連れて来たという訳で済みますか
え」

角「誠に済まねえが、全体あれ彼はあんた貴方の娘にちが違ねえのかえ」

かく「私の娘だから私が路銀をつか遣つて態々わざく追掛おけて来たのさ」

角「それがサ、あのお梅という娘は七歳なの時に保泉村の原中でか勾か

どわ引かされたお榮えいという娘だが、何うしてそれをあんた貴方が娘にしなす

つたえ」

と云われおかくはぎよつ悸とし、

かく「はい、貴方は何をお云いなさる」

角「何も云いましねえ、あれは岸田屋宇之助と云うたび旅商人あきんどの娘

ですが、母親おふくろが亭主の歸りの遅いのを案じ、あの娘こをつれ、亭主の行方を捜して小川村まで来る途みちで、親子連の胡麻の灰へいのためかどわに勾引かどわかされた娘だが、それを何うしてお前めえさんは娘にしたか其の次第を承わりていもんだ」

かく「どうもマア思い掛けない事をおいいなさる、勾引かどわかされた

か何だかそんな事は知りません」

角「お前めえさん惚とぼけたつて無益だめだよ、おかめ此処へ来て一寸ちよいとお目にかゝれ」

と云われ、怖々ながら出て来るおかめとおえいは、角右衛門が居るから大きに氣丈夫に思い、おかめはズツと進み出て、かめ「おい、おかくさんとやら、お前忘れはしまい、十三年あと

鴻の巢の田本で 中 ちゆうじき 食をした時お前さんと道連になり、やれこれ云つておえいを可愛がり、それから駕籠へ乗せて来ると、保泉の原中で此のおえいを攫い、よくも此の年月娘にして居なすつたよ」

と云われ、

かく「おや、おかみさん、どうもマア」

と云つたが、実母のおかめが此の家うちにいるとは思いがけない事ゆえ、流石さすがのおかくも仰天して、言う事も前後致し、おどくしなから、

かく「誠に何うもマアおかみさん、思おもがけない処でお目に懸おりました、あなたは何ういう訳こつちで此方こつちにいらつしやいますか」

角「これにはいろく訳があつて、今は私が鼻わしに持つて居りやすよ、それから火事場でもつてからに母親おふくろにはぐれておつ死のうとする娘を助けて連れて来ると、私がほんとうの娘だという訳よ」
かめ「マアどうもいけしやアくよく他の娘ひとを攫さらつておいて、強強い談すりがましい事をおいいだが、誰たれに沙汰をして他の娘を自分の娘におしだよ」

かく「まアおかみさん、そう仰しやればお腹も立ちましようが、私も旅なれない事故ゆえ、あの折おりはお前さんにはぐれたから、どうか捜してお前さんに渡そうと思つて、彼方あち此方こちと捜しましたが、どうしても行方が知れず、あの子に聞いても頑是がんぜのない七歳ななつか八歳やっつの子供ゆえ何も分らず、親類は知れず、仕方がないから江戸へつ

れて行つて私の娘にして育てるのは^{あたりまえ}は当然じやありませんか」

角「お前さんの云う所も又尤もだ、親を尋ねても知れず、何を聞いても頑是ねえ子供で分らねえから、あんたが娘にしたと云つたねえ」

かく「左様でございますよ、それを^{かどわ}勾引かしたなんぞと云われちやア詰りやアしません」

角「御尤もの次第でがんす、私も^{わし}其の通り火事場で^{あちこち}彼方此方尋ねり、どうか^{めえ}齣さんに渡して上げべいと思つたが、どうしても知れず、^{ほか}外に親類もねえと云い、仕様がねえから連れて^{けえ}帰つて娘にしたんだが、お互の訳じやアありやしねえか」

かく「お互と云つたツて、それじやア何うもマアお前さんどうも、

江戸から四五十里もある沼田まで連れて来るのは酷いじゃアありませんか」

角「あんたも保泉村で勾引かどわかしでもあるまいが、親の行方が知んねえからと云つて、江戸まで連れて往つて娘にすれば道理は同じ事だ」

かめ「本当にマアおかくさん、なぜ他の娘ひとを」

角「騒がないでもいゝ、己が云う所があるから、黙さっている、扱さこれは実の母おふくろ親でござりやす、あんたも実親じつおやが知んねえから、自分の娘にして居たんだらうから、実親が知れたら返かえすだらうねえ」

かく「返かえすツたつて、どうも徒たゞは返されません、私も路銀を遣い、

こうやって態々わざ／＼尋ねて来たんですものを」

と言っている側から、道連の小平がしやばり出て、

小「お母ふくろ黙もくつていねえ、お母は耄碌めろくしているから詰つらねえことば

かり言いつている、旦那めえお前めえさんは火事場でお母の行方が知れね

えから娘にしたと仰おほしやるが、私わつちの方かたじゃア七歳ななつの時からお母が

丹誠たんせいして、お絹布けいこぐるみ、其の上うへにいろ／＼な芸事を仕込んで、

これから楽らくをしようと思おもっている其の恩義おんぎを忘れて、ぬく／＼と

此方こつちの宅うちにいる阿魔女あまつちよも阿魔女だ、それをたゞ此方こつちの宅へ取上

げて、只帰かへそうといいつちやア、旦那めえそれじゃア話わが出来やせん、

私も出る所へ出て話を付けやしよう」

角「出る所へ出るなら勝手に出なさいな、だが全体ぜんてえあの時娘ときむすめを勾か

引どわかされ、母かさま様が悪者に慰なぐささまれようとする処ところを、私わしが通り合あして助けて遣り、伊勢崎の錢屋へ掛り、手を分けて搜して貰もらったが、何分娘の行方が知れないから、八州へ頼み段々勾引かきよしの詮議せんぎをすると、馬方の倉八とかいう奴と松五郎源藏という三人を縛ばつて、名主の庭へつれていつて調べて見ると、親子連の胡麻ごまの灰へいに三兩宛ずつ金を貰もらつて頼たのまれたと白状はくじやうしたから、三人は送おくられてしもうたが、親子づれの胡麻ごまの灰へいの行方が知れず、仕様がねえから、マアおかめを私わしの処ところへ連れて来て置くうち、縁ゆかりあつて今じやア女房にようばうにしている訳だが、これを表向おもむきにするならおしなせえ、伊勢崎の錢屋へ係かつて調べの繕よりを戻かへせば、お氣の毒どくだがお前達の腰こしに繩なわが付くべいという考えだ、それでもいゝなら遠慮えんりょはないから出る処へ

勝手にお出なせえ、本当なら己らが方から出べいと思うんだが、そんな荒え事あれもしたくねえから、五両の金を上げべえから、草鞋わらじと钱ぜにと思つて、これで帰るならば、最う紛いさくさ紘はなしはなしに娘を返したという書付を一本置いていつて下さい」

小「お前さん、そんな解らないことを云つちやア困るじゃねえか、七歳ななつの時から育て、路銀つかを遣つて斯こん様な山の中まで尋ねて来て、五両ばかりの端た金を貰つて帰られるか帰られねえか考えて御覧なせい」

角「帰られねえけりやア何うする、己おれが方から訴えて調べの繕よりを戻せば、五両の金も取れないばかりでなく、腰に縄が付くんですが、んすが、五両の金も遣りたくもないから、いやなら然そうしようか」

かく「どうもお前さん、そんな只どうも」

小「おふくろ母親のいう通り、五両ばかりの金じゃア仕様がねえ」

角「いや否なら訴える方が宜かんべい」

かく「訴えるがいゝツて、そんな勝手な事を云つちやア困りますねえ」

五八は先刻から此の様子を見て居つて、

五八「旦那さん、こういう奴は矢張やっぱり話の繕よりを戻して、縄ア掛け

て、名主様へ引いて往つて、聞くれえ所へ押入おっぺいる方がよかんべい、

鳥ちよつと渡名主どんの所へ往つてくべいか」

かく「お待ちなさいまし、帰りますよ」

と訴えられては身の破滅だから、五両でも取らぬは損と思ひ、

かく「小平や書付を書きな」

と云われ、しぶくしながら小平は書付を書き、五両の金を請取りけと出て行きましたゆが、残念で堪りませんゆえ、どうかして再びかどわか勾引かどわかそうと思ひ、須川村という処へ宿を取つて様子を伺つて居りますと、此方こつちは安心致しました。処が六月初つきはじまりになりますと、角右衛門は風の心持から病かさなが重りて、どつと床に就きましたゆえ、孝行な多助は心配いたし、神かみほとけ 仏ほとけに願をかけ、精進火の物断だちで跣足はだしまい参りを致しまするが、何分効験しるしもございません。角右衛門は村方一同よに好く思われて居る人故、代る／＼見舞にまいるうちに、六月の晦日みそかごろ頃は最もう息も絶え／＼になりましてゆえ、家内親類枕元を取巻みもりき看護かんごをして居り、分家の太左衛門

は参りて伯父の看病を致して居りますと、角右衛門は苦しい息をつきながら、

角「太左衛門く、一寸ちよつとこけへ来う」

太「はい、伯父様あんたしつ貴方確かりしねえではいけませんよ、七十八の爺さまではなし、死ぬなんぞという弱よええ気を出しては駄目ですがんす」

角「駄目だツて駄目でねえツて、今度は何うしても死病と諦めたから、汝われがに只たつだ一言臨終いまわに言い残す事があるから此こ処けえ呼んだんだが、おかめも此こ処けえ来う、多助も此こ処けえ来う、おえいも五八も皆呼んでくれ」

というから大勢枕元を取巻きました。

かめ「旦那しつかりなさいよ、貴方あんたしつかりして下さいよ」

多「お父さんとつ、気を慥たしかに持つて達者になつて下さいよう」

角「太左衛門己が血統ちすじというは汝われより外にねえ」

太「私わしも若わけえうちに親父に死なれ、又母親おふくろにも早く別れ、今ま

で皆みんなな伯父様の世話になつた事は私も心得て居りますから、あんな

たが達者でいて、わしもこれからちつたア貴方あんたに楽でもさせべいと心得て居りやすから、弱よええ心を持つちや駄目でがんすよ」

角「実は此処こゝにいる多助を己が跡目相続に貰つた訳というものは、

十三年あと八月二日、千鳥まで田地を買いに行く時おつかいむら、追貝村で

な、今の鼻かゝあのおかめの先せんの亭主、岸田屋宇之助という旅商人たびあきんど、

元は阿部様の御家来鹽原角右衛門と云う己と同じ名前の侍の家来けれえ

だが、其の御主人の角右衛門様という人は、小川村へ浪人して居つた所、八年ぶりで宇之助さんがお目にかゝり、段々の話に何うか主人を再び世に出していと宇之助という人が、己が金を持ってゐることを知つて跡を附けて来て、金を貸してくれろ、主人を世に出してえから貸せと云うから、己おら泥坊だと思つて泥坊々々となると、突いきなり然脇差を引抜いて追掛おっかけて来たから、逃げべいとするつまと木の根へ躓つまずき、打ぶつ転ころがると、己の上へ乗し掛り殺すべえという訳だ」

太「ハアえ、これは初めて聞きやした、成程飛んだ訳で」

角「所がなア、己が下で泥坊々々となつてゐると、其の時向山かりゆうどを通りかゝつたかりゆうど人は、鹽原角右衛門という浪人で、己のが

なるを聞いて助けべえと思つて、現在忠義の家来なり、妹を片付けば弟も同様な岸田屋宇之助を鉄砲で打つたえ」

太「はアえ、成程大けえ間違えになりやんした」

角「それがサ間違えで、そうすると其の獵人が駆付けて来て、死骸を見て魂消て、あゝ宇内か知んなかった、己が浪人して居るのを世に出してえと思つて金が欲くなつたかえ、そうとは知らず汝を打つた、あゝ可愛そうな事をしたつて、その立派な侍が男泣きに泣くつてやく」

太「はアえ、成程フン、とんだ氣の毒な間違いで」

角「するとなア、仕様がねえから己も手伝つて其の死骸を鉄砲で担いで、小川村の浪人の内へ行つて名告り合せて見ると、向うも

鹽原角右衛門、己も鹽原角右衛門、同じ名前なまえで不思議に思つたから、段々聞いて見ると、元は野州塩谷郡塩原村ごおりの者と分つて見ると、元は己と由縁ゆかりのあるものと分つたから、命が助かつた替りに金を向うへ遣り、其の時貰つて来たのが此処に居る多助よ」
太「はアえゝ、とんだ深い縁でがんす」

角「すると其の年の九月の五日に、保泉の原中でおかめを助け、段々様子を聞けば、娘が勾かどわか引され、亭主が死んだことを聞き、身い投げて死のうとするのを、段々論さとして止めて置くうち、先せんの鼻アが死んで、おめえ等が勧めに斯うやって今じやア女房に持つていた処が、此の二月江戸へ往つて火事場から連れて歸つたおえいは、十三年あと勾引された娘だという訳から、斯うして居るの

だが、己が亡ない跡では此の多助もどうせ女房を貰つてやんねえけ
 ればなんねえが、おえいと多助とは十九はたちしあいと廿年あひ合も好よかんべい
 と思う、母おふくろ親は多助のためには実の叔母なりするから、血統ちすじ三
 人で此の家うちを履めば大丈夫でいじようぶ、そうして太左衛門われ汝が後見をして、
 農作の事から何から万事指図をして呉くれれば、此の鹽原の家うちは潰れ
 めえと考えるから、己の息のあるうちおえいと多助と盃をさせ、
 夫婦にして、年に一度も小川村へ往つて右内という人の法事供養
 をさせてくれるように汝われに頼むのだが、己の考かんげえは悪いか」
 太「悪いどころじゃアねえ、誠にはア尤もの訳だが、そりやア貴あ
 方なたが癒なおつた後あとの事でよかんべい」
 角「癒らねえと思えばこそ盃をさせるのだ、サア此こ処けへ来て早く

内輪ばかりだから酒だけでいゝ、太左衛門なこうど媒人になつて早く酌

と急せきた立てられ、多助おえいの兩人は恥かしそうに坐つている所

へ、太左衛門は酒を持つて来て、まア嫁ツ子からと云われた時は、

何といふべき言ことの葉はも岩間いわまの清水しみず結び染めて、深き恵みに感じつ

ゝ、有難涙に暮れて居りましたが、角右衛門は七月二日終ついに歿みまか

り、戒名は一庵あんりょうしんしんし了心信士と申し、只今けんであらまちに八軒寺町とうようじの東陽寺

という寺に石碑が残つて居ります。先ず野辺の送りも済ませてし

まい、それから三十五日に多助はおかめおえいと五八を連れて、

養父の墓参りに参りました。其の時用事あつて太左衛門はまいり

ません。参詣終りて四人連立ち、帰り道で雨が降出しましたから、

多「五八や雨が降つて来て困るなア、沢山たんとの降りも有るまいが、

ひどくなると困るから此の木の下に雨宿りして居るから、駆けて行つて傘を取つて来てくんな」

五八「へい、往つてまいりましょう」

と急ぎ足で往つてしまふと、いつから附けて居りましたか、道連の小平と繼立の仁助が横合から頬冠りして出て来て、突然^{いきなり}おえいを担いで連れて往^ゆこうとしますゆえ、多助は驚き、一生懸命小平の足にしがみ付き盗賊^{どろぼう}々と云うのを、えゝ邪魔するなど蹴^け返^{かえ}せば、多助は仰向けに倒れたが、又起上り取付けば、おかめも驚き取付く所を横面^{よこつら}を擲^{はり}倒^{たお}す、又這寄つてしがみ付くうち、ずるゝとおえいを仁助が引ずりながら脇道へ入り込む。

えい「アレー人殺しゝゝ」

と云つても田舎の事ゆえ、助ける者は一人もなく、所へ通りかゝりましたは土岐伊豫守様の御家来はらたんおなじさんざぶろう原丹治同丹三郎という親子の侍、湯治に参りまして帰り掛けに、先程から女の声で人殺しと云うは何事なるかと急いで来て見ると、雨の中で打うちあい合が始まり、大の男が女を捕とらえて蹂躪ふみにじります様子が烈しいゆえ、見兼て丹治殿が突いきなり然女を連れて逃げようとする仁助の横よこびん鬢を打ぶつ、打ぶたれて仁助は踉よろける途端、前足を挙げてはたと蹴られて尻餅をつく、又小平が向つて来るやつを扇子を以てトーンと頭を打うちましたか、ら、両人は呆氣に取られて居ります。

丹治「狼藉者、女を捕とらえて何をする」

かめ「お蔭様で助かります、娘を勾引かどわかそうとする悪い奴にくでござ

います、どうか殿様お助け下さいまし」

小「殿様は何も知らねえからだ、あゝ痛^{いて}え、滅法に頭^ぶを打たれた、

殿様此の阿魔女^{あまつちよ}は私の妹^{わつち}ですが、勾引^{かどわ}かして江戸から此の沼田

の下新田まで連れて来た事を知り、母^{おふくろ}親と二人で掛合^{かあひ}に来やし

たら、土地の者には叶^{かな}わねえ、大勢^{まん}万^{まん}ぜい寄りたかつて私^{わつち}共に赤

恥^ちをかゝせて帰^{けえ}そうとするから、腹^{はら}が立^たつて堪^たらねえ、私^{わつち}が妹^いを

私^{わつち}が連れて行く^ゆに何も不思議^{ふしぎ}はねえ」

かめ「殿様、なアにこれは私の実^{まこと}の娘^{むすめ}でございませうが、七^{なな}歳^{さい}の時

彼^{あいつ}奴^{やつ}が勾^{かど}引^わかしたのでございませう」

小「なに殿様は何も御^ご存^{ぞん}じないのだ、私^{わつち}の妹^いに違^{ちが}ひないのだ、此

の間の火事^{かじ}に母^{おふくろ}親^{おや}に放^{はな}れ、行^い方^{かた}も知^しれねえから段々^{だんだん}様^{よう}子を聞^きく

と、此所ここに居る事が分り、路銀を遣い、此様こんな山の中まで尋ねて来て、手ぶり編笠あみがさで歸けえられましょうか」

かめ「そうじやアありません、彼奴から私の方へ此の娘を渡したという証文を入れ、印形まで捺おしてよこしたから、金子を五両遣つたのでございます」

小「旦那は何も御存じはありません」

丹治「何だか貴様達の云うのは己にはさっぱり分らん」

と云いながらおかめに向い、

丹治「一体どう云う訳だ」

かめ「全くは私が娘で、七歳ななつの時に勾引かどわかされた者でございます」

丹治「そうだろう」

と云つて居るうしろ後に立つていたせがれ俵の丹三郎は、折々ともだち朋友に誘われ、三田のあだ屋へ遊びに往つた事がありますから、お梅も小平もかね予て知つて居る事ゆえ、

丹三「お父とつさま様、あの男は道連の小平という悪い奴で、胡麻の灰などをすると承わつて居ります、母おふくろ親も余程悪党だそうでございます、嘘でございましょうよ、慥たしか其の娘は幼年の時攫さらつて来たのか知れません、何でも其そいつ奴は胡麻の灰だという事です」

小「何だ人を胡麻の灰と云つたな」

丹三「黙れ、貴様己を知つて居るだろう、同役と一緒に貴様うちの家へ往つた事があるが、胡麻の灰だと云う事だ、ぐずぐずすると手打にするぞ」

と云われて兩人ふたりの悪者は這ほう々々／＼の体ていで逃げて行きゆます。後あとに親子三人の者は大喜びにて、マア兎も角もお礼を申したいから、宅へ入らして下さいと云うので、これから丹治親子を下新田の宅へ連れて帰りましたが、これが多助のために大難の来る起りに相成りまするお話は、次回つきまでお預りに致しましょう。

六

鹽原多助は養父角右衛門みまかが歿みまかりまして、三七日の寺詣りにまいりました帰りがけ、悪者小平、仁助のためにおえいが再び攫さらわれてまいる所へ通り掛りましたのは、土岐様の御家来原丹治親子で、

危い難儀を救つて呉れましたゆえ、実に地獄で仏の譬たとえの通り、誠に有難いお方様で、どうか私宅わたくしまでいらつしやいまするよう、何はなくともお礼を申上げたいと申し、またおえいは三田のあだ屋に居りました時分、丹三郎がちよくく遊びにまいり、馴染ではあるしする所から、打連れ立つて多助の宅へ寄り、馳走になりましたが縁となり、是より度々たびく此の家うちへ丹治親子が遊びに参りますると、丹治も年四十五歳なれども鰥やもめぐら暮しでございますし、おかめも夫角右衛門が亡りまして未だ三十七という年で、少し梢す枯がれて見ゆれど、色ある花は匂い失せず、色気たつぶり沢山でございます。殊に家来右内と密通して家出をするくらいの浮気ものでございますから、酒の上とは云いながら、遂に丹治と密通致し、おかめは

深く丹治を思いますが、世間の手前多助の前もありますが、忍びくおおびらに逢うことも度たび重かさなり、今ではもう恥かしいのも打忘れ、公おおびら然で逢い引を致しますゆえ、人の目めつまに掛ることも度々あり、おかめはどうか丹治と一つになりたいが、そうするには多助を追出さなければ邪魔になつてなりません、多助を追出すには何うしたら宜よからうと考えますと、又悪智の出るもので、丹三郎も未だ独身ひとりものなり、どうか丹三さんとおえいと色にでも成つたなら、私も丹治さんと俱とも々々に未永く楽しめるだろうと思ひまして、主ぬしあるおえいに色事を勧め、丹三郎と密通をさせ、親子同志で姦まおとこ通をいたし、誠に宜しからぬ事で、多助も薄々知つては居りますが、事荒立て、は血で血を洗う道理、家いえの恥おのれ己の恥こと、殊

に亡なつた養父角右衛門のお位牌へ対して濟まないし、あゝ情ない心得違いの母親はくおや、殊に女房おえいまで左様な事を致すとは、犬畜生のような奴と思ひますが、何うも事を表向にする事が出来ません、相手は御領主土岐様の御家来なり、迂濶の事を言ひ立たてることは出来ませんが、どんな人の好よいものでも、自分の女房を人に取られて腹を立たないものはございせんから、多助も腹が立ちますから寧いっそ此の家うちを駆け出してしまおうかと思ひましたが、いやゝゝ此の家うちを出たならば必ず原丹治親子が此の鹽原の家へ乗込んで来るに違ひないが、侍には百姓業わざはとて出来ないので、鹽原の家いえは必ず潰れてしまふに違ひない、どうも此の家うちを潰しては八歳の時から貰われて来て育てられ、大恩ある親父様に濟まぬ

義理、石の上にも三年の譬えもあれば、どうか此處こゝで優しく孝行を尽したら終つひには母の心持も直り、丹治親子を寄せ附けぬことにもなろうかと思ひ、母子おやこ諸共非道に多助を虐いじめるのを怨み返しも致しませんで、優しゆう孝行をすれば猶更附上り、其の年の九月になりました所、益々多助を悪にくみます。多助も色白で短身こづくりな、温順おとなしい好よい男でございますが、田舎稼いぎを致しますからじゝむさく、家うちにとては居る事も稀で、月に六度たびぐらいは馬を引いて歩るひき、殆ど家うちには寄り附きませんから、日に焦やけて真黒になり日ひなたくさ向臭なたくさい、又丹三郎は江戸育ちのお侍で男振も好く小綺麗でございますから、猶更多助が厭で実に邪見にする事まる全一年、その間一まつ寝もせず振付けられても、多助は辛い所を忍びくゝて馬を引い

て出ますが、人に話も出来ませんから、泣きながら馬を引いて歩くので、世間の人が泣き多助々とと縋名あだなを致します位のこと、それでもおかめおやこ母子は増長して多助を虐め出そうとするうち、丁度八月朔ついたち日の事でございます、丹治父子おやこが多助の家うちへまいりましたゆえ、どうか多助を無いものにしようと思ひ、おかめは丹治に向ひ、

かめ「私わたくしもマアこうやつてお前さんに何時も御無理なことを願ひ、貴方もお非番の時には度々たび来て下さいます、お役人様ゆえお泊りなさることも出来ませんけれども、どうかして月に五六度たびはお泊め申したいと思つて居りますが、世間の手前多助の前もありまして、思う様に参りませんが、本当に此の頃は変に多助にくが悪ら

しくなつて来ましたよ」

丹治「斯うやつて父子おやこで度々遊びに来るのは宜しいが、多助も馬鹿でない男だから、疾とくより訝おかしいと感附いて居るだろうが、来る度に厭な顔もしないで、旦那様宜よくいらつしやいました、お母つかさん御馳走をして上げて下さいよとへいへ云つて置へ頭をこすり附けるようにされるので、何となく来にくくつてのう丹三郎」

丹三「毎度お父とつさま様も左様仰そうしやつていらつしやるのサ」

かめ「なアに貴方彼奴あいつだつて私わたくしの子ですから私の氣に入らなければ叩き出しても宜いのですが、そうもいきませんから、何ぞ仕様があつたらばと思つて居るんですが、貴方も宜く心掛けて置いて下さい」

と話をしている所へ奥からおえいが手紙を持って出てまいりました。

かめ「旦那様がおふたり兩人来ていらつしやるのに何をして居るんだよ、マア此処へお坐りよ」

えい「おや旦那様宜くいらつしやいました、アノお母つかさん、多助さんが今朝帯を締める時に袂からこれが落ちましたよ」

と手紙をおかめの前へ出し、

えい「分家のお作さんから多助さんの所へよこした色文で、まア馬鹿くしい事が書いてあるの」

かめ「おやまア年頃になるとおかしなもんだねえ、多助がいゝとか何とか云つて惚れて居るそうだが、まア旦那此の文を御覧なさ

いよ」

と云うに、丹治はどれ／＼と云いながら其の手紙を取り、

丹治「成程ちい少さいうちから機織はたおりや糸繰いとくりばかりさせて置いて、

手習などをさせんから手の書けないのは無理もないが、俗にいう

貧の盗みに恋の歌とやら、妙だなア、鉄釘かなくぎの折おれのようにポツ／

＼書いたなア、えゝ、なに／＼……一筆書ひとふできしるし 《より》

……アハハ、これでは丸で附文つけぶみのようだ」

と丹治が手紙を読みました故、おかめはこれを好機会いっしおにして分

家へ話をすれば、分家の爺じいは堅いから多助を追出すのは手間暇い

らずだから、斯ういう都合にしましょう、彼あいう都合にしましよ

うと密々ひそく／＼話ばなしをしている所へ、何にも知らず、仏と云われる多助が

帰つてまいり、勝手の方から上つて来て、

多「旦那さんお出なさいまし、此間こねえだは私わしらが留守の所へお出でゞ

がんとしたそうでしたが、何時もろくな物も上げましねえでおそ

うく
々べい致しやす、今日は又宜くいらつしやいやんした」

丹治「おゝ多助か、毎度来て厄介になつて気の毒だ、外に馴染もないものだから、それゆえに斯うやつて来るのだが、お前も少ちいさい時から田舎者に成つたけれども、江戸生れだそうだが、斯うやつて江戸子同志えどっこで寄集よりあつまるとは誠に頼もしいものだ、毎度種いろ／＼々、馳走になつて済まない、決して構つてくれるなよ」

多「何も上げる物はない、お母かさん、どうか旨い物を出して御馳走をして上げて下せえ」

と云いながら表へ出にかゝると、

かめ「出て往つちやアいけねえよ、少し話があるから待ちねえ、お前は本当に呆れたひどい奴だよ、此の節は家へ寄り附かないと思つたら、分家の娘お作と私いたずら通をして居るね」

多「へい、なんですねえ」

かめ「とぼけなさんな、お作とくつついて居るだろうよ」

多「こりやアまア魂消たなア、お母さん誰かがそんな事を云いやんした、分家の娘と浮気狂いをした覚えはがんせん」

かめ「おい／＼いくら口の先でしらを切つても、書いたものが証拠だ、これでも嘘だと云うか、これを見な」

と彼かの手紙を多助の前へ投ほうり出すを、多助は手に取り、

多「こりやアお作が己おら所とこへよこした手紙だが、こんな手紙があったか、困った奴だナア、まアお母かさん、私わしが所とけへ此の手紙を送ったか知りませんが、私覚えはござりやせん、どうしてあんた此の手紙を持って居やんす」

えい「多助さん、お前さんが今朝衣物きものを着換える時袂たもとから落ちたから、私がお母つかさんにお目めにかけたのだが、お前さんもあんまりだねえ、私もこうやってお前さんと夫婦にはなつて居るものゝ、今日までろくに口もきかないが、其そん様なに私が氣に入らなければ、お母かさんに話を附けて貰つて離縁状を書いて下さいよ」

かめ「おえいは私には只ただ一人の可愛いゝ娘、其の連添う夫に私わ通るをされては世間へ対して外聞わいぶんが悪いから、世間へ知れない内、

只たつた今おえいに離縁状を書いて渡して遣つておくれよ」

多「お母かさん、何うぞ御免なすつて下せいまし、仮令書いたもの
がありやしても知りやせん、私わしお作イと私通わるさアした覚えは何処まで
もがんせん、又おえいに離縁状を出すことは出来やせん」

丹治「これく多助、何もそんなにしらを切る事はない、此方こちらに
は書いた物という慥たしかな証拠があつて母が云うのだ、又男の働はたらき
で一人や二人の女をこしらえるのは、当あたり前まえだから、くツついた
らくツついたと云う方が宜しいわナ」

多「宜えも悪いわりも私わし些ちつとも覚えはがんせん」

かめ「書いた物が何よりの証拠だに、お前が幾許いくら知らないと云つ
ても無益むだだよ、これから分家へ往つて話をするから一緒においで」

と云われて多助は当惑致し、

多「分家へ往いくつて、これは何うも困りやしたなア、叔父さんは
ものがて物堅えから、そんな事を聞かせたら怒つて、私わしい済みませんで
でへい出入りも出来なくなりやんすから、どうか御勘弁を願ねげえてい」
 かめ「御勘弁だつて、慥たしかな証拠があつて見れば仕様がない、そ
 ういう了簡ならばおえいに添わせて置く訳にはいきませんと云つ
 て、何時まで独身ひとりでも置かれなから、亭主を持たせるから離縁
 状をお出しよ、何故なぜ離縁状が書けないのだよ」
 多「何故書けねえつたつて、是れべいはどうあつても書けやしね
 え、死んだお父とっさま様の遺言に、汝われとおえいとは従弟同志だから夫
 婦にしてやるが、苟かりそめにも喧嘩して夫婦別れをするような事があ

ると、草葉の蔭かげから勘当だぞと云いやんしたから、私も大わし概てえげえな事があつても父様にめんじて堪これえていて、何一つ云つた事はがんでん、私も我儘わしものでがんですが、家内うちわで物争いが出来て、おえいを離縁しては、何うも死んだ父様のお位牌いへいへ対して済みやしねえから、おえいに私わしが氣に入らねえで夫婦に成つて居るのが厭いやならば厭やで構いやせんから、家内うちわは切れても表向だけは夫婦と言わなければ、世間へ対し、分家の叔父様に対して済まないから、何うぞ然そうして下せい」

かめ「それ程義理を知つて居ながら、何故分家のお作と淫いたずら事をしたよ、ぐずくして居てじれつていな」

と云いながら、有ありあわ合せた細い粗朶そだで多助の膝をピシイリく

と打ちますから、多助は泣きながら、

多「御免なすつて下せえまし」

と言うを耳にも掛けず、これでも言わねえか〜と二つ三つ続け打に打たれて、多助は心の中で、情ないとは思いながらもしおらしく、

多「お母さん、何うぞ堪忍しておくんなんし」

と下から出れば附け上り、おえいも共にまくり立て多助にくつて掛る所へ、這入つて来たのは此の家の分家の太左衛門で、此の様子を見兼ましたから、つか〜とおかめの傍へまいり、

太「まア待たんしよ、何だ多助、まア〜私が来たから待つておくんなんし、やい多助、汝大え形をして母様に折檻されるとい

様な馬鹿なことが有るか、母様どういふ訳だか知んねえが、まあ待つてお呉んなんし」

かめ「おや、お前さんがお出でなさろうとは思いませんでした、ほんの家内うちわだけの事ですが、余り私あんまも腹が立ちますからついであら暴いことをしましたが、今お前さんの所とこへ往ゆこうかと思つて居る所とこへ、あの御城内の原さんがいらつしやつて」

太「これはへい毎度めいど多助から承わつて居りやすが、私わしは一つ村方でも上かみしも下を隔てゝ居りやすから、ろくに此の家うちへ参りめえやせんから、御挨拶も致しやせん、何分御鼻屑を願ひやす」

と慇懃いんぎんに両手を付きますと、

丹治「いや、とんだ間違いでねえ、手前も迷惑を致した」

太「何か知りやせんが、届かん奴で意気地なしでがんすから、それは母親おふくろに打たれるという馬鹿で、多助、汝われ此処うちの家の相続人で、汝われが此うちの家の心棒だ、一軒の主ぬしたるものが仮令たとえどうい悪い事が有あるつたつて、母でも無闇に打ぶたれるという論はない筈だ、何をしくじつた」

多「私わし悪いでがんすから、叔父さんお母つかさんに詫言わびごとして下せえ、お願ねげえでんすから」

太「何わる悪い事を仕たんだえ」

かめ「なにお前さん、どうも人に話も出来ませんけれども、言いましようが、実はお前とこさん処のお作さんと多助と密通くつついて居りますねえ」

太「はて、それはどういふ訳で」

かめ「親の目つまを忍び逢引するが色事で有りますが、本家分家の間柄で、大それた事をして居りますから、私が厳しく云わなければ世間様へ済みませんよ、是を見て下さい」

と言いなながら彼の^か手紙を太左衛門の前に置く。

太「はい成程、己^{おら}アお作が多助へ送つた文^{ぶん}だが、馬鹿なマア此^{こねえ}間^だまで、青^{あお}鼻^{おつばな}アくつ垂^{たら}して、^{まさき}枳^まの葉^はで笛^{ふえ}を拵^もえて遊んで居

たのがハア、こんな事を仕出かすように成つたかえ、ナント馬鹿々々しい事だがのおかめさん、此の手紙の文を読むと、娘が多助に惚れて手紙を送つたか知んねえが、多助が方では知んねえに違いいねえというものは、未だ密^{くつ}通いたとも色事をしたとも文面に証

抛はねえのに、之を証抛にして荒立て、事を出かせば、此処の家うちも己おらア家うちも恥になるからこれは私わしに負けておくんなせえ」

かめ「お気の毒ですがまけられませんかよ、他の事とは違います、本当に呆れた奴でございませぬ、多助がそういう根性だとおえいが可愛そうでございませぬから、今の中うちに切れ話にして、おえいに実のある堅い亭主を持たせる了簡ですから、離縁状を書いてわたした其の上で、多助をお作さんの婿にするとも何うとも勝手におしなさいよ」

太「まだ色事を出かした訳でもねえのだから、穩便に済ませれば世間へも知んねえから」

かめ「いけませんよ、馬鹿々々しい、余あんまりな不人情だからお前さ

ん早く離縁状を書かせて下さいましよ、書かせて下さらなければ、私もおえいと一緒に出て往ゆきますよ」

太「お前めえが何も出る訳はあんめえじやねえか、そんなら是程頼んでも勘弁は出来やせんか、己おらア娘は未だ主ぬしのあるものじやねえ、きむすめ処女ぢよでございやす」

かめ「だつてお作さんは、幸右衛門こうえもんどの倅の圓次郎さんが養子に往ゆく約束になつて居るじや有りませんか」

太「約束になつて居りやすが、未だ結納を取交した訳でもなく、唯ほんの口約束だけの事で、婚礼をした訳ではがんせんから、どいう事があつても間男と云う訳はあんめえ、又男の働きで一人や二人の女も出来ねえとも云われねえ、それどころ処どじやない、立派な

亭主持の身で有りながら悪いことをするものが世間にはいけいこ
 と有りやす、一昨日店おと、いたなで盆の余り勘定をしていると、彼あすこ処では酒
 も売り肴もあるもんだから、若いお侍わけ さむれえが腰掛けて一杯ぺいやつていた、
 其の人の年頃はそうさ廿二三で、ちようど其処に入らつしやる丹
 三郎様ぐれえの年恰好で、貴方あんなに能く肖よているお方サ、すると女
 の艶いろぶみ書の伝つてを児守子こもりっこに頼んで手紙を其のお侍さむれえに渡すと、お侍
 が惚れた女からよこした手紙だから飛立つように喜んで、其の文ふみ
 を開いて読んでしまい、丸めて袂へ入れた積りで出て往つた跡を
 見ると、其の手紙が落ちて居たが、これは済まねえ訳だと思ふが、
 此の文の文面で見ると、去年のマア八九月あたりから悪い事をし
 やアがって、今年になるまでくつついて居て、其の亭主が邪魔に

なるもんだから追出してしまいでえと思ひ、科とがもねえ者へ不義の名を付けようとするだ、太ふてい阿魔じゃねえか」

と云いながら懐より手紙を取出し、

太「なに／＼名前は丹三郎さま参めいるおえいより、何だ手を出さねえでもえ／＼よ、似た名もいけい事あるもんだ」

おえいより丹三郎さまと聞くより、おかめも顔色変え、

かめ「詰らない事をおしなさるな」

と云いながら太左衛門の持つてゐる手紙を取りに掛る。

太「手を出さなくつてもい／＼よ、斯ういう悪い事をする太い阿魔があるだが、天命で此の文を落し、己おらが手に入るへえのは罰ばちだ、併しかしこれも世間へ出せねえ文、己ア娘の書いた此の文も世間へ出せね

え文だから、此の二通とも一緒にして囲炉裏の中へ投つ焚くべて反ほ故ごにすべえじゃねえか、私わしに預けておくんなさい、世間へ知れ、ば家うちに疵が附いて、お互の恥だ」

と云われておかめは丹治父子おやこと目と目を見合せ、おどくしな
がら、

かめ「お前さんが入つて口をきいて下さいましたから、これから
は当人も謹みましようし、実にどうも捨て置かれませんか折檻
しましたが、そんなら此の手紙はお前さんに預けますから、どう
でも好よい様にして下さいまし」

太「それは有ありが難たいこんだ、これ多助よ、去年の六月三十日汝みそかわれえ
親父が死ぬ時に枕元に己おれを呼んで云うのに、おえいは多助と従弟

同志なり、今の母様かゝさまは多助のためには実の叔母だ、一家に血統ちすじが

よりあつまま 寄 集り、此の家を相続するだから、鹽原の家いえに取つては此の

位な芽出たい事はあんめえから、多助がおえいと夫婦別れでもす

る様な事が有つたら、汝われえ後見人に成つて、どうか鹽原の家いえに疵

を附けねえように頼むと、死んだ父とつさまの遺言をば、此の文のよ

うに反故ほごにされてはだめだぞ、馬鹿野郎め、汝われ様な意気地なしが

あるかい、二十はたちを越した男が母様かゝさまに打ぶたれるとは情なさけねいこんだ、

おらうちうち 己こア家へ来こう、大いけえこと小言云わなければなんねえ」

多「重じゆうく々 濟みましねえ事に成りました、どうぞ堪忍して下せ

え、お母様つかさん宜く勘弁しておくんなすつて有難うがंस、直すぐにお

宅うちへ往つて御意見を受けます」

太「誠に皆様は御迷惑を掛けやした、左様なら」

と態わざと多助に荒々しくいつゝ引立て、太左衛門は帰りました。

跡に丹治はおかめと顔見合わして太息といきつき、

かめ「どうもねえおえい間拔じやないか、丹三たんざさんへ送る手紙を

無暗むやみに守もり子などを頼む奴があるものか、いけねえよ、そうして

爺じいに拾われ困った事をした、なんぼ年がいかないからといって、

さわくばかりして居るよ、気が利かないじやアないか、多助が

帰らないうち丹三さんをお寝かし申しな」

と気を利かして二人を次の間へ遣る。丹三おえいは屏風うちの中に入

つて逢引を致します。跡はおかめと丹治と差向い、

かめ「あの爺はなんぞというとわい〜云つて多助の鼻屑をする

ので私はしみ／＼多助が憎らしくなりました、旦那貴方あなたどうか多助の畜生を殺して下さい」

丹治「殺して下さいと云つて、殺した後あとを何うする積りだ」

かめ「殺してさえ下されば、誰だか知れない、大方追剥おいはぎでも殺したのだらうと云つて済ませます、当人さえ居なければ名主ちへ一よつと

寸話をして置きますから、時が経つたら丹三さんは病身でお屋敷奉公は出来ないという所から、おえいの養子によこし下さい、

そうすれば貴方は御城内に勤めていらしつても御隠居というので、表向にちよく／＼お出いでになるに都合が好よいじゃございませんか」

丹「うっかり村方で殺やると、百姓共に勘づかれるといかんから浮うかとは出来んの」

かめ「此の五日には多助が元村もとむらへ小麦の俵を積んで往きますが、日暮方から遣りますから、山国の事ゆえ天氣の好よいのは当あてにならあてないから、桐油とうゆを掛けて往ゆきなと云つて、鹽原と大きく書いてあるのを掛けてやりますから、見違える氣遣いは有りません、多助が馬を引いて歸つて来る時、桐油を見当みあてに庚申塚辺あたりでむちやくちやに斬り殺して、お屋敷に歸り、知らん顔をしていて下されば、此方こちでは試し斬りにでも逢つたとか何とか云つて極りが付いてから、丹三さんをよこして下されば、三百石持の主人あるじ、それに未だ些ちつとは貯えもございます」

丹「跡方あとかたの知れるような事が有つてはならんよ」

かめ「大丈夫でございます」

と云われて、そんならばと庚申塚に身を潜め、多助の歸りを待
 受けて斬殺きりころす了簡になりましたが、誠に不届な奴でございます。
 其の日は丹治父子おやこが歸り、扱さて五日になりますと、多助は何なんにも知
 らず馬を引いて諸方を歩いて、夕方歸つてまいりました。

かめ「アの御苦労だが、追々秋ぐちは用が多いから、直すぐに小麦を
 積んで往つて来ておくれ、また降るといけないから桐油を掛けて
 いきな、あの新しい方がいゝよ」

と云われ、多助は「はい」と云いながら、曳慣れたあおという
 馬を曳いて御城下の元村へ参ります。道は三里あまりで、上下
 六里の道でございますから、何程いくら急いでも只今の十時、其の頃の
 四ツ余程　りました頃で、五日よいづき月こは木の間に傾きほのぐら

く、庚申塚までは三町ばかり手前の所まで参りますと、馬は自然に主人の危難を悟つたものか、足が進みませんで、段々跡の方へ退りますゆえ、

多「青、困るべえじゃねえか、ヤイ青、荷を皆な下してしまつてからみなつ、空身に成て、歩けねえ事はあんめえ、遅く帰ると母様に叱られるから急いでくんろよ、そう後へ退さかツちやア困るべえじゃねえか、青々どうした青」

と言いながら力を込めて手綱たづなを引きますけれど少しもきゝません、引けば引くほど馬はだん／＼あとへ退さかるから、多助は涙ぐんで馬を引出そうと致しますが、中々動きません。すると後あとの方から荷を担いで来る人の足音に、只見とれば幸右衛門の伴圓次郎と云

つて、今年廿五歳になり、多助とは極中好しの友達でございます。

圓「其処に居るのは誰だ」

多「圓次どんかえ、何にねえ己ア元村まで往つた帰りだが、己ア青が此処で急に動かなくなつて、打つても叩いても後いべえ退つて困るだ」

圓「そりや困つたナ、己見てくれべえ」

と云いながら荷を卸し、馬の傍に寄り、

圓「これ青や、どうしたゞ、これ後へ退るか足でもどうか成つてるか、痛む氣遣はねえが、多助の母様は喧ましい人だから早く往つてやれ、青どうした、汝塩梅でも悪いか」

そんな事を云つても馬は何とも申しません。

圓「誠に困つたな、己おれ引いて呉ればえ、ハイくくく、歩くようになつた」

多「誠に有難うがंस、己おれ手においねえから、何うしべえかと思つた、さ一緒に参めえりやすべえ」

と往ゆきにかゝると、

多「あれ、又止つたよ、青どうした」

圓「今汝われえ歩いたじゃねえか、どうしたゞ、動いごかねえか」

と圓次が引出し、

圓「はいくくくく、歩いて来た」

多「誠に有難ありがたえ、平常つねこんな事はねえ、どんな重い荷いい付けても

悪い顔をする馬ではがんです、アレ又止つた、青々」

圓「青々」

青の掛合でございます。

圓「何ういうものだが、己おれが引けば歩くだから、己おら此の馬を引いて往ゆくべえ、汝われ此の荷を担いで呉れ」

多「ハア、そうして下せえ、そんなら此の荷は己おらが担いで往ゆきますべえ」

と担いで見ましたが、多助は肩に力がありませんから蹠よろめきながら担ぎ出す。圓次は馬を引きながら、シャンくくくくくと庚申塚へ掛つて来る。此方こちらは先刻より原丹治が刀の柄を握りつめ、裏と表の目釘を濡しめして今や遅しと待設けて居る所へ、通り掛りまするといふ、此の結局おさまりは何う相成りますか、この次までお

預りに致しましょう。

七

譬^{たと}えにも、禽^{きん}獣^{じゆう}といえど道有つて理なきにあらざうという事がございまして、畜生が口をきく訳はございせんが、人間の云う事は分るまいと思つと分りますると見えて、此の頃は何方^{どちらさま}様へ参りまして洋犬^{かめ}が居りまして、其の洋犬^{かめ}が御主人^{つかい}の使^{つかい}をいたし、或^{ある}は賊^{あし}を見て吠える所で見ますれば、他人と主人^{ちやん}とは正と自然に其の区別を知つて居りますので。今多助が引慣れた青という名馬は南部の盛岡から出たもので、大原村の九兵衛方より角右衛門が

買取つたのを、多助が十二歳の時よりいた勞わつて遣つて居りますから、庚申塚の前へ来ると馬は足が自然に前へ進みませんのは、丹治が待伏している事を知り、後の方へあと退ります。圓次が引けば動き、多助が引けば動きませんゆえ、圓次は右の青を引出し、多助は御膳籠を担ぎ、急ぐ積りでございますが、馬は足早にポカ／＼駆出すように行つてしまい、庚申塚へ掛つた時は最早圓次の姿は見えなくなりましたゆえ、余程おく後れた様子、多助は重荷を担いで居ります故、七八町も後れましたから、畑中を突切れば道が近いと云うので、荷を担いで桑畑の間をセツセと参ります。此方こなたは圓次が今庚申塚へ通りかゝる。時は宝曆十一年八月五日、宵闇の薄暗く、木の間隠れに閃くやいば刃を引抜きて原丹治が待受まちうける所へ通

りかゝる青馬に、おおもじ大文字に鹽原と書きたる桐油を掛けて居ります
 ゆえ、多助に相違ないと心得、飛出しざまプツリと菅笠の上か
いとたてら糸経いとたてを着ている肩先へ斬込まれ、アツといいながら前へ俯のめ
 る時、手綱が切れましましたゆえ馬は驚きバラ／＼と花野原はなのばらを
 駆出し逃げて往ゆく。手負ておいはうんとばかりにのたりまわるを、丹治
 は足を踏み掛けて刀を取直し、喉のどもと元をプツリと刺し貫き、こじ
 られて其の儘いき氣息は絶えました。丹治は死骸きものの衣服で刀の血を拭
 い、鞆たちのに納め、急ぎ其の場を立退き、多助の家いえの裏手から庭先へ
 忍び込みまして、雨戸をホト／＼と五つばかり叩くと、合図と見
 えておかめは丹治と心得、そわつきながら密そつと雨戸を明け、
 かめ「スツパリ殺してお呉んなすつたかえ」

丹治「手筈は十分だった」

かめ「有難う、まあ本当に万ひよっと一やりそこなやしないかと、どんなに心配したか知れませんが、彼奴あいつさえ殺してしまえば是からは自由ですから、今夜はお泊り遊ばせな」

丹「いや／＼泊る訳にはいかん、直ぐ城内へ帰って当分は来ない」
かめ「初七日でも済んだら、とんだ事だったとか何とか云いながら顔出しをなさらないと人がけどりますから、七日でも済んだら来て下さいよ、気を付けてお帰りなさいまし」

丹治は其の儘立帰る。左様な事とは少しも知らず、多助は荷をギシ／＼担いで圓次郎の家うちへ遣つて参り、

多「伯母さん明けておくんなさえよ、伯母さん」

婆「あい、誰だかえ」

多「多助でがんす」

婆「おやまア、今明けやす、宵から締りを附けて置きやんすよ、
さアお這入んなせえ」

多「誠に御無沙汰をしやした、月が替つてから大く寒くなりやし

た、なにねえ元村まで小麦い積んで往つた帰り、庚申塚まで来る

と馬が退つて動かねえで困つてゐる所へ、圓次どんが通り掛け、

圓次どんが見兼て引いてくれたら青が歩くから、己馬を引いてや

んべいから、汝荷担いで帰れと云つて、圓次どんは先へ帰りやし

たよ」

婆「圓次は未だ帰りやせんが、寄り道でもして居るかも知んねえ」

多「己より余程先へ出た積りだよ」

婆「後から帰るかも知んねえから：まア茶一杯呑みなさんし

よ、多助さん、村の者が皆噂して居りやすが、母様が邪見で、

お前のような温順な人を打ち敲きして折檻するとは情ない母様だ、

そんでも怨みもしねえで母様を大事にする、あんな温順な人はね

えと噂をして居りやんすよ、どうかマア軽躁の心を出さなけ

れば好いと心配して居りやんすから、身体を大事にして時節を待

つがようがんすよ」

多「はい、有難うがんす、伯母さん己ア母親は我儘ものでがん

すが、私も亦遠慮なしに抗弁事をしやすから、そんで打ち敲

かれやすのだから、強ち母親ばかり悪い訳ではがんせん、私が届

かねえから小言を云われるので、どうか心配しんぺえしておくんなさるな」

婆「その心根が別だよ、宜ようがんす、はい、マア大事でいじに」

多「伯父さんにも宜く云っておくんなさえよ、左様なら」

と圓次郎の家いえを出まして、我家わがやの門まで来ると、生垣の榎木の所に青がによきりと立って居りました故、

多「青どうした、汝われ独り此処に来て何だ、圓次はどうした、家うちへ帰けえったか」

と云つても馬が挨拶は致しません、家来のような心持がすると見えます。是れから馬を引いて小屋に繋ぎ、自分は台所口の上か総戸ずさどを明けながら、

多「はい、只今帰りました」

という声におかめは驚き、幽霊かと思い、声慄ふるわしながら、

かめ「どうしたんだえ」

多「誠に遅くなりました、どういう事か宅うちの青が庚申塚あたりまで来ると後あとへ退しきつて、些ちつとも動いごかねえで困っている所へ圓次が通り掛り、圓次が引くと青が歩くから、圓次の荷を私わしが担いで、荷は今圓次の家うちへ届けて帰つて来ると、青が表に立っていたから馬小屋へ引込んで、大きに遅くなりやした、御免なせえ」

かめ「そうかえ、道理で帰りが遅いと思つた」

と口には云えど腹の内で、扱さては丹治殿は多助と間違えて圓次郎を殺したに違いない、忌々しい事をした。と思案に沈むは実に悪にく

むべき奴でござります。幸右衛門の家では圓次郎が帰らぬというので家の騒ぎは一方ならず、すると或る人の知らせに、圓次郎な庚申塚の前になさけない死状しにざまをして居るといので、急に検使を受け、泣く／＼村方の寺へ野辺の送りを済ませましたが、多助は如何にも気の毒に思い、一緒に来れば宜かったと幸右衛門夫婦に詫わびをすると、夫婦は諦めの宜い人で、是も定まる約束ずくだろうから心配しんぺいしておくんなさるな。と事なく済みましたが、多助は少ちいさい内から仲好なかよしの友達のことゆえ、間まさえあれば圓次の墓はかし所よへまいり、墓掃除をいたし、香花こうげを毎日手向けてやって居りました。丁度十日目のことで、多助は墓はかま参まいりをして帰ってまいりますと、

かめ「多助何処へ往つたえ」

多「へえ、圓次の墓参りに参りやした」

かめ「そうか、墓参りでもしてやらなければ冥利が悪いから、度々してやんなよ、圓次も浮ばれやしないのサ」

多「誠に気の毒な事ですが、私も種々訳を話して幸右衛門どの母様に謝りやしたら、なに皆な定まる事だ、因果と云うものがあるのだから心配しねえが宜いと云われるだけ、私は気の毒で堪りましねえ」

かめ「誰も居ないから話をするが、圓次郎はお前が殺して、荷を盗んで城下へでも売ろうと云う考えでやったろうな」

多「へえ、フウ、どうも魂消やんしたなア、お母さん、他の事と

は違いやす、私わし圓次を殺したと誰そんな事を云いやんした」
かめ「誰も云いやアしないが、天知る地知るの道理、皆みんなな罰ばちだ、
お前めえのいう事が皆間違みんなっているから、宜く考えて見な、此の間帰
った時何と云った、馬を私わしが引けば動いごかず、圓次郎が引けば動いごく
と云ったじゃないか、引き慣れた馬をお前まえが引けば動うごかなくつて、
圓次郎が引いて歩くと云うような間違まちがった話があるものか、大方
お前まえが圓次を殺して、御膳籠ごぜんろうに一杯ある荷を盗み、人知れず売つ
てしまつて、小遣にでも仕ようと云う了簡で遣った所、露頭する
のを恐れ、旨く拵え事をして圓次どんの所へ荷を返したんだろう、
それを馬が動いごかないなんぞとずうくしい、お前めえのような怖い人
はない、人には云えないが、しまいには親ねくびの寐首ねくびを搔き兼ないよ、

今日という今日は実に呆れたから、只たつ今出て往っておくれ」
多「モシどうぞ御免なさってください、他の事ならどんな事を仰
しやっても、お母つかさんの言う事は例え御無理が有りましても、お
言葉に背くめえという願掛けでございしますが、圓次を殺したとは
情ない、幼ちいさい時から一つ村で生立おいたつて、殊ことに仲の好ええ圓次を殺
し、物を取つて城下へ売るなどと何を証拠にしてそんな事を云い
なさるか、お情ねえ、仮令たとえどんな事が有ろうとも神かけて覚えは
ござりやせん」

と泣声を振立て、言うに、おかめは、

かめ「とぼけなさんな、分家のお作とくつついて居るものだから、
養子に行くゆ約束のある圓次を邪魔にし、圓次さえなければ末永く

お作と楽めるといふ了簡に違いない、夫程それほど氣にいらぬおえいを女房に持たして置くのは氣の毒だから、只ただ今離縁状を置いて出て往ゆきな」

多「どうぞ御免なさい、此の家うちを出ては死んだ父様のお位牌に濟みません、おえいの氣に入らなければ私わしを亭主と思わねえでも宜うがंस、又母様かゝさまも子と思わず、奉公人だと思つて台所の隅へでも置いてくだされば有難うがंस、私は八歳やっつの時から此の家うちに貰われて来て、死んだ父様とゝさまの丹誠で大きくなりましたから、是から恩返おんげえしをしなければならぬ身体、今追出されては恩返おんげえしが出来やせんから、どうか堪忍しておくんない」

かめ「ならないよ、出来ませんよ、離縁状を書いて出て往ゆきな、

お前が出て往ゆかれなければ私が出る」

多「あゝ申し、親を出して子が残っている訳にはめえりません、どうか御勘弁なすつて下さい」

と云つている傍から、

えい「今お母つかさんが云う通り、ねえ去年お父とつさんの遺言でお前さんと夫婦にはなりましたけれども、女房らしくしておくれでないから、それ程いやなものを無理にいてはお気の毒でございませぬ、お作さんも圓次さんが死んでしまえば自由気儘だから、好いたお作さんと夫婦におなり、お前さんのような人は怖くつて厭だよ、お願いだから離縁状を書いておくれ、連添みくだりしているのは厭でございませぬ、直ぐ三行半みくだりはんを書いておくんなさい、黙つていては分りま

せんよ、サ、早く書いておくんなさい」

と母子諸共まくし立て、言われ、流石さすがに柔和の多助も余りの事

ゆえ顔色を変え、居丈高になり、声荒あららげ、

多「黙れおえい、お母つかさんは何を言つても己おれ決して言葉返しをし

た事はないが、汝われまで同じ様に圓次を殺したの、お作と訳がある

のと覚えもねえ事を廉かどに取つて、離縁を取るべえとするか、お父とつ

さんの遺言を汝われ忘れたか、従弟同士で夫婦になれば家いえの治りもつ

くだから、苟かりそめに私わたくしの遺恨を挿さしはさ

あると、草葉の蔭から勘当するぞと言わしつたことを忘れて、己おれ

を突き出すべいとして、夫婦らしくもねえと言うのは、そりやア

己おらが方うでいう言葉だ、汝われの方で振付けて居るのじゃないか」

かめ「大層亭主振った利いた風な事を言うな、何の働はたらきが有つてそんな亭主振ったことをいう、本当に生意気だよ、高慢な事をいうな、親不孝め」

といいながら傍かたえに有つた粗朶そだを取上げ、ピシリと打たれるはずみに多助は「アツ」といいさま囲炉裏そぼの端そばへ倒れる処を、おかめは腕を延ばし、髻たぶさを取つて引ずり倒しながら、続け打ちようちやくに打擲うちを致している処へ、此の家の奉公人、忠義者の五八が見兼ねましたゆえ飛んで来て中へ割つて入り、

五「お内儀かみさん呆れたものだ、謂いわれもないに何なに仕やす」

かめ「多助の事というと出て来やがるよ、お前の知つた事じゃねえ、引込ひっこんでいな」

五「己^{おれ}今聞いて居れば何だといえ、多助さんが圓次を殺し、荷を取つて城下へ売ろうとしたといえ、多助さんは人を殺すような人か人でないか、あんたも大概^{ていげえ}分りそうなものだ、よしんば人を殺すような悪党でも、あんたのためには子じやアねえか、あんたの血筋の甥じやねえか、サそれをお前^{めえ}さまの口からいうてえ事はねえことだ、何処までも隠して陰^{かげ}になり陽^{ひなた}になりして異見をしねえければならねえ処を、親が先へ立つて殺したんべい〜というのが本当に呆れた、多助さん、あんたが出れば此の家^{うち}は潰れやすよ、私^{わし}附いて居りやすうちはどんな事が有つても出しやせん、出るとき、ませんよ、お内儀^{かみ}さん大^て概^{えげえ}にしなせえ」

かめ「多助の事と云うと目くじら立つて騒^{さわ}ぎやアがる、己^{おいら}の子を

己おいらが勘当するのは当然だ、手前てまえの世話にはならないぞ」

五「はい、私わし奉公人でがんです、多助さんは此家こゝな相続人だよ、お

前めえさま様より多助さんの方が先へ此家こゝへ貰われて来たは、十四年あ

との八月で、お前めえさまは其の年の九月に来て、其の翌よくとし年先せんの内

儀みさんが死んだから、お前めえさま様を後のち添ぞえにしべえと、分家の旦那様

と私わしが勧めたけれども、旦那様は堅かえから、余り歳あんまが違ちがうから村

の者へ外聞が悪いというのを、多助さんには叔母さんの事だから、

女房に持ったが宜かんべえと、其の縁えん合あいで此家こゝへお前めえさん様を入

れた時何と云わしつた、有難いこんだ、果報やけがすると云つた

じゃねえか」

かめ「何を云やアがる、手前てまえの厄介になるものか、利いた風なこ

とを云うな」

五「利いた風もないものだ」

と声高に言い罵るから多助が、

多「五八は酪よつぱら酏ちって居りやして、強情べえ申しやすが、皆みんなな私わしが悪いでがんすから、どうぞ堪忍しておくんない、五八マア此こ方つちへ出なよ」

五「どんな事が有ったつても多助さんは出されません」

かめ「手前てまえから先へ出て往ゆけ」

五「私わし奉公人に違ちがはないが、先せんの旦那様に抱かかえられたゞ、己おれ出だれば此この家うちは打ぶ潰つぶれるから出でません」

と言いい罵ののるを、多助は無理に五八を引出し、傍わきの座敷ざしきに連つれ来きた

り、

多「あんなに母様かゝさまに抗弁つつけえし言ことをしては宜くねえわな」

五「でも貴方あんたくやし口惜くつきくつてなりやせん、胸むねが一ぺえになりやすとい

う訳わけは、あんだの事を世間で泣き多助だすけくと云うから、どうい

事だと思つて人に様子を聞いて見れば、母様かゝさんが悪い顔べえしてい

て、堪こらえ兼あるから外へ出ては貴方あんだが泣きながら歩くという訳だ、

三百石の田地持の旦那様かゝさまが母様の機嫌かみさんが悪く家うちに居られないから、

馬を曳ひいて外へ出ると、あんだの内儀かみさんのおえいどんまでが一緒に

なつて貴方あんだを突出とつすべえとするは、情なさけねえこんだから、私わしい云うだ

けの事は云いやんす、貴方あんだが出れば原丹治親子ちげが乗込のりこむに違ちがえね

えが、屋敷者やしきものだから百姓業ひやくしやうごは出来やすめえ、そうすれば此の鹽原

の家は打潰れるに相違ねえから、多助さん辛かんべえが辛抱して此の家を出ては成りやせんよ、私も共に貴方と一緒になつて、どんな辛え事しても家のために働きやすから、我慢して居ておくんなさいよ、家大事でがんすよ」

多「あいよく、五八や宜く家の為を思つて心配してくれ、原丹治親子の事も知らない訳ではないが、言い立てをすれば血で血を洗うようなもの、世間へ対して家の恥になる事だから、今までは何にも言わず辛抱して堪えに堪えて居たけれども、実に辛くて堪え切れない事が度々あるよ、察して呉れや」

五「御尤もでがんすく、私も命がけで貴方と一緒に働きやすから、どうぞ詰らない心を出して下さんなよ」

と眞ほんとう実の心から五八が慰め居りますと、馬小屋で青という馬がヒン／＼と嘶ないて、バタ／＼と荒れる事一方ひとかたならぬ物音に、五八は慌て、駈出して往つて見るに、繋いである馬がバタ／＼騒いで居りますから、五八が馬の口を取り鎮めておる所へ這入つて来ましたは原丹治でございます。これは丹治が圓次を殺した時の顔を馬が見覚えて居たものと見え、怖がつてバタ／＼暴れたので、丹治も訝おかしく思いながら奥へ這入り、おかめと差向いで何か密々ひそ／＼ばなし話を致して居ります。多助は馬の驚いたのに心付き、ハ、ア先せん達だつて庚申塚で圓次を殺したのは、丹治が私わしと間違えたものに相違ない、これは此処うちの家にいる時は殺されるかも知れない、若もし命がなければ何どんなに思つても此の家うちの為になる事も出来ない、

八歳やっつの時から住み馴れた村方を立退たちくのは辛い事ではあるなれども、一先ひとまず此処を逃げ去つて、知らぬ江戸とやらへ参つて、どんな辛い奉公でもして金を貯めた上立帰り、一旦潰れたる鹽原いへの家を起さなければ養父角右衛門様に義理が立たん、余よそ所ながら五八や叔父太左衛門様へお暇乞いとまごをしよういとまごと覚悟を極きわめて、これから沼田の下新田を立たち出るといいうお話に相成ります。

八

追々お話が央なかばに相成りますから、これからが面白く成ります
が、兎角開けぬ其の昔のお物語は嘘うそのようなお話が多いといいうの

は、物^{もの}成^{なり}が極^{ごく}お安く、唯今では物価が高直^{たかね}で、昔のお値段の事を唯今申すと嘘らしいような事があります。近頃まで湯銭が八銅、髪結銭が廿八銅、寄席のお座料が四十八銅から五十銅でございましたが、当節では四銭と相成りましたから、お高いと心得て居りますと、中には又御贔屓のお方が仰しやいますに、圓朝や寄席の座料が如何にも安い、それでは国の恥になるから最う少し高くしたら宜かろう、西洋へでも参ると、丁度我国の大道講釈のようなもので座料の一円や二円は取るから、斯^こうやって楽屋の者が大勢出て、畳の敷いてある上へお客を坐らせて、僅か四銭ぐらいでは余り芸^{つたな}が拙いようだから、せめて一人^{ひとり}前^{りまえ}五^ご円宛^{ずつ}も取つたら宜かろうと仰しやいますが、それでは誰も寄席へお出^{いで}になる方がござ

いません、仕方がないから四銭という事に致して置きます。昔は蒲鉾かまぼこが一本四十文であつたと申します。お値段のお安い話ばかり致しますようでございますが、下駄の鼻緒なども昔は二足で三文でございました、それからこちらへ厄雑やくざのものを二足三文と申す事だそうです。馬も昔は南部の極長たけた所で五両ぐらいのもの、それが只今は馬流行うまばやりで、皆さんが乗ってお歩きになりますが、時々横つ倒しに乗っていらつしやるお方がありまして、危い事で、当今の馬は何れいずも二三百円も致しますから大きに模様が違つて居ります事でございます。鹽原多助の養父角右衛門の買いました馬は、南部の盛岡の市で五両五粒で買った良い馬いでございます。多助は日々その青という馬を引いて山坂を歩いて居りましたが、田

舎では月待つきまち日待ひまちという事がありました、十五夜廿三夜などには
 村の若い者が皆遊びます。多助も廿一歳の若者ですから、随分遊
 びたい盛りでございしますが、人の遊ぶ中を重い荷をつけて馬を引
 いて、かずさかとうげ数坂峠という山又山を歩いて居りますも、家うちに居れば
は、おや母親おかめに虐められました、実に生傷なまきずの絶える事がないく
 らいの訳ですから家うちにとては居りませんで、馬を引いて歩きなが
 らも種いろく々思おもいあ合あわして見たが、どうも此の家うちに長ながくいる訳には
 いかない。情なさけないかな母とおえいが馴合なつて、丹治父子を引入れ
 て逢引するとは、実に犬畜生同様の致いたしかた方かた、殊ことに私わしを附つけ狙ねらう
 から丹治父子が此の家うちへ出入ではいる中うちは迎むかへ居る訳にはいかない、命
 があれば死んだ養父に恩返しも出来るが、命がなくては恩返しも

出来ないから、江戸とやらいう所は、どういふ所か勝手は知らないが、一先^{ひとま}ず江戸へ出て辛い奉公なりとして、金を貯めた上で国に帰つて来て、若^もし家が潰^いれていたら立て直すより外に仕方がない、八歳^{やっつ}の時から居慣れた沼田新田の村の模様も、これが見納めになる事かと、心の中^{うち}で嘆きながら、豆を二俵^{ふたばら}付け、青を引いて分家の太左衛門の所へ余^{よそ}所ながら暇乞いに参りました。

多「もし、叔父さんく」

太「おう、多助か、何処^いえ往くんのだ」

多「はい、高^{たか}平^{ひら}まで豆を附^めけて参^まりやす」

太「お、高平へ往^いくか、久しく来^こねえから案じていたが、此^こ間^ま五八^{ごはち}が来^うて家^{うち}に間違^{まちが}えのあつた事も聞^きいていたが、汝^{われ}の母^{おふくろ}親^{おや}の

ような悪人はねえ、宜く勘弁して堪これえているなア」

多「はい、それもこれも死んだ父とつさま様に恩返おんげえしがしてえと思つ

て居るんで、父様のお位牌ていへ対し、鹽原の名前なめえを汚すめえと思つ

て居りやんす、八歳やっつの時から貰われて来て育てられた恩は一通り

でねえ、死んだ父様計りばかでねえ、叔父様も私わしが少ちいさい時から多助

々々と云つて可愛がつておくんなんした御恩は死んでも忘れやせ

んでハア」

太「べらぼうな、叔父甥と繋がる縁だ、世話アするのはあたりめえ当然然

だ、汝われは切るにも切れねえ血統ちすじだから、辛つれい事があつても辛抱し

て居てくんろよ、もしや若い者だから又狭い心を出して遠い所へ

でも失走うっばしつてしまやアしねえかと思つて、心配しんぺいでなんねえ、己おれ

も取る年なり、婆アさんも年を取っているし、子と云うものはお作べいで、あんな厄難やくざな者だから汝われを力に思つて居るんだから、汝われえ詰らねえ心を出してくれるなよ」

多「はいく、叔父さん人間は老ろう少しょう不定ふじょうということがあるか

ら、若い者でも先へ逝ゆかねえと堅い事も言われねえ、私わしが高平まで往ゆく途みちで、どんな事があつて、ひよつと帰けえらねえようになり、

これが叔父さんの顔の見納めになりはしめえかと思えば、一里でも二里でも踏み出すのは実に辛つれえ事ことでがんです」

太「馬鹿ア云うな、今日は月待だから、己おらが家うちへ泊とつて、高平へ往ゆくのは明日あすにしるよ」

多「又往ゆかねえと母おふくろ親おやに叱なられますから参めえりやすべえ、叔父さ

ん、これから段々寒くなりやすから、身体を大切にしておくんなしよ」

太「そんな事を言つちやア心細くなつて仕様がねえ、婆や、多助が高平まで往くつて寄つたから、此処え来うよ」

と言うに、婆アも出て参りまして、

婆「おゝ多助か、能く来たな、此の寒いのに往かねえでもいゝから泊つて往きなよ、此間はお作が悪戯アして気の毒な事をした、家なア阿魔を小言いつて打擲えたが、仕様のねえ奴で、堪忍してくんなよ」

多「はい、往きますべえ、叔父さん、叔父さん、左様だら」
太「それだら何うでも往くか」

多「はい」

と云いながら出ましたが、これが別れになる事かと悄悄しおく々として往ゆきます。叔父も多助の言う事が心に掛りますから戸口まで駆出して来まして、

太「多助々々早く往つてこうよ」

と云われて多助も泣きながら、

多「はい〜」

と言つて出掛けましたが、叔父の事も心にかゝりますから、心配しながら鎮守の森も、これが見納めか、清右衛門やどんの家の棟もこれが見納めになる事かと見返りながら、泣く〜馬を引いて高平までまいり、銭を二分と一貫受取り、沼田原まで来ると、此

の原中に物見の松という松の木があります、是は戦争いくさの時に物見
 をした松だと申す事でございます。やがて多助は其の松の根方へ
 馬を繋ぎ、かます吠を卸してまくさあて秣を宛がってどつさり喰わせ、虫の食わな
 いように糸経いとだてを懸けまして、二分と一貫の錢を持って居りますゆ
 え、大概のものなら駈落かけおちをするのだから路銀に持って行きます
 が、多助は正直者ゆえ其の錢を馬の荷鞍にくらへ結び付けまして、自分
 は懐にあるほまちの六百の錢を持って行きゆにかゝりましたが、日
 頃自分の引馴れている馬に名残なごりを惜みおし、馬の前面まえづらを二度ばかり
 撫でて、

多「これ青よ、汝われとは長い馴染なじみであつたなア、汝われは大原村の九兵
 衛どんが南部の盛岡の市から買って来たのを、己おらの父様とっさまに買わ

れて来たんで、其の時己も八歳であつたが、鹽原の家へ養子に来る所で、汝も己も一緒に来るんで、己は汝が背中へ乗つて此の沼田へ来て長い馴染、己が十二の時から引なれて、斯うやつて長い間一つ所に居れば畜生でも兄弟も同じ事、汝ア達者な馬で、今まで内爛一つ起して噓一つした事のねえ馬だ、それに十六貫目の四斗俵を二俵附けるなら当前だが、ハア三俵となると汝え疲れべいと思つて、山坂を越える時は己が一俵担いでやるようにするから、身体も今まで頑丈であつて、足い血溜り一つ出来た事はねえ、それに父様が丹誠して、年に三度ずつ金焼きに遣つて置いたから、足も丈夫だ、己が草を刈つて来て喰わせる時も毒な草が入つて居ちやアいけねえからと思つて、茅草ばかり拾つて喰わせるよう

にしたから、われ汝も大い坂を越るにもつれ艱え顔を一つした事はねえで、
うち家へ対して能く勤めたから、段々年を取るから樂をさせてやるべ
えと思つていたが、おら己アどうあつても彼のうち家には居られねえ、われ汝
知つてる通り家の母様とうち嘯アが了ちげ簡違えな奴で、おれ己を殺すべえと
するだ、われ汝え知つてべえ、此間こねえだも庚申塚でおれ己を殺すべえと思つ
て、まちげ間違えて圓次郎を殺した時は、われ汝も驅出したくらいだから、
おれ己が居べえと思つても殺されるから何うも居られねえわい、おれ己は
これから江戸へ往つて、奉公をして金を貯めてけえ帰つて来るから、
われ汝えそれまで達者で居てくんろよ、ヤア、おれ己が出れば定めて五八
も追ん出されべえが、五八が出れば誰もわれ汝に構う者がねえから、
われ汝にろくな食い物もあてがうめえ、われ汝え可哀そうでなんねえから

己おれも出めいと思うが、己おれが家うちに居れば殺されてしまうによつて出て往ゆくんだから、何卒どうぞ汝われは辛つれえ所も辛抱して居て、己おれが江戸で金を貯めて歸けえつて来るまで丈夫でいてくんろよ、ヤア、ヤア、青、青」

と誠に我が兄弟か奉公人に物をいう如くに言い聞かせながら、馬の前まえづら一面を撫さすで摩りまして、多助は堪り兼て袖を絞つて、おい／＼泣きますと、多助の実意が馬に感じましたか、馬も名残を惜む様子で、首を垂れてさも悲しげに泣出しまして、其なみだの涕が雨の如くはら／＼／＼と砂原へ落ちまするのを見て、多助は尚更悲しく、

多「おゝ青、汝われ泣いて呉れるか、有がてえ、畜生でさえも恩誼おんぎを

知り名残を惜むで泣いてくれるに、それに引換え女房おえいは禽とりりけもの

獸にも劣つた奴、現在亭主の己おれを殺すべえとする人非人め、

これ青、己おれが出れば原の父子おやこが家へ乗込むで来るに違えねえ、そうすれば鹽原の家は潰れるに違えねえから、汝われ辛かんべえが何卒どうぞおれけえ己の帰るまで家うちに辛抱して居て呉んろよ、よう、よう

といいながら行きゆにかゝりますと、馬が多助の穿はいている草鞋の切れ目を踏ふみ、多助の袖を嚙くわえて遣るまいとするから、

多「あアまだ留めるか、己おれも別れたくはねえが、居たくつても居られねえから其処はなを離して呉んろよ、よう、よう」

と惜しき別れを無理に振切つて別れまして、多助は泣きながらトツくと御城下まで一目散に三里ばかり駈けて参りまして、こ

れからは山越しをするのですが、何を云うにも路用は僅た六百文、
 此処らは只今のようしらいはっさきに開けませんで、白井八崎の難所を越え、漸
 くのことで岩上いわがみという処へかゝりますと、白りつしらと夜が明けて
 来ました。此処には利根川の支流えだがわがあり、其の河辺かわべりに松の木
 が五六本生えて居りまして、用水が流れて居り。只今では掛茶屋
 が出来て、此の用水が県庁の御用水に成つて居りますが、其の頃
 は極淋ごくしく、水は岩間に当つてドウドツと流れます。松の木の
 側に青面金剛せいめんこんごうという石が建つて居ります所に、兩人連れの者
 がし合羽を着て、脚半草鞋に旅荷を側へ置いて摺火すりびで頻りに
 煙草を喫のんで居りますのを、多助が見掛けまして、
 多「少々物が承りとうございやす」

男「何だく」

多「え、前橋めえばしという所へはどう出たら宜うがंस、前橋めえばしへ

参まいりますには何う参めえつて宜しゆうございやしよう」

男「前橋めえばしへ往ゆくなア此処を構わずうツと真直まっすぐ往つて、突つきあ

当たつて左へ曲つて又突当ると、向うに橋が見える、それを渡れ

ば直じきだ」

多「はい、有難うござえます、お先へ参めえりやす」

と礼を云つて往ゆきにかゝりますと、

男「これく待てて、手前てめえは沼田の下新田の多助だなア」

多「ハア何方どなたでがंसか」

と云いますと彼かの男は、

男「多助久し振りで逢つたなア」

と云いながら被つて居た笠を取つたが、多助は心付かず、只見
ますと昨年鹽原の家へ強談いえ ゆすりに來た道連の小平に、今一人は繼立の
仁助という旅稼ぎの悪者二人ですから、多助は恟びつくりしますと、

小「好いい所で逢つた」

多「御免なすつて下せい」

小「去年手前てめえの所へごたつきに往つて失錯しくじつたので、お母も口惜ふくろ
しがつて居るから、手前てめえがおえいと墓参はかめえりに往つた歸り道でおえ
いを攫さらおうと思つたら、侍が邪魔に入へつて到頭それも遣り損そこなつて
口惜しくつて堪らねえ、さア手前てめえは前橋めえばしへ買物に往いくのなら、
三百石の田地持の大尽だから些ちつたア金も持つてるだろう、身ぐる

み脱いで置いて往け」

多「はい、買物に往くんじやがんしねえ、おえいも心得違えをしやんして、私も家に居られねえで、母親に追出され、六百の錢を路銀にして江戸へ往つて奉公する身の上でがんすから、衣物も一枚でも取られちやア困りやすから、御勘弁なすつて下せえまし」

小「嘘をつけえ、三百石の田地持が六百ばかりの端錢で江戸へ行こう筈はねえ、さアぐずくすると打ツ斬るぞ、仁助縛つちまえ」

仁「兄いがあゝ言い出しちやア肯かねえから、早く裸体になつて置いて行きな、出さねえでじたばたすると殺してしまふぞ、泣

顔つらするねえ」

と云いながら閃きらりツと長いのを引ひこ抜いて、ずぶりツと草原へ突立つきたてますと、

多「どうかお願ねげえでがんすから命だけは助けて下さい、殺されてしまつちやア私わしい義理ある家へ恩返しをする事が出来やせん、私わしはこれから江戸へ出て辛抱して、国へ帰けえつて鹽原の家へ恩返しをしなければ死んだ父とつさま様に対して済みましねえから御勘弁なすつて下せえまし」

と泣きながら掌てを合せて拝みますと、

小「やい縁起わりが悪いや、神か仏じゃアあるめえし拝みやがんな」

と云いながら草鞋穿の足を挙げて、多助が両掌りょうてを合せて拝ん

でいる手と胸の間へ足を入れて、ドウンと蹴倒しまして、
ひっくり顛かえ覆る所を土足で踏ふみかけ、一方の手に拔ぬき刀を持って、

小「出さなければ殺すぞ」

と云うので、多助は実に危あやうい場合に相成りましたが、何と斯かる善人うちが家では母親はやおやや女房に附け狙われますのを、漸く遁のがれてまいる道で、又悪者のために捕つかまって斯かる危あやうい目に逢いまするのは、神も仏もないものか、実に不憫至極な訳でございます。これより多助の身の上如何いか相成りますか、次回までお預あずりに致しましょう。

九

引続きまする人情晰しは兎角お退屈勝ちの事でございまして、草双紙でも芝居でも善人あり悪人あり、善人が悪人のために困苦をいたし、後に善人栄えて悪人亡び、失いましたたから宝が出て可愛い同志が夫婦に成るといふ是れがどの跋ぼつでも同じようでございます。善悪二つあるかと云うと一つだと仰しやいます方がありますが、其の一つは何だと云うと無形のもので、とんと形がない、善の魂が悪くなるのは何ういふ訳だと伺つて見ますと、或るお物もの識しりのお講釈に、先ず早く云えば月に雲の掛るようなもので、これなどは圓朝にも解りますから、成程と云うて感じまして聞きました、唯人たゞが何も思わずに居ります時の心は冴えたる月のようなもので、誠に清らかで晴せい々くとしている所、煩惱の雲が掛り、心の月を曇

らせますと申すは、向うでヒラ／＼と青い札さつを勘定して居ると、あゝ大層札を持って居るなと思えば、慾張つた雲が出て来て、心の月にかゝりますと暗くなります、アゝ欲ほしいものだと思つばかりならいゝが、何うかして彼奴あいつを殺して奪とりたいと思えばボツリ／＼と雨が降つて来て真闇まつくらになり、又氣が附いてあゝ悪い事をした、斯こん様な事はふツつりと思ふまいと思えば煩惱の雲がすうツと切れますると、光こうく々とした月になります。又向うに駒下駄の音がして赤縮緬あかちりめんの禪ぜんが見えると、助平の雲が出て来る、彼あれは何者だろう、お嬢様か娘か、彼あれを口説いて見ようか、口説いても肯きかないといけないから、何処か淋しい所で押顛おっころがしてやろうかと思えば夕立ちで、ガラ／＼／＼と雷になる。あゝ悪い事をし

た、止ましようかと気が付けば元のような良い月夜になる、又向
 の鰻屋でバタ／＼と鰻を焼く音がすると、あゝ彼れあを食いたいの
 のだと思うと、意地の穢きたない雲が出て来る、それを気が付けば元の
 ようになるが、其の雲の掛らんようにするには智慧という風でな
 ければなりません、雲がかゝつて来た時、ドツコイと智慧という
 風で吹散らしてしまうようにしなければいけません「浮雲を払い
 出でたる秋風を松に残して月を見るかな」という歌があります、
 これは左様なる事に詠んだ歌ではない、月の事に就いて詠みまし
 た歌でございませが、雲を風で吹払った跡は、松が枝えに渡る風の
 声のみで、光々こうくめい明々として月を見ている心になれば、年
 中間違いはなきものゆえ、悟れば善になり迷えば悪になるもので、

迷えば可愛い子を棄て、夫を棄てるように相成りますと申すは、
前ぜん申上げました通り、おかめの心得こころえちがい違ちがいというものは恋という煩惱
の雲がかゝり、心の闇に迷ひまして一通りの間違ひではない、原
丹治と密通をいたし、現在の娘を唆そゝかして己おのれの密夫みつぶの悴丹三郎と
密通させ、そのみならず孝子多助を殺そうとする罪は実に悪にくむ
べきものでござります。多助も家うちに居いれば命あぶなが危あぶい、命あぶながあれば
又鹽原の家いえを立て直す時もあるうと思ひ、住馴れた家いえを立出でま
した。家うちでは多助が翌日になつても歸つて来ないから、おかめの
了簡では、彼奴あいつは江戸へでも往つたか遠い所へでも往つたか、大
方家うちの辛い所を思つて、首くでも縊くつてしまつたのであらうと、多
助の死ぬのを待つて居りますと、奉公人の忠義な五八は多助が歸

つて来ませんから心配して捜して来ましたが居りません。すると沼田原の松の木に青という馬が繋いであると聞きましたから、五八は直すぐに行つて見ましたが、ハテ解らんと思ふのは、馬の荷鞍に二分と一貫の銭と馬通いの帳面があるから変に思い、多助が他国へでも行くゆならば此の銭を持つて行くゆ筈だが、これへ縛り付けて行くゆからは、身でも投げたか、但しは雑木山へでも入つて首でも縊くつて死んだかと思つて、山川を捜したが判りませんので、おかめは心の中で嬉しいが、外面うわべでは五八に言付けて、何処へ往つたか捜して御覽と案じる振で捜させても分りませんので、おかめも内々安心して居りました。すると九月三日に五八が他所よそから歸つて来まして台所の事をして居ると、

かめ「あの五八や、こゝへ来なよ」

五「お内儀かみさん、なんでがんす」

かめ「此処へ来な、アノ其処に膳があるから、それを拭いて置いてくんな、今日は家うちにお客があるから、そうして水を汲んだり何かしておくれ」

五「何処からお客が来やんすな」

かめ「何処からお客が来るって、お前の知つての通り多助は此の家やの主人だのに、家出をして行方も知れず、おえいと兩人ふたりで此の身代を持って居いられないから、どんな者でもお媚を貰おうと思つて居ると、お前の知つている御城内の原さんの御子息丹三郎さんは病身でお屋敷の御奉公は出来ないから、百姓か町人いえの家へ養子

に遣りたいと云うので、名主からの口入れで相談も整い、今日は婚礼をするので、原さんと名主幸左衛門さんとが来るんだよ、お侍様が百姓の家へ養子うちに来るのだから勝手が知れめえから、お前も気を付けて上げな、あの方が此の家へおいでになるとお前も仕しあわせ
合だよ」

五「へい何ですか、おえいさんの処え婿が来やすか、こりやア変だなア、おえいさんには多助さんと云う亭主のある身で、又亭主を貰うと云うか、そんなら女というものは亭主をふたり両人持つてもいゝかね」

かめ「何を云うのだ、多助の行方が知れぬから、おえいに婿を貰うんだよ」

五「多助さんの行方が知れねえと云うて、多助さんは先月出たべいで、死んだか生きて居るか分らねえのに、おえいさんに婿を取るとはあんま余り義理を知らねえじゃねいか、たとえ仮令人が婿を世話アしても、一周忌でも済んだら貰うべえと云つて断るのが本当だに、四十九日も経たねえのに家へうち婿を取るとはひでえじゃがんせんか、多助さんも此の家を出たくはねえが、い居られねえから出たんだから、又了簡を取直して帰つて来るかも知れねえのに、婿を取つて済みやすかえ」

かめ「彼あアいうことを云つてるよ、彼があれ帰つて来ても構わないよ、親を棄て、出るような奴だから最う構いません、私は娘に婿を取らして楽をしようという訳ではないが、多助が居なければ婿をも

らうのは当然だあたりまえだね」

五「駄目でがんす、婚礼はなりやしねえ、よく考えて見なせい」

かめ「お前が何も知っている訳はねえよ」

五「それでも多助さんが死んだか生きてるか知れねえのに、婿を取るというのは情ねえこんだ、これ、多助さんは三百石持の旦那様だのに、家うちにいれば小言べえ云われるので、外へ出て泣々歩くから村の者べえじやアねえ他村たむらの者にまで、泣き多助と名を附けられるのもお前めえさまが宜くねえからだ、多助さんは現在あなたあなたの甥じやアねえか、それをいびり出して婿を取るといふ法がありやすかえ、私わしい何うしても取らせねえ」

かめ「彼あアいう事を云やアがる、主人が勝手にするんだ、黙って

いろ、ぐずくいうなら出て往きな」

えい「奉公人の癖にお母さんに逆らうなら出て往きな」

五「出ねえや、出ませんよ、私先の旦那様に長く御奉公をして、

西も東も分らねえものが旦那様の丹誠で、今では馬通いもつけられるように成った恩があるから出られねえ、多助さんが居なければ

ば此の家は猶お危ねえよ、マア貴方考えて見なせえ、御城内の者

が百姓の家へ養子に来て、何月の幾日に何の種を蒔けば、何月

の幾日に芽をふくという事を知りアしねえ、其様な者を婿に取れ

ば此な家は潰れるから駄目だ」

かめ「主人の云うのだから出て往けつたら出て往け」

五「駄目だ、己れ往って相談して来る所がある」

といい捨て、分家の太左衛門の所へ往ゆきました。

五「旦那様内うちか」

太「おゝ五八か、此方こつちえ入へいれ」

五「旦那様は己おらア家うちの何なんに当あたるか」

太「馬鹿野郎め、何年奉公をしている、その位の事が知れねえといふ法があるものか、死んだ角右衛門殿の甥おれといえとば己おれ独ひとりしかねえ」

五「それじゃ己おらア家うちの分家だ」

太「そうよ」

五「其の分家が己おらア家うちへ婿むこの来るのを知んねえで居るかえ」

太「フウン、誰へ婿むこが来るのだ」

五「それだから駄目だ、多助さんが出たから宜い気になって、おえいさんに婿を取ると云うのだが、何と呆れ切つて物が云えねえ、彼の^あ仏のような多助さんを追出して、悪い^{わり}事をしていた丹三郎を婿にとると云うので、我^{わし}へ膳をふけというから、誰え来ると聞いたら婿が来ると言やアがるし、其の相手は城内の原丹治の悴が婿に来るといふ^{つわ}から、私^{わし}い魂消た、あんた蒲団の上^{つわ}にぶつ坐つてい

る時じゃアあんめえ、往つて掛合つておくんなせえ」
太「何とまア太い阿魔じゃアねいか、何時婿が来ると」

五「今夜来やんす」

太「掛合つてやるべえとも」

五「往つて下せえ、なんとマア名主が媒^{なこうど}人だつて、名主まで馴

合つていやアがるんだもの」

太「これ婆ア、脇差を出せ」

婆「よすが宜いよ、又五八がそんな事を言わなければ宜いのに、相手は侍で名主が媒なこうど人だというから、間違えが出来るといけねえから往いかねえが宜ようがんすよ」

太「黙っている、羽織を出せ」

というので、襟巾が三寸五分ある小紋の白しらばつくれたような羽織を着ましたが、前から見ると帯広裸体はだかで居るような姿なりをして、五八と一緒に憤おこり切つて出掛けて往ゆきます。此方こちらは今内祝言ないしゅうげんの盃を取ろうとする所へ太左衛門が物をも言わずに上つて来て、祝言の座敷へドツサリと坐つて、これから談判を致しますという

お話になります。鳥渡ちよつと一息つきまして。

鹽原多助は実に孝行でございませうが、人には幸不幸というものがあり、又始めの内に極結構ごくくな身の上で老年に至りて艱難するものもあり、始めに艱難辛苦をして後に安楽な身の上となるものがあります、是は仏説で言う因縁でございまして、こればかりは何ういう事か解りません、間が好いと好い事ばかりで、間が悪いと悪い事ばかりあるもので、運のいゝ方は顛こころんだかと思えば札さつを拾い、川へ落ちてガバくしてしていると金側きんがわ時計を拾うような事があり、又間が悪いと途中で手水ちようずが出たくなつて、あゝ何所どこかに手水場があれば好いと思つと、幸い三足立ちの雪隠せついんがあるから入ろうとすると、皆みんなな咳払いをして塞がって居たり、横浜へ往

くの汽車に乘ろうと思つて大急ぎで人力車で停車場へ駆付けると、汽車がパイと出て往つてしまつたり、天氣が好いと思つて合羽を脱いで外へ出れば雨が降つて来たり、芸者を買えばブツくと憤つてばかりいたり、総て十分にいかんものでございます。多助のような好い人は神も仏も附添つて居るかと思うと、前回に申上げたような難渋な目に遭い、自分が曳馴れた馬に別れを告げて漸く岩上村へ掛りますと、胡麻の灰道連の小平と仁助に会つて土足に掛けられ、抜刀ぬきみを突付けて、さア金を出さなければ殺すぞと云うので、多助は青くなり、掌てを合せ「何卒免どうぞゆるしておくんなさい、裸体はだかにでも何にでもなるから」と云うのを耳にもかけず、

小平「仁助、剥いでしまえ」

と云うので多助の着物を剥ぎますと、着て居るのはぼうた布子で、バツタリと落ちたのは六百文。

仁「兄いほんとに六百しかねえぜ」

小「てめえ手前ほんとに六百しかねえのか、縁起が悪いや、夜が明けてしまおきう、起ろく」

と云われ、多助は裸はだか体で小平を拝みますと、

小「縁起わるが悪い奴だ」

と云いながら、今多助が起き上ろうとする処を土足で胸を蹴けたから後うしろへ逆さま、利根の枝川の流れへドブウンと落ちまして、多

助は流ふたりされましたが、川が浅いから漸くの事で這上つて来ますと、
 両人の者は居りません。着物はなし六百文の銭は差さしが切れ、彼あちら処

此処へ散乱致して居りますのを拾い集めて漸く四百幾文、五百に
 足りない錢を、これでも命の綱と思ひ、ずぶ濡れになつて前橋の
 手前まで来ると、少し日があたつて来ました。朝日のさすのに裸
 体でも歩けないから、宿の取付しゆくとりつきに古着屋がありますから、百五
 十文出して襦袢を一枚買つて、帯がないから繩を締め、あまる錢
 で木錢宿へ泊り、四日路よつかじかゝつて漸く江戸表へ着きましたか、
 其の頃は只今と違つて路が難渋でございまして、殊に多助は江戸
 の勝手を知りません、何処と云つて頼る所がないが、江戸とい
 う所は桂庵けいあんと云うものがあつて、奉公人の世話をするそうだが、
 それには受人うけにんがなければいけまいと思ひ、ふと考え付いたのは、
 十四年前に別れた実父鹽原角右衛門様は、阿部伊豫守様の御家来

であつたのが、浪人して後戸田様の家来になつて居るとの事ゆえ、尋ねて往つて頼んだら、受人ぐらいにはなつて呉れるだろう、実のお母様かゝさまやお父様とつさまはお達者でお出でなさるか、下新田へ養子に往つてから便りもしないが、何うなすつたか逢いたい事と思つて、筋違橋すじかいばしの戸田様の前へ来て、通用門へ掛ればいゝに、知りませんから表門へかゝり、お役人の居る所へズタクなりの姿をしてまいりまして、

多「はい、御免なせえ」

役「何処へ参るめいのだ、物貰いなら彼方あちらへ行け彼方ゆへ行け」

多「はい、少々物が承わりとうございます」

役「物が聞きたければお辻へ往けゆ、何だ乞食なりみたような姿をして」

多「これから乞食になればなるんだが、未だ乞食にはなんねえ、アノ戸田様のお屋敷は此処でがんすかえ」

役「戸田様の屋敷は此方だ」こちうら

多「それでは十四年前ぜんに此方こちうらへ抱えかけられた、鹽原角右衛門という方がありやんすか」

役「なに鹽原、ハイ彼はあれ十三年前まえにお国詰まになつて此のお屋敷には居らん」

多「お国は野州の宇都宮でがんすか」

役「前ぜんは宇都宮であつたが、まつだいらとのものかみどの松平主殿頭殿とお国換えになつて、今では肥前の島原だ」

多「へえ、肥前の島原という所は遠うがんすか」

役「そうサ、島原までは三百一里半あるな」

と云われて多助は恟びつくり致し、ハアと云いながら思わず知らず此そ處こへ泣き倒れました。

役「これく彼方あちらへ参れ、彼方あちらへ参れ」

多「はいく、腹ア減らして遣い残しが二十八文、宇都宮なら食わずにでも往いくが、三百里あつちやア仕様がねえ」

役「ぐずく云うな、彼方あちらへ行け」

多「はい、参りめえやす」

と言いながら出掛けましたが、頼みの綱も切れ果て、これから先きは飢えて死ぬより外に仕様がなと覚悟きわを極め、何うか知れないように淵ふちかわ川へでも身を投げて死のうと思つて、日の暮れ

るまで彼方あつちこつち此方とうろく歩いて、駿河台の織田姫おだひめいなり稻荷の所へ参
 りますと、最う腹が減つて歩けません、其の内に雨がポツリく
 と降つてまいりますから、駿河台を下りて昌平橋しょうへいばしへ掛りまし
 た。此の昌平橋は只今は御成道おなりみちの通りに架かつて居りますが、其
 の頃は万世橋よろずよばしの西あに在りましたので、多助は山出しでございま
 すから、頓とんと勝手が知れません。
 多「死ぬべえが此の川は国の川と違つて底が見えねえから深ふけいと
 見える、此処から飛込むべえか、彼処あそこから飛込むべえか、何処か
 ら飛込んだらつん流されべえ、死ぬには入らねえ廿八文、此処こけえ
 上のせて置けば乞食か何か拾つて往いくべえから、此処こけへ上のせて置
 べえ」

と正直に橋の欄干え遣い残しの錢を載せて、

多「あゝ、国で信心していた榛名様や鎮守様八幡様もお情ねえ、私が死ぬと国の養い親の家が潰れやす、仮令家が潰れても私が生きて居れば立て直すことが出来るが、江戸で奉公するには肝心な受人になる人が三百里先へ往つてしまい、受人がなければ奉公は出来ず、と云つて国へ帰れば抜刀で追掛けられて殺されてしまいやすから、抛なく此処から飛込んで死にやすが、何卒私が亡え後は国の家が立ちますようお守りなすつて下さいまし、南無阿彌陀仏くくく」

と掌を合せて、あわや身を躍らして飛込もうとする後から、「これ待ちなさい」と多助を抱留めました。此の者は善か悪か次

回到に申上げましょう。

十

お話替つて、鹽原の家では今おえいと丹三郎と婚礼の盃をしよ
うという処へ、分家の太左衛門が参りまして、

太「其の盃を少し待つて下せい」
と云われて、

かめ「どうしてお前さん来ました」
と大きに驚きました。

太「はい、驚いたかも知んねえが、私も驚いた、何ういう訳でお

えいが処とこへ婿が来るか、私も分家でいて其の訳を知らねえと云う事はねえから、何ういう訳で婿を取りやすか、それを承わりたえ、はい」

かめ「実はお知らせ申したいと思つて居りましたが、これが表向きの祝儀という訳ではなし、一旦極りを付けてから、お話をしようと思つて居りましたが、婿を取ると申す訳は、先月多助が出てから、女世帯ですから、どうか婿を取りたいと思つて居りますと、此処においででの丹三さんは御病身で、お屋敷奉公は出来ないという処とこから、お上かみへ願つてお聞き濟ずみになり、名主様のお口入れであります、年頃もよし、おえいは江戸表からの知ちかづ己ぎでもあり、丁度宜しいから、お武家様から百姓の家うちへ養子に来て下さるのは

有難い事で、誠に斯こ様な身んに取つて有難い事はありませんから、取極めました、実は貴方の所とこへお話がしたいと思つて居りましたが、誠に急な事になりました、ほんの内ない祝言しゅうげんをして、後あとで貴方の所ところへお話ししようと思つておりましたが、今丁度貴方がお出でなすつて下すつたから、何うかこれへお坐りなすつて下さい」

太「はい、そりやア承わりたいもんだ、おえいには多助という亭主があるのに、何ういう訳で婿を取りやすえ」

かめ「多助々と仰しやいますが、彼あれは親を捨て、家うちを出るような奴ですから、仮令たとえ帰つて来ても私の血統ちすじだけに世間様へ対して入れられませんから、おえいに婿を取るあたりまえのは当然です」

太「こりやア承わりてえ、此の鹽原の家うちの相続人は多助と定まつ

て居やんすというのは、去年六月晦日みそかの晩に死んだ角右衛門殿の枕元あんたに、貴方も多助もおえいも五八も私わしもいたが、角右衛門殿が臨終いまわの際きわに何にもいう事はねえが、己おら家の相續人うちは多助と定さだまつている、此度こんどは己おら死病と定つて居るから、一言いちごん云わねえければならねえと云うものは、多助にも嫁を取らなければならねい、就つちやアおえいは多助のためには従弟なり、おかめの為には多助は甥なりするから、おえいを多助の嫁にして此の家うちを相續させれば、此のくらい安心な事はねいが、多助は未だ年がいかねえによつて、太左衛門汝われえ此の家うちの後見に成つて、己おれが亡ねえ後のちを頼むと遺言をして、私わしが媒なこうど灼どになつて、病人の枕元で盃をしやんした、其の遺言にある通り、多助は一軒の主人だから、そりやア随分南

部の盛岡の方に馬のいゝのが出たとか、又山の売物に安いのもあれば買いに往ゆきてえが、急ぐんで家うちへ知らせる間もなく直ぐに往つて来たとか云つて、明日あすが日帰つて来るかも知んねえから、若もしも多助が帰つて来て、私わしい無沙汰むさたで何でおえいに婿を貰わせやんしたと己おれに云われた時は、己おらは一言半句でも申訳がねえ、それだから私わしの眼の黒いうちは何うしても此の祝言をさせる事は出来ねえ」

かめ「お前さんは何ぞという和多助々と仰しやるが、何故なぜそんなら一軒の主人が親や女房を捨て、出て往つてしまいました、さアお前さんは多助を鼻屑にするから、若もし帰つて来たならば、お作さんの婿にでも何にでもおしなさい、私は何うしても彼あ様な者は

家へ入れません」

太「其の事柄が極つた上で婿を取るなら取るもいゝが、極らねえ
うちは取らせねえ、己おらア分家だに、はい」

かめ「祝言と云つても内うち々だけの婚礼で、村へ知らした訳でも
何でもありませんわな」

太「假令内祝言でも己おらア分家だから内輪だが、内輪の己おれに知らせ
ねえという法はあんめえ」

と頻りに争つて居りますと、土間の方から五八が、

五「旦那様確しつかり遣つておくんなせえ、村むらじゆう中が付いて居りや
すから確かりやつてお呉んなせえ」

と呶鳴りますし、太左衛門の申すのは実に理の当然ゆえ、おか

めも困つて居りますと、其の頃は名主という威張つたもので、幸左衛門という名主様が、

幸「太左衛門くく」

太「こりやア飛んだ迷惑な所へお出でなすつて、さぞ嘸お困りでがんしようが、今申した通りの訳だから、何うか此の度たびの処は原さんの処は引取つておくんなせえやし」

幸「これ、今聞いていれば、われ汝え分家だと言つて此の婚礼を拒む訳はあんめえという訳は、此の村方は誰の支配を受ける、土岐様の御支配で其の御家来の息子さんが此の家うちの智ちに成つてくれるだから此の上もねえ仕合せ、殊ほかに外もんの者なこうどが媒なこうど灼どをするのと違つて、此の名主が媒灼ひとことをするのだから、礼の一言ひとことも言わしなければなら

ねえのに、何ういう訳で汝ア拒むな」

太「はい、拒みやすな、あんた名主様なら何故私が処へ話をしや

んせん、此の家には私より外に親類はありやしねえ、小前の者

が違つたことをすれば論してやるのが名主様の役だのに、其の名

主様ともあるものが、親類へ話をしねえで済みやすかえ、はい」

幸「それはどうもハア至極尤もな様で、成程どうも尤もだが、只

今もいう通り、これが表向の祝言でねえから知らせねえので表向

の祝言ならば親類や何かへも知らせ、檀那寺まで届けるんだが、

表向でねえから知らせねいので、はい」

太「それじゃア私は内輪の者じゃねえかえ、はい」

幸「内輪の者には違えねいが、どうも只今も申す通り、どうも其

の御領主様の、どうもその」

と名主も辞ことばに支つかえて仕様がありません。何と云つても理の当然ですから名主も返す辞がなく困っていると原丹治が見かねましたから、それへ出て、太左衛門より少し座を下さがつて坐りまして、丹「太左衛門殿私わしもとんと心附かなかつた、お前の方にはお話があつた事と心得、名主様も御繁多でもあり、殊に小前といえば子のように思つて居る所から、お前の方へは後あとで話をする積りであつたかも知れん、お龜がお話をせんと言うのは重々悪いが、彼あれは女の事で其の辺に心附かず、実に申訳がない、お前の言うのは理の当然だが、此の婚礼が破談に成つては何なんも知らないおえいや丹三郎が可哀そうだ、お前が承知さえしてくれ、ば実に此の上もな

い目出たい事だから、どうか勘弁してやってくれ、此の通り丹治が首こうべを下げてお詫を致す」

太「これは恐入りやす、マア頭をお上げなさい、至極御尤もな訳でがんですが、又御城中のお侍が百姓に手をついてお詫をする訳はねえが、道そむに背くからお詫言をなさるんで、道に背いた事はどうしても通せねえ、貴方あんたが何と言つても亡つた角右衛門の前へ対して、此の婚礼は出来ねえ、又何なんにも知らねえおえいや丹三郎が不憫だと仰しやれば些ちと申したい事がある、おえいや丹三郎さんが何なんにも知らねえという訳はがんしねえ、と言うものは、先達せんだつて店たなで拾ふみった文がありやす、私わしも焼いてしまふべえと思つたが取つてありやすから、これを表向にすれば貴方あんたのお役かにも拘かわるから、何

にも云わずに歸つて下せえ」

と云われた時は原父子は恟りして、それでは先達の艶書を太左

衛門が疾に焼捨てた事と心得ていたが、取つてあつたか、あゝ困

つたものだと思つていと、丹三郎は血氣の壯者ですから心が

逸つて、此奴が居るから可愛いおえいと夫婦になれないと思つて、

側にあつた一刀をズツと抜いて、突然太左衛門に斬付けますと、

其の頃は人切り包丁に驚いたもので、太左衛門はこれを見ると驚

き、外へ逃げ出そうとして縁側から転がり落ちて、慌て、厩の方

へ逃げると、五八は鋤を提げて、

五「さア旦那様を殺せば汝を殺すぞ、多助さんの代りに己が汝を

打ち殺すだ」

と勢い烈しく抗むかいましたから、丹三たんぎはこれに憶おくして後あとへ後しきると、おえいは嫁入姿の儘で駆出し、可愛い丹三さんに怪我をさせてはならないと思ひ、突いきなり然にに五八の頭髪たぶさを取うしろつて後へ引き倒そうとする所を、前から丹三郎が五八の面部へ切付けましたから、五「あゝ己を切りやアがったな」

と云う、丹三郎が尚お切ろうとすると、太左衛門は厩うまの方へ逃げて来ましたが、向うは厩、西の方は灰小屋、此方こちらは生垣で路みちがありませんから、慌てゝ前の方の大豆や小豆などが干してある所へ来て、莛むしろつますに躓つまずいて倒れる所を、丹三郎が長ながもの刀ふりあを揮ふる上げ、一刀に太左衛門を切ろうとする、太左衛門はどうしても遁のがれる道はありませんが、妙なもので、厩うまに繋いである青という馬は、多助が

家うちを出る時沼田原の松の木へ繋いで因果を含めた処、多助の云う
 ことに感じて泣いたと云うくらいの名馬でありますから、今太左
 衛門が丹三郎の一刀もとの下に殺されようとする有様を見ると、ボー
 ンと厩とびだから躍出しました。田舎では厩の前はにませと云う丸太があ
 ります。其のませを馬が鼻はなづら先はで反はね除のけて外へ躍出いきなして、突
 然りあとあし後け足を揚げて丹三郎を蹴けましたから、丹三郎は其そこ処へ倒れ
 ますと、馬が丹三郎の肩へ噛付きましたから、丹三郎はさも苦し
 げにヒイと泣声をあげ、七顛八倒の苦しみを致します。これを見
 ていたおえいは驚いて、アレーと云いながら逃出しますと、馬は
 尚更暴れておえいを追掛けて、背後うしろからおえいの鬚くわを嚙うしろえて後へ
 引倒して、花嫁の美しくしゅう濃こつてりとお粉粧しまいをした顔を馬がモリ

くツと嘯みましたから、これは全く馬が多助の讎あだを討つたよう
なものでございます。此まの間に太左衛門と五八は表たなの店へ往つて、
来合せていた若わかいしゆ衆しゆにこれくの訳だと話をする、平常ふだんにく悪ま
れている名主だから、名主も原も打うち殺してしまえと云うので、
是から百姓五六十人が得物々々を持つて、鹽原の家を取うち囲むとい
うお話に相成ります。扱さてまた鹽原多助は進退きわこゝに谷まり、已む
ことを得ず今や昌平橋から身を投げようとする所を後うしろから抱き留
められ、

多どなた「何方どなたさまかは知りませんが、何卒どうぞ放しておくんなせえ、生き
て居られねえ深い義理にからまる身の上、何卒死なして下せい」
△「コレサ、それだがの、今聞いて居れば、遠い国から出て来て

奉公をするのに、うけにん受人がねえから死んでしまふと云うのだろう、死ねば義理ある家が立てられねえとか云ったな」

多「はい、そうでがんです」

男「死んで家が立てられなければ死ぬにやア及ばねえじやアないか」

多「それでも斯こうやって居れば腹が減つて死んでしまひやすから、どうか放して死なして下せえ」

男「だがサア、其の受人がなくなつて奉公に置いてくれる人が出来れば宜いいのだろう」

多「はい、こんな乞食のような者を奉公に置いてくれてはが
んせん」

男「己おれの家で奉公に置いてやろうが、斯こん様な断末場に成ると死ぬ気にもなるもんだが、人間と云うものは少しほとぼりが脱ぬると、苦しい事を忘れてしまうものだから、お前が死んだ積りになつて働けば置いてやろうよ」

多「はい、お前さん何処から出た、私わしア死ぬくる苦みをして働く事は何とも思いやせん、有難うがんす、どうか置いておくんなせえよ」

男「だがノウ此の心を忘れてはいけないよ、死ぬ時は了簡めえの出るものだが、少し過ぎれば忘れるものだから、お前めえが死ぬ気になつて辛抱さえすれば、国へ帰る時は小遣ぐらいは持たしてやるから、私と一緒に来なさい」

と連立つて参ります。此の人は神田佐久間町河岸にいる山口善やまぐち

右衛門ぜんえもんという炭問屋すみどんやで、家は八間間口うちで、土蔵も幾箇いくらもあり、奉公人も多く使つて居ります。

善「今帰つたよ」

という奉公人みんが皆な出てまいつて、「へいお帰り遊ばせ〜
〜」

奉「大層お帰りがお遅いからお迎いにしようと思つていました：
これ〜夜まで乞食が這入つて来て困るな」

善「乞食じゃない、それは私が連れて来た人だ、まア此方こちらへお這入り」

多「へい御免なせい」

善「これ〜お前其の縄の帯だけ取りなさい、其処そこの番手桶に水

が汲んであるから足を洗つて、雑巾は手桶に掛つて居るから、ナ
ニ湯布ゆまきがない、サア出てもいゝや、なに湯布も売つてしまった、
此方こつちへ上あがんな、どうか若衆わかいしゆ、此の人を家うちの奉公人にする積り
だから世話アしてやつてくんな、国から出て来て頼る所がないと
云つて、今昌平橋から身を投げようとする所を助けて来たのだ」
奉「へい、それは御奇特ごきとくの事でございます」
多「皆みんなな此処にいるのは番頭さんでがんすか、私わしア遠い山国から
出て来て、頼る所もねえから、今身を投げべえと思つた所を、此
方ちうの旦那様に助けられましたものでがんす、どうか目を掛けて下
せい、又貴方あんたは番頭さんだから、斯こ様な者を置いちや為にならね
えから追出してしまった方がいゝなんて、旦那に意地を付けねえ

で下せいよ」

善「そんな事を云わないでも宜しい、質朴で宜しいなア、どうだ腹が減へつたろう、なに昨日から食わない、これ小僧台所へ連れて往つてお飯まんまを食わしてやれ、きよとくしてはいけないよ、今日は御先代の日なり、誠まことに好いい事をした」

番「誠まことによい御奇特ごきどくをなさいました」

善「今の男はどうか辛抱をして、義理ある家を立てたいという誠まことに好いい心掛の奴だから、何なんうか皆みんなが目を掛けてやってくれ、物になりそうだ、これまんま飯たを喫たべて来たか」

多「食い過ぎて坐れねえ、ひよつと追出された時、三百里往いけねえと困るから」

善「何か食べたか」

小「何も食べません、何をやっても勿体ない〜と云つて何も食べません塩物をやったがそれも食べません、お香物を甜こうくつて御膳ぜんを食くべて、一番終しまいに香物をガリ〜と食べました」

善「そうか、妙な男だなア、おい〜善太郎此処へ来な、これは今私わしが助けて来た人だ、何と云つたつくなア、助けて来たから多助か、多助や、これは家の悴うちせがれだから又いろ〜用を言付けるから多「へえ、若旦那様でがんすか、ハア今夜は貴方あんたの父様とっさまに助けられやした、どうかお目をかけておくんなしよ、あんたの着て居るのは和やわらけえ着物でがんす」

善「家の悴うちは和やわらけえ着物でなければ着ないのさ、なアにこれは平ふ

常着で、結城紬だ」

多「へい、これが結城紬でがんすか、結城紬というものは糸を一々手でよつて、それを高機たかはたで軽く打付けかろぶつて置くのではねえ、女どもが力にまかせにキイツと締めて織るんだから、容易に出来るもんじゃアねえ、それよを不斷に着るのはもつていねえじゃがんせんか、これから貴方あんたと兩人ふたりで一生懸命になつて稼いで、此の家うちを大くでかしねえばならねえ、貴方あんたも親孝行をして此の家いえを大切に思うだら、不斷は木綿を着るが宜ようがんすよ、そうして旦那さん、あれじゃア奉公人のお菜かずが多うがんすよ、何でも奉公人のお菜は二度はいらねいから一度になせいまし」

などと一々主人の前で申しますから、主人は妙なことをいう奴

だと思つて居ります。多助は善右衛門を命の親と心得、有り難く
思い、寝ても寤さめても恩義の程を忘れず、万事に氣を利かして、
骨身を惜まず一生懸命にくれくんと働き、子ねに臥ふし寅に起るの誠
めの通り、子と云えば前の九ツで、寅は七ツ時でございますから
寝る間も何も有りはしません。朝は暗いうちから起きて先ず店の
前を竹箒で掃き、犬の糞ふんなどがあつても穢きたないとも思わず取除とりのけて
川へ投げ捨て、掃除をしてしまふと台所のおさんどんが起きて釜
の下を焚附けると、多助は水瓶へ水を汲み込んで遣り、其のうち
店の者が漸く起きて台所へ顔を洗いに來ると一々手ちようずだら水盥らいへ水
を汲んで遣り、店の土間を掃いて居る中うちに店の者がお飯まんまを喰たべて
しまふから、自分が食事を致し、それから直ぐ納屋へ往つて炭を

担いで、奥蔵の脇の納屋に積み込む、何や彼や少しの隙もなく働きますゆえ、主人は素より店の者まで皆な感心致して居ります。

多助は余程奇体な着物を着て働いて居りますゆえ、善右衛門が善「多助やく〜」

多「はい〜」

善「お前はそんな襤褸の下つた物を着て居てはいかないよ、勇次郎の着物の古いのを遣つてあるのに何故着ないのう」

多「はい、有難うがんすけれども、とうに着ればハア破れやんすから、矢張り此の古襦袢の方が惜気がなくつて却つて働きようが
んす」

善「働き宜いっただつても余り見ともない、それに跣足で歩くのは

止せよ、草履を穿きな、若し踏抜きでもして三日も四日も休むよ
うではいかんよ」

多「踏抜きはしやせん、踏抜きをしねえように朝暗えうちに貝殻
や小さい砂利だの瀬戸物の碎片があると、掘くつて置き、清潔に
掃きやんすから平坦になつて居りやす」

善「それでも余り見つともない、跣足で納屋から往つたり来たり
するから、人様が見て、山口屋の奉公人は何だ、あんな形をさせ
て置く、乞食を見たような形だと云われて外聞が悪いわな」

多「旦那様、そんなア人が聞いたら、あれは奉公人じゃない、
乞食がお百度を踏んでいるのだと云いなせえ」

善「そんなことが云えるものか、何か着物はないかえ」

多「旦那様、此間柳原を通ると大え古着屋の家に一枚買いてえと思つた着物が有りやしたから、価聞いたら六百だと云いやんしたが五百五十文ぐれえには負けべえと思いやすがねえ、買つてもようがんすかね」

善「田舎者だと思つて馬鹿にして、賈物でも売られてはいかないぜ」

多「なに、私わしいすつ悉か皆あ検らめたやんした、事に依つたら縫目を解いて裏返して見べえか」

善「それが氣に入つて着られるなら買つて来るが宜い」

と錢を持たして遣りますと、多助は急いで柳原へまいり、彼かの古着を買取つて直すにぐ着て帰つて参りましたを善右衛門が見て、

善「フ、妙な塩梅あんばいだのう、和平どん見なさい、紋付の筒袖は始めてだのう、妙なものだなア」

和「へえー、異かわりものですな、アハ、ハ、ア、私わたくしも紋付の筒袖は

始めて見ました」

善「選えりに選えつて轡くつわの紋付を買つて来たのは何ういう訳だ、薩摩様の御紋所ごもんじょのようだなア、多助、何かそれがお前うちの家の定紋か」

多「そうじやア有りやせん、旦那様聞いておくんなせい、国を出る時に沼田の原中の一本松へ、長い間引慣れた青という馬を繫いで、名残いとまごいが惜しいから暇乞いとまごいをしながら馬まの前まえ面づらを撫なでて、己おれえ江戸へ行き、奉公して帰けえつて来るまで、達者で居て呉わしんと私わし泣なきやんして、其の馬を撫なでたり摩さすつたりしやすと、馬も別れを惜

んで泣きやんした、私も馬の泣いたのを初めて見やんしたが、大でい眼から涙を砂原にパラ／＼と落しやんした時には、私わしい人に別れるより辛くつて、畜生でさえに斯うやつて名残を惜んで泣くかと思いやんした時には、実に辛くつて私わしい袖びつしよりにしやんしたが、それから江戸へ出ても尋ねる人には逢えず、外ほかに知音も無くつて請人うけにんになりてもないから、奉公する事も出来ねえで、寧いっそ身い投げべえとする所を旦那様に助けられ、今では雨にも風にも当らねえで、暖あたけえお飯まんまを喰べちや斯うやつて何不足なく居りやんすが、人は楽になると直じきに難儀した事を忘れるもんですから、私わしい其の難儀を忘れねえ為に、見み当あたつた此この轡くつわの紋で、少し我儘な根性が起つた時には此の紋を見て、馬に別れた時の辛い事

を思い出して、それを思えば何でもねえとお手本になりやんすから買つて来やした」

善「はいく成程々々、感心どうも感心、和平どん特別だのう」
和「誠に感心な事ですなア、妙に異かわつて居りますよ」

善「まあく精出して働け」

多「へいく有難うがんす」

と隙間もなく身を粉こに砕き、忠義に働きますゆえ、出入りの者も自然多助を可愛がるものばかりでございます。斯かくて其の年も果て、翌年の丁度九月頃には多助も大きに用向きに慣れて参りましたゆえ、

善「多助やく」

多「はい」

善「お前のう未だ給金を極めなかったが、宜く働いて呉れるから給金を極めようのう」

多「はい、旦那様、私給金は戴きましねえ」

善「戴かんではいから、給金だけは極めて呉れなければ困るよ」

多「それだけは何うしてもいきましねえ」

善「極めた給金を蓄めて、国へ帰る時の資本にして、国の家を立てるのじゃアないかえ」

多「でも、命を助けてくれた旦那様のために働くのは当然だのに、お給金を戴いては済みましねえ」

善「それじゃ困るのう」

多「そんなら旦那様私わしい一つお願いが有りやすだ、其そこ処ところらに落ちてるすたりもの 廃物を拾い蓄めて、それを売り、二文でも三文でも旦那様へ預けるから、安い利で宜いいいが、私わしい国へ歸かえるまで預かつてお貰い申してえ」

善「拾い蓄めると云つて何を拾うのだ」

多「何なんてえ事なしに廃すたりになるものは、烟草たばこの粉こでも草履草鞋の要いらなくつて皆みんななが棄てるのは、繩なわ切きでも紙屑ツきれでも、何でも

ハア貯めて置いて売りやんす」

善「そんな物を買かい人てが有るか」

多「何でもハア廃すたりにはなんねえもので、釘かけでも拾いやんす、

それを売って金を蓄めやんす」

和「余り拾いたがつて、若し店へ来たお客が落した烟管や烟草入などを拾つてはいけねえぜ」

多「そんな事はしやしません、何でもハア人の要らなくなつて棄る物べえ拾うので、番頭さんはそんな根性が些とべえ有りやんすねえ、根性が無くちやそんな事は云わないもんだ、自分の心に有ると人もそうかと思うものだが、私のは皆が要らなくなつて川へ打投る物べえ拾い集めて蓄めるんでがんす」

善「何処へ蓄めて置くのだ」

多「裏の、屋根が破れて物がはいらずにあるから、板を載せて置きやしたが、裏の大きな納屋が明いて居りやんして、別に物を納

れないようだがんすが、旦那様彼^{あすこ}処を安い店^{たなちん}賃でお貸しなすつて下せいまし」

善「お前^{めえ}に貸すのに店賃も何もいらん」

多「そんなら屹度彼の納屋^あへ物を一杯^{ぺい}詰めても大丈夫でがんすか、其の代りお給金なしで働きやす」

善「感心な事だ、其の志が面白い、貸して遣りますが、些^{ちっ}と方^{ほう}々々^{／＼}のお得意やお屋敷を教えて置かなければいかんが、戸田様のお邸^{やしき}へ多助を遣ろうかのう番頭」

番「それが宜しゅうございます」

善「多助や」

多「へい」

善「其^{そこ}処に四俵 ^{おおだわら}大俵が有るだろう、それを向うの戸田能登守

様のお屋敷へ持つて往つて呉んな、御通用門から這入つて鎌田^{かまだい}

市^{ちさく}作様のお宅へ届けるのだ、知れなければ御門で聞きな」

と請取書^{うけとりしよ}を持たせて遣りました。多助は路^{みちくさ}草を喰わず、ギ

シく担いでまいり、戸田様の御門にかゝりまして、

多「ヒエ、御免なせい」

門番「何だく」

多「炭屋善右衛門の所から参^{めえ}りやしたが、此のお屋敷の御家来に

鎌^{さくじつ}の一昨日という人がありやすか」

門「なんだ、フ、フ、鎌田市^{いっさく}作様か」

多「そんだ、よく知つてる」

門「何だ、けしからん奴だ、それは御門を入つて板塀に附いて真ま直つすくに行くとお馬場の所に出るから、それへ附いて曲ると裏手に四軒お長家ながやがあるが、二軒目のお宅だ」

多「有難うがんす」

と又ギシ〜と担いで、教えられた通りまいりますと、鎌田市い作ちさくという標札がありましたゆえ、

多「御免なさい」

妻「なんなのう」

多「炭屋善右衛門から炭を持ってめえりやした」

侍「そうか、大きに御苦勞、幾俵持つて来たえ」

多「四俵持つてめえりやした」

侍「そんなら二俵は此処こゝに置いて、後あとの二俵は一軒隔おいてお隣おとのお宅うちまで持つて往いつてくんな、未だお荷物も片付くまいが、手前方から左様申したと二俵持つて往いつてくれ」

多「へい、一軒隔おいてお隣かね、ようがんすが、代を貰もらいていもんでがんす」

侍「後あとでやるよ」

多「でもマア斯あうやつて請取うけとりになつて居りやんすから、そんなら二俵丈だけ戴かいて置おきましよう」

侍「あとで一緒いっしょに遣おるよ」

多「それでも炭取すすつてしめえに代だいをよこさねえで、あとで炭取すすつた覚えはねえと云いわれても、私わしは田舎者いんげもので仕様しやうがねえ、主人しゅじんが大お

事だから代をよこさねいじやア困る、マアよこせ」

侍「よこせとは何だ、おかしな奴だ、そんなら持つて往け」

と代を投げ出すを多助は受取り、懐へ入れ、

多「そんなら此の二俵一軒隔いてお隣へ持つて往きますべい」

と其処へ担いでまいり、

多「御免なせい〜」

妻「どうれ、誰だ」

多「へい、私は炭屋の奉公人でがんですが、あの一軒隔いてお隣の

鎌田市作様の処から炭二俵持つて来やした」

妻「炭屋の男か、大きに御苦労だのう」

多「おら家の炭は宜い代物べい選んで安く売りやんすから、炭

を買うなら得だから、おらア方ほうでべいお買いなんしよ、他ほかで買つては駄目でがんすよ」

妻「あいよ、他では取らないよ、此処へ置いては邪魔になるから、開きが明いて居るから其処そこへ入れておくれ」

多「そんなら此の戸袋の下へ納いれて置きやす、犬が小便をかけると焚いて臭いから、戸を立掛けて置きやんす」

と云いながら、縁側の方を見ますと、旅荷物に縛り付けてございます荷札に、鹽原角右衛門と筆太に書いてありますゆえ、多助は気が注つきまして、思わずかくと縁側の方へまいりました。

多助は戸田様のお屋敷へ炭を持ってまいり、帰ろうとして不図目に付いた荷札に、実父の姓名があるに、思わず縁の方より駆かけよ
り、

多「今出たお内儀かみさん」

妻「可笑しい男だよ、お内儀さん」と云つて何だよ」

と云いながら庭口の縁側の障子を明けて出て来ましたのは、年頃四十五六の人物の宜いい御新造で、平常着ゆえふだんぎ紬つむぎぐらいではあります。お屋敷は堅いもので紋付を着て居ります。

妻「何か用があるのかえ」

多「此処に荷物が有りやんして、木札に鹽原角右衛門と書いてあ

るが、此のお方は肥前の島原へお国詰になつて往つたお方ではござりやせんか」

妻「よく知つて居るのう、当家が鹽原と云うよ」

多「それでは此処うちな家は、あの元もと阿部様の御家来であつたが、久しく浪人して上州小川村に居て、また此処うちなお屋敷の御家来になつた方で、あんたは鹽原角右衛門様の御内室おかみさんのおせいさんと云いやんすか」

妻「あい其の通りだが、どうして知つておいでだ」

と云われ多助は飛立つばかりに嬉しく思い、泣声を振り立て、多「お母かさま」

と云いながら我を忘れておせいの裾にピッタリと縫つて、

多「お懐かしゆうがんした、お母さま、八歳の時にお別れ申した
貴方の実の子の多助でがんですよ」

清「おやまア何うもまア思い掛けない、これ多助、見る影もない
そんな姿になつて」

と云いながら同じく泣出しました。

多「是には種々深い訳ががんで、どうかお父様やお
母様にお目にかゝりていと心掛けて居りやんして、信心をした
お蔭でマアお達者なお顔を見られやんした」

という声を聞き付け、奥より角右衛門が出てまいり、物をも云
わず御新造の手を取つて奥へ引入れ、縁側の隔の障子をパツタリ
と閉切つてしまいましたから、多助は呆然として、

多「お母様かゝさま、今此処へ出てお母さんかゝの手を持って引張り込ひっぱんだ人は誰だえ、お母様若もしやお父様とつさまではござりやせんかえ、お母様かゝ、お父様かえくゝ」
 角「黙かりれ、苟そめにも殿様のお側近く勤つとめをする鹽原角右衛門、炭屋の下男しもべに知己しるべは持たんわい、成程今を距さる事十五ヶ年以前、阿部家を出て上州東口の小川村に八ヶ年程浪人していた其の折、沼田の下新田に鹽原角右衛門と申する百姓が居り、私わしと同じ名前よしの好みを以て、乳のない所から悴せの多助を育て、くれろと頼まれたゆえ、余儀なく引受け、これなる清せいの乳を哺のまして八歳さいまでは養育したが、もう八歳にもなつたから返してくれろとの頼みに依り、早速親許へ引渡した時に、其の方の実父角右衛門より長らく悴せが御厄

介になり、礼の仕方がないからと云つて、聊かでは有るがと五十金を礼としてくれたればこそ、拙者は其の五十金を持つて身支度を整え、借財を払つて江戸表へ出てまいり、御当家へお抱えになり、只今ではお側近くを勤め三百石頂戴致して居るも、沼田下新田の角右衛門殿の恩義ではないか、拙者も其の恩義を知らんではないが、御当家へお抱えになると間もなくお国詰を仰付けられないが、万里の波濤を隔てゝ居れば、都度々々書面も送らんが、又なまじいかえに便りを致せば其の多助と云うものが八歳まで育てられた事ゆえ、却つて此の方を實の親と心得違わぎいを致し実父角右衛門殿に不孝な事でも有りはせぬかと存じて、態と心あつて便りを致さずせんにいた、併しかし十四ヶ年振りで江戸表へ出てまいり、余り懐かしいから先

達て国へ書面を送りし処、角右衛門の分家太左衛門より返事が
まいり、披ひらいて見ると、角右衛門殿は一昨年歿し、跡目相続を致
す多助と申すものは昨年家出を致し、跡方は焼失して鹽原角右衛
門の家は絶うちえたという返事おおきに大に驚き、其の返事の如くなれば多
助と申す奴は人でなしと只今も申し居る所であるが、若もしや多助
と申す者が八歳まで養育されたゆえ、我おれを實の親と心得て江戸表
へまいり、ずうくきたしく来るとも、対面は国の角右衛門殿の位牌
に対しても相成ろうと心得おるか、そりやア若い内の事ゆえ女に
溺れるとか、或あるは酒食に其の身を果し、路頭に迷い、見る影もな
い姿となり、うろく致しては居ろうかと、朝夕共に此の清と心
配致していたが、どうも何とも言い様なき不孝不義の奴、家督人

たる者が親の家を捨て、国を立去るとは重々の不屈者め、仮令此
処へ参ればとて、面会致すような角右衛門と心得居るかえ、目通
りはならんから早々出て往け」

清「誠に御立腹の段は重々御尤もさまでございます、多助お前心
得違いをしたろう、若い内には随分有りうちの事とは申しながら、
お前より外に鹽原の家をいえつつくべ可べき者はない、其の大事な家いえを捨
て、若氣の至りとは云いながら女に溺れて金子をつか遣い果し、家うちに
居られなくなつて家出をしたのだらうが、何とまア浅ましい心こに
おなりだ、今から十五年あとにお前を沼田の下新田へ遣やつてから
と云うものは、暑いにつけ寒いにつけ、旦那様も私もお前の事を
忘れた事はありませんよ、痘瘡はしたなれど、知らぬ田舎へ行つ

て我儘を云つて叱られやしないか、又田舎の事だから手習や学問も碌々出来まいだろうし、どうして居るかど毎日お前の噂ばかりして居ましたが、そんな姿で来たどて、お父様とつきさまは中々物堅い御気性だから、お会いになる氣遣いはないから、辛抱をして国へ帰り立派に鹽原の家を相続いえして出て来れば、其の時はお会いになるかも知れないが、只今の身の上で会おうと云うのは無理な話、そんな見苦しい姿なりでうろくして、炭などを担いでお父様お母様つかさまと云われた訳ではあるまい、田舎育ちとは云え余り分別あんまがないではないか、又お詫びの出来る時節もあろうから早く往ゆきなさい」

多「はいく、私わしい中々女などに溺れて金を遣つかつて国を出た訳ではがせん、私わしいだつて国を出たくはねいが、居れば命にかゝる

事があつて、実は……」

と国の事を言いかけてましたが、思い直して、いや／＼養母^{おふくろ}やおえいの事を迂濶に御両親のお耳に入れたなら、おかめはお母^{かゝさ}様^まには実の妹^{いも}、又女房おえいは実の姪^{めい}、此の母子^{おやこ}の悪事を聞か
れたら物堅いお父様^{とつさま}やお母さま^{つか}が嘸お驚き遊ばし、御心配なさ
るだろう、云わずに居ても跡で事の分る時もあるうから、か御^{なまな}
心配を掛けるより寧^{いっ}そ何^なにも云わずに帰ろうと、仏のような心の
多助は、何^{なん}にも云うまいと思ひまして、

多「御尤もでがんですが、種々^{いろ／＼}深い訳が有ることではがんで、お
聞かせ申していが、云うに云われない訳があつて云いやんせんが、
後^{あと}で事は分りやしよう、私^{わし}い国い出ねえば命にかゝる事があつて、

よんどころ

抛よんどころなく出たゞ、出れば後あとで家の潰れる事は知しっているが、命いのち取
 られては家うちを立てることも出来ねえから、私わしが江戸へ出て奉公し
 て金を貯め、国へ歸けえつて家うちを興たそうと思つて江戸へ来ることは来
 たが、頼るものがぐんしねえで、去年の八月廿日此のお屋敷へ尋
 ねて来て、お父とつさま様やお母かゝさま様はお達者で居るかと御門で聞いて見
 れば、お国詰おくにづめになつたとの事で、お国は宇都宮だつたのがお国替
 になつて、肥前の島原で三百里も先だと云われ、頼みの綱も切れ
 果て、路頭に迷う身の上となり、仕方がねえから昌平橋から身い
 投げべいとする所を、助けてくれたは今の主人山口屋善右衛門様、
 親切せつてんに世話をして、請うけにん人なしで奉公人に使つてくれやんしたか
 ら、私わしい山口屋で十年でも二十年でも死んだ氣になつて稼かせぎ、金

を拵え国へ歸つて、鹽原の家を立てる心でがんすから、どうぞ心配なすつておくんなさるな」

角「黙れ、それ程まで恩義を知つて居るものが、国の家を捨て、出るかえ、恩義を弁えて居るなれば町人でも侍でも同じ事だから、今の主人善右衛門と申す者も、命を助けてくれた恩人、殊に主人であるから身を捨て、奉公をし、忠義に勤めあげ、手前が金を拵え国へ歸り、一旦絶えた親の家を相続し、親より勝つて立派に家を立てろよ、身を立て道を行い、名を後世に揚げて父母を顕わすくらいのことは、八歳やっつのおり寝物語に度々たびくもうしき申聞けてあるではないか、手前も侍の倅、いやなに仮令たとえ百姓の子でも其の位の事は弁えて居るだろう、早く歸れ」

清「迎とてもお逢いはないからお帰りよ」

多「はい帰りますよ、八歳ヤッつの時に別れ申しましたから、お父とつき

様まやお母様かゝさまの顔を碌ろくに知んなかったが、お母様には今始めて

お目にかゝりましたから、お母様の顔は斯ういう顔で斯ういうお姿だという事は覚えやしたが、お父様のお顔は知りやしねえからお顔だけ見せておくんなせい、そうすればお父様が表をお通りなさる時お顔を眺めて、あゝお達者で戸田様に奉公していらつしやるかと思えば、仮令言葉たとえは交かわせねえでも心丈夫に奉公が出来やんすから、どうぞお顔を見せておくんなせい、やアお父様に殿様へどうぞお願いでがんすから、お母様に御新造様どうぞ旦那様へ取次いでお顔を見せておくんなせえよう御新造様」

と我を忘れて縁側に這上つて男泣に泣倒れるを、障子の内で聞く鹽原角右衛門も堪え兼ねる親子の情じょうあい合あい、思わず膝へはらくと涙を落しましたが、流石さすがに武家魂は違ったもの、屹きつと思り返して声を荒あららげ、

角「黙れ、早く往ゆかぬか、何時までも兎や斯う無礼のことを申すか、苟かりそめにも殿様のお側近くを勤むる身の上で、炭屋の下男に知ちかづき己は持たん、ぐずくして居おると障子越に槍玉に揚げるぞ」

多「へい〜参りやす、突殺されては仕様がねえ、あゝ有ありがて難がたえ親心だなア、自分だつて逢いたくもあんべいけれども義理堅ぎりがていお人だから、一旦人に呉れたもんだから己おらア子じゃねえと云つて、先方むこうの子と思わせべいとするのだ、己おれだつて実の子だか嘘の子だ

か知ってるが、堅かたいから槍やりで突殺すと云いやんしたから、是から槍やりで突殺された気になり、死身しにみになつて奉公しんこうしやすんから、どうぞ心配しんぱいしねえで下くだせいで、ハア段々お寒くなりやんすからお体を大事だいじにしてください、私わしい立派りっぺいになるまでお達者たつしやでいておくんなさいよ、左様なら」

とオイ／＼泣きながら御門へやつて来ると御門が厳しいから、

門番「これ／＼炭屋の男」

多「へえ」

門「何うした泣顔して、御門切手を戴いて来たか」

多「何もねえ」

門「これ／＼」

という間に無闇に表へ出て、漸く家へ歸つて来る。

善「はい、大きに御苦勞だった、戸田様は七万八千石だけあつて、お立派だろう」

多「あの屋敷は私生涯往くのは厭でがんす、戸田様だけは駄目だ、槍で突殺すと云われやんした」

主「それは大方からかわれたのだろう」

多「からかわれたのではありやしねえ、本当でがんすがねえ、其の槍で突殺すという心根が有難えもんでがんすねえ、旦那様槍で横つ腹を抉られる心持は一通りでは有りやすめえが、始終槍で突かれている気で働けば、どんな苦しい奉公でも出来ようかと思いやすから、旦那様始終私が横つ腹を槍で突いてると思つてこき

使つて下せい」

善「何の事だか分らないよ」

多「誠に感心だ」

と多助は実父の志の深きを有難く心得ましたから、これより多助は命がけで山口屋へ奉公しております中に、一つの経済を考え出して金を貯める工夫をするお話は此の次に申上げます。

さてお話は二つに別れまして、沼田の鹽原の家では其の騒動は一方ならず、馬が荒れ出して丹三郎を噛殺しました時には、名主幸左衛門、原丹治もおかめも途方にくれて慌てまわりました。是れは何も馬が多助の讐を取ったという訳ではございません、馬は鼻の先へ閃めく刃の光りに驚いて躍ね出し、おえいを引倒し丹三

郎を噛殺すような訳になるも天の悪にくしみで、自然に馬が斯様な事を致すような事に成りましたものでございます。丹治は我が可愛い悴を噛殺されましたから焦いらだ立つて庭へ飛び下り、馬の脇腹へ刀を突込んでこじりましたゆえ、流石さすがに猛たけき大馬おおうまも其の場へバツタリと横よこたお仆しになる上へ乗のし懸り、力に任せてギューと無闇こじに刮こじりましたから、馬は其の儘悲しい声をあげて息は絶えました。其の中うちにわいうちくと人ひとごえ声こゑが致しますゆえ丹治も観念いたして、丹「おかめもう迎とても此の家やに足を留めている訳にはいかん、殊に証拠ふみの艶書ふみを太左衛門が持つて逃出したから必ず役所へ訴え出るに違ちがひない、そうする時は迎かも斯うしてはいられないから、己も身を匿かくさなければならぬ」

かめ「そんなら旦那お邪魔でしようが私も御一緒に連れて往つて下さいまし」

丹「兎も角も早く逃げる支度をしろ」

と云いましたが、差当り二人の死骸の遣り場がありません所から、右の死骸を藁小屋へ突込みまして、それから有合ありあわした着替の衣類に百五六十両の金を引出して、逃げる支度をしている中に、門前には百姓が一杯黒山のように群むらり寄り、大声を揚げて口々に名主も原父子おやこも此処こけえ出ろ、打殺うちころしてしまえ、打殺してしまえ。と罵り立てられ、丹治おかめは表へ出る訳にいかない処から、一計を案じ、彼の藁小屋かへ火をかけましたが、藁の事ゆえ忽ち燃え移り、屋根裏へ抜けて母屋へ移り、焰えん々とばかりに燃出もえだした時

には、火事馴れぬお百姓衆の事ゆえ、大きに驚きまして、丹治の逃げるを追いかける了簡もなく、火を消す方へのみかゝり、ワイく騒いでいる中に、丹治おかめの兩人は生垣いけがきを破り逃げ出しました。名主も逃げ場を失い、漸くの事で生垣を破つて逃出そうとすると、平常小前の者ふだんこまえに憎まれて居りますから、百姓衆は手にく鋤鍬とを執り、名主を殺せ、名主を殺せ。と云うので、到頭無茶苦茶に殺してしまいました。此の事早くも御領主様へ聞えましたから太左衛門罷出まかりいでて、立派な申開きが相立ち、原丹治父子おやこの悪事、おかめの不届の次第が分りましたが、鹽原の家いえは焼失致し、それなりに済みまして、太左衛門は鹽原角右衛門の位牌を取り、線香の煙の絶えんように致しました。此方こちらはおかめ丹治は

おえいと丹三郎の死骸を藁屋に匿かくし火葬に致しましたが、茅屋かやゆ
 え忽ちに燃え広がり母屋へ移り、残らず類焼する。此の紛れに丹
 治はおかめの手を取つて須川へ出て、それより大戸村へ出て、そ
 れより岩本村へかゝり蛇じやだいら平へ出る。これは上州吾妻郡あがつまごおりの
 四万しまの山口と申す所へ抜けてまいる間道で、獵かりゆうど人か柚そまでなけ
 れば通らん路みちでございませうが、兩人は身の上が怖いから山さんちゆう中
 を怖いとも思わず、足弱あしよわを連れて漸くのことで山口へ参りまし
 た。彼あの辺へいらつしやつた方は御案内でございませうが、温泉場
 で、大久保先生が分析遊ばされた所が、上州第一等の温泉である
 という事で、今二人は田村と申す家いえへ宿を取り、身隠れをしてい
 る内に、九月の末からチラチラと雪が降出しました。此の辺は翌

年の三月あたりでなくては雪が解けず、其の間は往来が出来ませ
んから幸いの匿かくれ場所としている内に、因果におかめが懐妊致し
ました。三十九歳になつて子を設けると云うは物の因果で、原丹
治も困つたが、まア〜金を沢山盗んで来たから十分贅沢をして、
田村の家に厄介になつて居りますと、翌年九月廿九日に産み落し
ましたは男の子で、名を四萬太郎しまたろうと附けましたが、おかめは産後
の肥立ひだちが悪く、漸々ようくのことで十一月になりますと、先ず体も
治りましたから、斯んな山の中に何時までも居られる訳のもので
はない、それにお尋ねの風聞も大抵抜けた様子だから故郷ぼう忘がたじ難
したとえの譬で、二人一緒に江戸へ往ゆき、どんな暮しでもしようじやな
いか、懐に金も有ることだからと、これから二人連立つて十一月

の五日に其^{そこ}処を出立しましたが、此の日は少々空模様が悪いのを
 抜け出し、中の条より村上村に出、男子山^{おのこやま}の根方を通り、男子
 村と申す恐ろしい六里余^よの道を越し、横堀という処へ登つて来る
 と、雪がチラリ／＼降り出しました。南の方^{かた}には赤城山が一面に
 見え、後^{うしろ}は男子山、子持山^{こもちやま}、北にあたつて草津から四万^{ふでや}の筆
 山^ま、吾妻山^{あづまやま}から一面に榛名山^{はるなさん}へ続いて見える山又山の難所^{なんじよ}
 で、下は削りなせる谷にして、吾妻川^{あがつまがわ}の流も冬の中頃ゆえ水
 は涸^かれて居りますが、名に負う急流、岩に当つて打落す水音高く
 ごう／＼と物凄き有様でございます。

丹「困つた物が降出して来たなア」

かめ「申し旦那、いけませんねえ、是から北^{きたむく}牧^ままで何程^{なにほど}有りま

すかえ」

丹「己おれも初めて、幾里あるか知らん、誠に困るな、幸いに此処に草履草鞋を吊してある家があるから、腰を掛け、桐油を羽織つて往ゆこう、それより外に仕方がない、アイ御免よ、お婆さん茶を一杯おくれ」

婆「ヒへーおかけなさんしよ、誠に悪い物が降り出しやした」

丹「これから北牧まで幾許いくらあるのう」

婆「はい、一里些ちっとんべいも有りやんしよ、これからは下りにはなりやんすが、道が難えれいでねえ、まア此こ処けえお掛けなせい、お困りでござりやしよう」

丹「誠に困るよ、一里余よでは今から往ゆかれんのう、何処か此の辺

に宿屋はあるまえかの」

婆「ヒへー此こねえだ間まで村上に二軒有つたが、本当の宿屋ではがんせんから、北牧の宿屋から喧やかましく云われて廃やめてしまつて、今はありやしねえ、どうも北牧までの間には有りやしねえ、お困りでがんしようねえ」

丹「困つた事だ、近処で泊めて貰う訳には往ゆくまいか」

婆「そうはめえりますめえよ、どういふ訳だかお尋ねものがあるの何なんのと厳しくつて、只の家うちへ旅人を泊とめる事がならねいというお触ふれになつて居りやんすから、泊る事にはなりやすめえ、貴方あんた若し困るなら、これから半町ばかり跡あとへ帰けえると寮せうが有りやすが、其の寮へ往つてお泊とまなんしよ、婆ばアさまが一人居て、困る人は皆みな其そ処け

え往つて泊りやんすよ」

丹「其の寮は何処だえ、寮とは何だねえ」

婆「何なにさ寺のこつてがんですが、別に檀家もねえ寺で、お地藏様

の堂守に比丘尼の婆ばあさまが一人居りやす」

丹「往つて頼んだら泊めてくれようか」

婆「旅人ばかりじゃがんせん、商あきんど人衆どしゆうも泊りやすそうでがん

すから、泊めましょう」

丹「左様そうか、茶代を此処に置くよ、そんなら跡へ歸つて横へ半町

ばかり入るののだのう、大きにお世話で有つた」

と此の家やを立出で、跡へ少々戻り、半町ばかり細道へ入つて往ゆくと、破れ堂が有り、其の中に鼻の打ぶ欠かけた醜い顔をしている石

の六地藏が建っております。其の左手に家根のない門もん形の処がたを這入つて見ますと、破れ屋が有りましたから台所口から這入り、

丹「御免下さいまし」

比丘「はい、何方どなたでござます」

丹「手前は旅の者でございませが、夫婦で乳ちのみご児を抱え、此の雪

に逢い泊る処がなく困りました処、此方こちらへ来てお願い申せば泊め

て下さると近辺の者に教えられて参りましたが、どうかお情なさけにお

泊め下さいまし」

比丘「さぞ嘸まアお困りでございませう、お泊りなさいだが、私も

年を取つて居りまして人様のお世話も出来ませんし、又こんな庵

室の事ことでございますから、食たべもの物も着て寐ねるものもござんしねえ

し、其の身其の儘でころりとお休みなさるので宜ければ、其処に清水を笕といで引いた井戸がありますから足を洗つて此処へお上りなさい、鹽たらは台所にありますよ」

丹「はい有難うございます」

とこれから足を洗つて上へ通ると、四尺に三尺の囲炉裏に真黒な自在を掛け、煤くすぶつた薬やかん罐がつるしてあります。

丹「実に悪いものが降り出しました」

比丘「さア山国ではねえ時々山から雲が吹出し、雪になるかと思ふと又晴れ、晴れるかと思ふと又降ると云うので山の事は頓とんと分りませんよ、お前さん方は江戸のお方のように思われますねえ」
丹「左様でございます、少々仔細が有つて田舎へまいり、此の度たび

帰り掛けでございます」

比丘「寒いから遠慮なしに粗朶そだをくべてお煖あたりなさい、何も御馳

走はないから」

丹「難ありがと有うございます」

と粗朶をくべて吹きますると、火が移り燃上る焚火たきびの光で比丘

尼婆ばあの顔を見ると、年頃五十五六ではあるが、未だでつぷり肥つ

たみずくしい婆さんで、無地の濃花こいはないろ色の布子ぬのこに腰衣こしごろもを着

けて居りますのを、おかめがきつと見て大きに驚きました。三年

前沼田あとの下新田へ道連れの小平という胡麻灰ごまのはいを連れ、強談ゆすりに來

たおかく婆ばあで有りますから恂びつくり致し

かめ「お前はおかく婆さんじゃないか」

と云われおかくも驚き、

かく「これは誠にマア思い掛けない処でお目に懸りました、あなたは下新田の角右衛門様のお内儀かみさんのおかめさんでございましたか」

かめ「おかめさんもないもんだ、旦那此の婆さんがおえいを勾かどわ引かした又またたび旅のおかくという悪あく婆ぼでございますよ、本当に比丘尼になつて、斯こん様な処かに匿かくれているとは些ちつとも知らなかつた」と云うを聞き、丹治は眼かどに角立かどつて、

丹「不届な奴め」

と云いながらずか／＼と詰め寄つて長物ながものへ手を掛けました、此あとの後は何う相成りました。

十二

さて丹治おかめは横堀村の庵室で凶らずおかく婆ばあに逢あいましたから、丹治は刀を引付け詰め寄りますと、其の権幕きんまくに流石さすがの婆も悪党ながら比丘尼に成つて居ります事ゆえ、逃げもせず先非せんびを悔いて恐れ入り、手をつきまして、

かく「お腹の立ちますは重々御尤もでございますが、どうぞ私わたくしの申す事を一通りお聞きください、私も宜い年をして何時までも止まず、親子連れで旅を稼ぎ、悪事の数も仕抜きましたが、段々と思ひ返して見ますと、我身ながら恐しく思う処へ、悴小平はお

繩を戴き、送られまして、此の七月牢死致しましたから、はアこ
 れも悪い事をした罰ばちと、実に心から洗つたように改心致し、今ま
 で作つた悪事の罪滅しのため頭を剃りまして、毎日托鉢をして歩
 いて此の村へまいり、慈悲ある人のお世話で此の地藏堂へ入り、
 堂守を致し、麦や挽ひきわり割を戴いて漸ようく々此処に斯うやつて居り毎
 晩々々地藏様に向い、若い時分の懺悔を致し、お詫事をして居り
 まする、此処で又お前さん方にお目にかゝるのも皆みんなな悪事の報い、
 実に恐ろしい事でございます、南無阿弥陀仏くくく、どうぞ此
 の円顛あたまに免じ勘忍してくださいまし」
 と掌てを合せ拝むゆえ、丹治も一旦は長なが刀ものを引付けたが、又思
 い返し、

丹「何か貴様は全く改心して尼に成つたのか」

かめ「まアどうもまア彼の小平あという悪党は牢死しましたかえ、それからお前も改心しようとは思えないが、本当に改心したのかえ」

かく「誠に面目次第もございませんが、嘘に頭が剃すられましょうか、シテあなた方はこれから何所どこへお出で、ございますか、江戸へいらつしやいますなら、本街道の中山道なかせんどうぐち口へ出てはいけませんよ、お尋ねの人相書が　　つて居ますよ」

丹「え、人相書が　　つて居るとえ、それは何で」

かく「何だか貴方のお心に聞いて御覧なさいな、私わたくしくわは委しい訳は知りませんが、人相書の次第を聞いて見るに、沼田の下新田の後

添のおかめさんが、御領主土岐様の御家来原丹治という人と悪い事をし、家へ火を放けて逃げたとか云うので、お手先の人相書がつて居りますから、中山道へは出られません、雪でも解ける間三月頃まで此処に匿れていらつしやれば、些とはほとぼりも冷めましよう、今往くのは危いものでございます」

と云われて丹治はおかめと顔を見合せ、

丹「実は火を放ける訳ではなかつたが、おかめも亭主の有る身上ではなし、私も独身者ゆえ遂悪いことをした処、百姓共が大勢寄つてたかつて、叩き殺すと鋤鍬を持つて取巻かれ、逃処がないゆえ、実は抛なく火をかけて逃げたが、人相書がつて居ようとは知らなかつた、婆ア多分の礼も出来んが、両人居るだけ

の手当をした上に少々ぐらいはお前にも心付を致すから、三月まで此処に置いて呉れまいか、調べになど来る事はなかるうか」

かく「滅多には参りませんが来ても只村役人がお布令ふれの書付や何かを持って来るだけの事でございます、又お前さん方が泊とどっている内は他の者は帰してしまいますから、お心置なく御緩ごゆっくりと泊とどっていらつしやいまし」

丹「婆さん、此処へ来たのは却かえって仕合せで有った」

と云いながら懐中から十両取り出して、

丹「これは誠に少しだが、兩人の手当にやって置くから、米や薪でも買つて貰いたい」

と婆アに渡せば、婆アは大きに悦び、

かく「御心配なさいますな、酒でも買つて来ましょう」

とそれより手当を宜くして此処に三日程かく匿れて居ました。すると三日目の日暮方婆アが酒を買つてまいり、三人で酒宴さかもりをして居りますと、土間口から菅の深い三度笠を肩に掛け、し合羽に千草の股引草鞋ばきで、旅慣れた姿の男が入つて来ました。これは繼つぎたて立にすけの仁助という胡麻の灰でございます。

仁「お母家つかあちか」

という声を聞くより早く、おかく婆アは飛出し、突いきなり然仁助の胸倉を取り、横よこつら頬ほを擲倒ぶちたおす、打ぶたれて仁助は不意に驚き、仁「お母何つかあをするんだ」

かく「何も糞もあるものか、よくのめくと来やアがった、手前てめえ

が意地を附けたばかりで悴を牢死させるようにしやアがつて此奴いつ」

と云いながら又打ちます。仁助は益々驚き、

仁「あゝ痛いてえよ、何なにをするんだなア」

かく「何も糞も入るものか、此処へ来い、名主へ引いて往いく」

とポカ／＼打ぶちながら引ずり往ゆき、樹蔭こかげへ来ましたから、

仁「何だ何うしたんだ」

かく「何だじやアねえよ、無闇に這入つて来てき、己が比丘尼に成つてゐる身の上じやアないか、殊にお客の居るのを知らねえかえ」

仁「何だか突いきなり然にポカ／＼打ぶつから分らねえ、それに兄いいが牢

死したと云うのは何だ」

かく「それは出たらめだ、己の云う事を本当にする奴があるものか、お前めえを打ぶつたのは泊ひどつてる奴が二人居るから、いやと云う程ひど苛ぶく打たなくつちや本當にしないからだ、其の客人は原丹治とおかめという奴で、お前めえも知しっている下新田の後家で、お梅の實の親のおかめが泊どしりつて居るのさ、沢山金を持つてる様子だが、丹治が己を切つてしまいそうな権幕だったから、改心して尼に成つたと云い、兄はお繩ぼけを受けて牢死したと云つて置いたのに、兄の事を云つちやア化ぼけの皮が現めわれるじゃアねえか、お前めえも気がきかないのう」

仁「だって何だか知らねえからだアな、突いきなり然に驅出して来て擲なぐ

り附けた時は、己おらア何だと思つた」

かく「お前めえそうして兄めえいは何うした」

仁「兄めえいは北牧まで来ているよ」

かく「まア耳を貸しねえよ」

仁「貸して居らアな」

かく「暗くつて分らねえ」

と云いながら耳の傍へ口を寄せ、何やら暫くこそく私さく語り、

かく「宜いいかえ」

仁「そんなら屹度だよ」

かく「どじをくまなえように、九ツ過ぎに、宜いいか」

と仁助に別れ、おかくぼくあ婆は顔色を変えて這入つてまいり、

かく「さぞ嘸まアお驚きでございましたらう」

丹「驚いたよ、何であんなに腹を立つたのだえ」

かく「あいつ彼奴は仁助という胡麻の灰でございですが、忤より年上だもんですから智慧を附けて、悪い者にしたのでございます」

丹「お前も年上で随分悪党じゃないか」

かく「私の悪い事は前から知れた事ですが、あいつ彼奴のためにとじを働き、忤を牢死させるようになりましたから私にはかたき敵同志で、憎い奴だと思つている所へずうしく這入つて来ましたから、捨て、置けば此の村の難儀になりますから、私が名主の所へ引張つて往つたら、す直ぐに縛られ北牧へ送られました」

丹「あんな悪党は来ない方が宜しい」

なに自分も悪党の癖に。と話しながら酒を酌くみ交かわし、おかくは
 丹治を酔わせようと思つてむやみに盃さかずきをすゝめましたからグツス
 リと酔いまして、もう寝ようと床に就きました頃は雪は歇やみまし
 て、風かざ音おとのみ高く聞えます。九ツ過に音のしないように、台所
 口から道連の小平は覗のぞきの手拭で面部を深く包み、三尺余あまりの小長
 い柄へ革を巻いた 胴どう金かね造づくりの刀を差し、千草の股引に脚半甲掛
 で、仁助も同じく忍び入り、音のせぬように一緒に上りましたが、
 盗どろぼう賊ぞうだから馴なれて居ります。おかくの寢床へ来て声を潜め、
 小「お母つかア〜」
 かく「慌さわてちやいけねえよ、先刻さつき仁助に云つた通りにしねえ、づ
 かれちやアいけねえよ」

仁「本堂の傍に寝ているか」

かく「本堂の前だよ」

と指図するゆえ、小平仁助の兩人は拔ぬき足あしして参り、丹治おかめの蒲団の間に手を差入れましたは、柳行李の中に金を入れて、毎晩おかめと丹治の間に入れて寝ているのを、おかくが知つて居りますから小平に取らせましたが、其の晩に限つて金を出しておかめが懐へ入れて置いた事は少しも知りませんから、小平はこれさえ盗めば宜いと心得、ずつと手を中へ入れにかゝると、原丹治が目を覚し、

丹「盜賊どろぼう」

と声を立てるに驚いて小平が逃げ出す、丹治はおのれ逃がさじ

と枕元の刀を探ると、おかく婆ばあが昼のうち刀を隠して置きましたから有りません。其の隙ひまに横合ひまから繼立の仁助が突いきなり然切り附けるを引外ひっぱずし、手元へ繰込んで仁助の刀を捻取ねじとり、丹「邪魔するな」

といいながら力に任せて切附ける。天命とはいいながら仁助は其の儘斬きりたお倒される、是を見て小平は堪らんと庭の方へバラ／＼逃げ出すを丹治は後あとを追って往ゆく。其の間まにおかめは盗賊どろぼうだと察し、怖いながらも一生懸命こじも、小児こどもをかゝえ、表の方へ逃げ出す跡より、おかくはおかめを追いかけ行ゆき、谷川縁べりの一筋道で樹の根つまずに蹶つまずき倒れるおかめの髻たぶさを掴んで引摺り倒し、かく「此の阿魔め、えゝ何を悶もがくのだ、べらぼうめ、金を渡して

しまえ」

かめ「母子おやこ馴合なごつて私の荷物を盗むのだなア」

かく「元より手前てめえの身ぐるみ剥むごうと思うからだ、丹治は殺してしまつたから……何でも手前てめえが金を持つてゐるに違ちがひないからよこしてしまえ」

と取りにかゝる、おかめは取られじと挑いどみ争まひ、

かめ「人殺どし〜」

と嗚ど鳴り立たてる、赤坊あかんぼはオギヤア〜と泣出なしましたゆえ、

おかめは思おもわず赤坊に心を取られ、ぼったり落おりましたは紺縮緬こんしゆくめんの胴卷たごまきを見て、

かく「金かねだな」

と云いながら拾いにかゝるを、おかめは渡すまいと互に力を極めて引合いますると、胴巻が裂けて中からドツシリと落るとたんに封が切れ、黄金の花が四辺へ散乱する処へ、丹治は小平の逃げるを一目散に追つて来て、此の体たらくを見て、小平の逃げるに構わず突いきなり然ばおかく婆ひとたちに一刀あびせかけると、おかくはキャツと声を上げて倒れる其の上へ乗しかゝり、喉元を刮えぐつている背へ小平がそつと　り、胴金造りの長いやつを抜き放し、丹治の脇腹目掛けてウーンと力に任せて深く突つっこ込まれ、丹治はウンとそつくり反つて身を顛ふるわす所を足を踏みかけ、猶なおも再びごじられて其の儘息は絶えました。如何に悪の報いとは申しながら、繼立の仁助おかくの両人は丹治のために殺され、丹治は又小平のために殺さ

れるという、悪人同士互に修羅の責苦せめくに遭あうとは実に恐るべき事
でございます。おかめは今原丹治の殺されるのを見て逃げる心も
なく、

かめ「あれ、人殺し、誰たれか助けて下さい」

と云いながら小平の足に縋すがり附くを、

小「え、邪魔するな」

と足を揚げてはたと蹴る。蹴られておかめはアツとばかりに、

恐ろしく削りなせる二三丈もある崖がけの下を流るゝ吾妻川の中へ、

乳児ちのみを抱いたまゝごろくくくと転げ落ち、生しょう死し知らずに成り

ました。小平は刀の血のりを死骸の着物で拭い、鞆くらやみに納め、暗くらやみ夜やみな

がらぴか／＼する黄金こがねの光みを見当あてに掻き集め、無茶苦茶に手拭に

包んだり袂たもとへ入れたりして、丹治の死骸を川中へ蹴落し、又悪党でも親子の情で、おかくの屍骸を庵室の庭へ引摺つてまいり、深く穴を掘つて、仁助の死骸と一緒に埋め、道連れの小平は多くの金を持ったまゝ、何処いずこへか逐電してしまいました。

お話替つて山口屋善右衛門の家うちでは、多助が毎日種いろく々な物を拾つて粗末にならぬように貯めて置きます。斯かくて其の年も暮れて翌年になりますと、一日あるひの事で、番頭の和平が、

和「旦那様どうか何を買つて戴きたいものですなア、納屋なや穿きの藁草履わらぞうりを」

善「はい、藁草履は最もう残らず切れましたかえ」

和「へい穿きあろようが暴あろうございますし、殊に此の節は働きものが

多いので、鼻緒が切れると直ぐに川の中へ投り込んでしまひますので困ります、沢山入りますから、どうか些と沢山買った方がお為めに宜しかろうと思ひますから、百足もお買いなすつて下さい」

善「そうかい、それじやア入るだけ買いなさい」

と話をしているのを、傍で多助が聞いて居りまして、

多「番頭さん、番頭さん」

和「多助かえ、なんだ」

多「只今これで聞きましたら藁草履がお入用だそうでんすね」

善「はい入用だよ」

多「藁草履が入用なら私が買つて貰うべし」

善「お前藁草履を持っているかえ」

多「はア些ちつとべい藁草履を貯めやした」

善「そうか、沢山もあるめいが、貯っただけ買つてやろう」

多「どうかお買いなすつてください、藁草履は一足幾許いくらしやすえ」

善「そうさ、一足十二文だなア」

多「十二文とすると、河岸揚かしあげの職人が穿ういたり家うちのものが穿ういた

りするから、平均ならし一日三十足宛ずつ入りやすが、其うちの中うち皆みんななが鼻緒はなぢを

切ると棧橋せきはしから川の中へ投ほうり込んでしまうから、私わしい竹たけの先さきへ釘

を打うつて、それを引揚ひげて置いて、毎晩私わしが鼻緒はなぢをたつて、ギユ

ウツと真まんなか中なかを締しめて置おいた、それに水みづの中なかへ入いつたんだから先せん

より丈夫丈夫になつて居ゐりやす」

善「感心感心なものだなア、どうだ番頭ばんとう」

多「番頭さん、貴方あんたは算盤そろばんを取つて店を預あずかるものだから聞きや
すが、日に十二文の草履が五足で幾許いくらになりやす」

和「丁度六十文になるのう」

多「ハア六十になれば年分ねんぶんには大え事でけになりやすが、一ヶ月で
幾許いくらになりやす」

といわれて番頭は算盤を取つて、

和「えゝ、こうツと、日に五足ずつで一ヶ月に百五十足になるの
さ」

多「その錢ぜには幾許いくらだアな」

和「えゝと一貫八百七十二文サ」

多「一年で何足になりやす」

和「うるさいのう、こうと、千八百足になるのさ」

多「その金高はいくらだね」

和「うるさいのう、こうと、金三両一分二朱と五百六十文になるのさ」

多「目がはいつて居やすか」

和「知れた事よ」

多「それでは十年ではいくらに成りやす」

和「うるさいのう、えゝこうツと、おや、旦那様大きなものでございませう、一万八千足になりやす」

多「その金高はえ」

和「うるさいの、えゝゝこうツと、大きなものですなア、金三十

四兩二分と七百四十八文に成りますが、旦那様大きなものですな
ア、微塵積つて山となるの譬たとえの通り、十年では程になります」

多「はア三十四兩二分と七百四十八文あれば、国へ歸けえつて家うちを立
てる足しになりやすな」

和「持つて来なさい、沢山もあるまい、百足も貯つたか」

と思うと、多助が納屋から横庭へ運んで山の如くに積み上げま
した。

多「一昨年おとしからで随分貯つた」

善「大變貯めたなア、幾足ある」

多「はア二年貯めたゞから勘定はしねえが三千足ぞくもあんべいかな」
善「これは驚いた、どうだい番頭、感心なものだなア」

和「驚きましたなあ、家でも草履の入る事は大変ですなあ」

善「よし、それだけは新しい草履を買った積りで手前の丹誠を買って遣ろうが、金は私が預るよ、これから手帳を拵えて、一々付けて置きましょう、今日が預り始めだ」

多「金は入らねえ、先ずこれだけは余所の物を拾ったのじゃねえ、家の物を拾ったのだから、これは旦那様へ上げべえ、私が斯うして人に見せれば些とは出方のものも草履を大事にしべえと思つて、お手本に貯めたので、これは私が錢貰うべえと思つて貯めたのじゃアねい、まだそれべいじゃアねい、大く御奉公をしてある事があるが、それは最う十年も経つてから見せべい」

善「不思議な男だのう、なんと番頭感心なものじゃアないか」

和「驚きましたなア」

多「番頭さんも目前めさきべいの勘定で心の勘定がねいから、何が幾許いくら入るか知りやアしねい、店を預かる番頭さんだから確しつかりしなんしよ」

和「はい、かしこま畏りました」

と云うので番頭も大おおきに気が注つぎ、主人も感服致し、これから追々多助が他の人に真似の出来ぬ事をいたしますお話は、一息つきまして申上げます。

鹽原多助は計らずも山口屋善右衛門に助けられ、此の家に奉公をいたして居りましたが、多助の行いの実明じつめいなのに、主人は素もとより奉公人一同が感心致しました。其の多助の気の利くことは、主人の用向ばかりでなく、番頭から小僧から、家へ出入うちではいる者一同から、おさんどんにまでも宜く勤めますが、決しておべつかでするのではなく、信実しんじつに致しますので、番頭が肩が張つたと云えば直すぐに後うしろへ　　つ打たきます。エヘンと咳払いをすれば直すぐに灰吹を持って往ゆく。風を引いたというと直すぐにお医者を呼んで来る。少し病気が重いと思うと直すぐに早桶を買つて来る。まさかそんな事もありますまいけれども、多助は少しも隙すきがありませんで稼稼ぎぎますのは、追々金を貯めて国へ帰り、養家ようかへ恩返しをしようと云

うので、後には地面の二十四ヶ所も持つようになりますが、そう

なりますには、後うしろだて楯と云うものがなければなりません、商人あきんど

が大きくなるには、資本もとでを貸してくれる金主きんしゅと云う者がなければ

ば大商人にはなれませんものでございますが、茲こゝに下野国しもつけのくに

安蘇郡あそごおり飛駒村とびこまむらに吉田八右衛門という人が、後に多助の荷主に

相成りますが、此の人が三十五歳になるまで江戸へ出た事があり

ませんのは、此の人の親父おやじ八左衛門は六十以上の年でございます

が、総て江戸の取引先きの事を致して居りますから、八右衛門は

江戸へ出てまいりませんでした、親八左衛門が、不図病氣付き

ましたによつて、八右衛門が始めて江戸へ出て参りました。頃は

宝曆十二年十二月の十五日、深川八幡の年の市で、其の頃は繁昌

致しましたもので、余り込み合うから八右衛門は田舎者の事ですから恐れまして、高橋たかばしを渡つて深川元町へ出て、猿子橋さるこばしの傍に濱田という料理屋があります。其の夜は雪がチラ／＼降出し眞まつくら

闇くらですから、外ほかに余り大勢の合あいきやく客はありません様子でありますゆえ、濱田へ上つて見ますと、衝立ついたてを立て、彼方あちらにも此方こちらにもお客が居ります。八右衛門が御膳ごぜんを食べて居りますと、足利に猿田やえんだという処があつて、其処そこに早川はやかわ藤助とうすけという出船宿でふねやどがあります。丁度其の主人が居合せまして、思い掛けないから八右衛門の傍へやつて参りまして、

藤「誠に暫くでございました、八右衛門様じゃアございませんかえ」

八「誠にこれは何うも久しぶりで逢いました、藤助どんでがんすか、お尋ねすべいと思つたが、つい無沙汰しましたハア」

藤「能くお出でになりました、何の御用で」

八「ハア私もどうか江戸という所へ来てえと思つて居たが、親父が達者で江戸の取引は己がするから汝は家にいろというから、家にべえ居りやしたが、大した事でもありませんが、親父が塩梅が悪いので手前往つて仕切を取つて来うというので、仕切を取りに来ましたよ、何んに取引先きは神田佐久間町の善右衛門が一番大えから、彼処へ往つて一晩や二晩は泊つて来てもらからというが、親父が塩梅が悪いからハア、早く帰るべいと思つてハア」

藤「はい、山口屋善右衛門は大きくて荷主を大事にするのは、あ

の位な家は無い、あの親父も中々荷主を大事にするが、悴は善太郎と云つて年は若い、宜く客を大事にするし、それにまた、番頭の和平が客を大事にする、第一彼処の家は響応が違つてハア」

八「そうだつて、親父に聞いて居りやしたが、私の顔を知らねいから向うで金を渡さねいといけねいが、そんな事はあるめいかねー」

藤「なアにそんな事はねえ、貴方は始めてのことだから親父さまが往くより却つて大事にするだんべいよ」

八「親父も、手前は始めて往くのだから、これを持って往くがい、というので、受取証文を親父が寢床で書いて、手紙と此の八十両の受取証文を持って来やんしたから、多分渡すべいと思つて居り

やす」

藤「そりやア大丈夫でいじょうぶ渡しやす、これから佐久間町へ往ゆくには大橋を渡つて浜町へ出れば宜うがंस、私わしは花川戸の炭問屋へ、些ちつとべい預けたものがあつて寄らなければならぬいから、大橋まで一緒にめえ参りましょう」

と昔の田舎の衆は大声で話を致したものでございます。是から勘定を済ませ、兩人連立つて此処を出て、大橋の袂で別れまして、早川藤助はお船倉の方へまいり、八右衛門は大橋を渡つて彼是甘間ばかり参りますと、バラ／＼／＼／＼と駈けて来たものがありましたくだが、其の頃は商あきんど人は皆雪駄を穿いて居りまして、鱒どじょうの鼻緒の下りの雪駄で駈けて来まして、前へのめる途端に八右衛門の

肋あばらほね 骨ほね へ彼の男かが頭づつつを打付けましたから、八右衛門は驚いたの
 なんのと申しまして、其の男も驚きまして、

男「何とも申訳がありませんが、少し怪しい奴あとが後おっから追かけて
 参りまして、少々貯えもありますから、大橋なかの央なばまで遁にげてま
 いりますと、貴方あなたのお姿が見えますから、追付おいつこうと思つて駈け

てまいりますと、貴方に突当りまして誠に申訳がありません、御
 免なすつて下さい、何処かへ当りましたかな、確しっかりなさいく」

八「ア、ア、ア、ア、ア、ア、痛いてい、あんたはまア怪我といえば仕方がね
 いが、人の横よこツばら 腹はらへ石を打ぶつ附けたかなア」

男「石じやありません、転ぶ拍子うについ頭あたまが当りましたので」

八「ひどい石頭いしづつだったなア、あ、痛いてい、そんならいゝが、身体からだが

痺れて立てない」

男「誠に申訳がありません、此処は往来でお話が出来ません、何処か茶屋へでも参りましょう、此処に持合せた薬もありますから」

八「あゝ痛い、立てない」

男「そんなら私が負つて上げましょう」

と彼の男も怪我とは云いながら氣の毒に思ひまして、負うようにして橋の袂の茶屋へ連れて往きました。

女「入らっしゃい〜〜」

男「どうか姉さん、少し加減の悪い方がお出になつたから奥を貸しておくれ」

女「へえ貴方お加減がお悪いのですか、嘸お困りでございませよ

う、お草鞋でございませうか、足を拭いて上げましょう」

などと申しますと、彼の店風たなふうの人が八右衛門の手を取つて座敷へ上げまして、

男「誠に申訳がありません」

八「お前さんかい」

と見ますと、木綿物ではございませうが、さつぱりした着物に小倉の帯を締め、細かい縞の前掛を掛けて居りまして、色の浅黒い店風たなふうの人です。

八「誠に貴方あんたは何ういう事で盗賊どろぼうに逢いましたか」

男「私わたくしは横山町三丁目の播摩屋という袋物屋でございませう、深川までお払いを取りに参りまして、百金受取つて帰りましたから、

成るだけ賑やかな処を通つて来ますと、いやな風体ふうていな奴が後あとから附けて来ましたから、盗賊どろぼうだと思ひましたゆえ、逃げ出す途端に、貴方あなたに打ぶつかりまして、何とも申訳がありません、これに有合せました薬を湯で溶きましたから召上つて下さい」

八「これは誠に有難う、怪我とあれば仕方がねいが、金を持つて夜歩かねえがいよ、私わしやア田舎者で、始めて江戸へ出て来たんで、なアに医者にも及ぶめいが、横つ腹が突張つて仕様がねい」

女「貴方あなた些とお横におなりなさい」

男「姉さん此の近処にお医者様はありませんかね」

女「誠にどうも此の近処にはお医者様はございません、浜町まで参らなければございません」

男「そうかい、枕を貸して」

と八右衛門を寝かしまして彼の男が側で擦つて居りますうちに、八右衛門は宜い心持になりましたから、すやくと寐まして、暫く経つて目が覚めて見ますと彼の男は居りませんゆえ、起上つて手ちようず水ゆに往こうと思うと立てません、それに舌がつり上つて口もきかれません。

八「はせな、身体かあだが痺すびれて歩あうけねい、立さす事が出ぜ来きねい、ホリヤ困こつさな、女中衆ぞつうずく」

と少しも舌が　りません。

女「何うかなさいましたか」

八「今ほこにいた人は如何しそすさな」

女「あの方はお医者様を探して来るから少し貴方を寐かしておいて呉れと仰しやってお出でになりました」

八「はせな、己おらア此ほけ処へおいさすゝみ包づぎの脇わしざし差さぎのはぞうしさな」

女「あの包や何かを此処へ置いてはいけないからと云つて、お連れの方がお脚半までお持ちなすつてお出かけになりました」

八「そらぞろぼうア盗賊ぞろぼうぎア」

女「大きな声をなすつちやアいけませんよ」

八「盗賊ぞろぼうぎア盗賊ぞろぼう野郎やろうくく、早く駕籠を呼びにやつて呉れ」

と八右衛門は騒いで居ります。又山口屋善右衛門の宅うちではそんな事は少しも知りません。其の頃お商人あきんど方がたでは夜よの四ツ時になれば戸を締めてしまいます、店に小僧が手習をして居ります、此こ

方ちうらには番頭が帳ちようあい合あを致して居りますと、土間に筵を敷いて頻りに草履を拵えて居りますのは多助でございます。

男「へい御免下さい御免下さい」

小「何方様どなたさまですなア」

男「少し御免下さい」

と云うから小僧が戸を明けると這入つて来た男は、半合羽はんがっぱに千草の股引に草鞋がけで、一本お太刀たちを差して、手には小包を提げたまゝ、

男「はい御免なさい」

小「何方様どちうさまからお出ででございます」

男「えー私わたくしは下野国安蘇郡飛駒村の炭荷主八右衛門と申すもので

「ございます」

番「はい、こちら此方へ」

八「毎度親父ばかり出て居りまして、わし私がこちら此方へ参りましたのは初めてでございますが、親父が病気で寝て居りやして、寢床で証文と手紙を書いて、わし私がだい代にこち来ましたが、こち此方ではどなた何方もお變りはありませんか」

番「え、お噂には承わつて居りますが、宜くどうも貴方がでむ出向でございます、毎度主人と貴方のお噂ばかり致して居りました、まあお上んなさい」

八「上つては居られません、ふだん平常ならい宜いが、親父がわ煩つて居りますから、直ぐに扇橋まで往つて船へ乗つて歸る積りでござえま

すから、どうかこれへ証文を持ってまいりましたから、八十金お渡しを願います、慥たしかに三貫目炭を送ったからそれ丈の代を戴あいて、船賃は後あとで宜しゆうございますから、八十金はどうか只今願います」

番「へい〜」

と云いながら手紙を讀上げて見ますと、金を八十両悴せに渡して呉れろとあり、受取証文を見ると八左衛門の書いたのに違ちがいから安心して、

番「若旦那様か〜、予お噂うわさの八右衛門様がお出でになりました、え、これは私共わたくしどもの若主人で、今晚は主人は居りませんから代だいを致いたしますので」

八「ハアこれはどうも予て親父から承わつて居りましたが、好い若旦那で、あんたが善太郎様でございますか、番頭どんは和平さまと仰しやいますか、へえ何うか此の後ごともお心安く願います、それではどうか金子の処をお渡し願います」

番「それでは、毎いづでも砂糖と塩しおびき引をお歳暮に上げるんですが、

貴方お持ち下さいますか、もし御迷惑なら小僧に持たして上げても宜しゆうございますが、何しろ是非御一泊を願いとうございませとっさまが、お父様とっさまが御病氣の事では抛よんどころございませとっさまんで、へえ」

八「へえ結構でございます、田舎では塩引などは結構でございますから扇橋まで持つて参りましょう」

番「それでは八十金差上げて、一貫二百文のお船賃は後あとに致しま

して」

といいながら金の勘定をして居りまして、今渡そうとすると、

多「番頭さんく、金を渡すのは容易に渡さねえ方がいゝ、顔を知つてる人じゃアねいし、初めて来た人だから、旦那が帰つて来て話をしてから渡した方が宜うがんです」

番「余計な事を云つてる、お前の知つてる事じゃアねいよ」

多「後うしろの方から口を出してはすみませんが、貴方あんたは飛駒村の八右衛門さんに違ちがえありませんかえ」

八「はい私わしはそれに相違ねえが、深くお問といた糺だしをなさるのは私わしを疑ぐんなさるのかえ」

多「それでも私わしア斯くうやつて暗くれえ所で言葉を掛けちやア済まねえ

が、あんたは本当の吉田八右衛門様に違えねえかなちげ

八「本当の嘘のというのは私わしを疑ぐるのかえ、こゝに親父の手紙を持って来たのが確かな証拠なのに、何をお疑ぐりなさいますな」

多「本当なら私わしが少し承わりてい事があります」

番「これ／＼何を云う、えゝこれは山出しで何も解りませんから、どうかお腹をお立ちなさないで」

多「まあ番頭さん黙っておいでなせえ、私わし聞かねいければならぬい事があるが、もし八右衛門様とやら、あんたは下野言葉でねえから私わしが聞くだが、どうも貴方あんたは下野の者じゃアがすすめい」

八「私わしは下野の飛駒村の者に相違ねえが、お前は何をいうのだ」

多「なアにお前さんの言葉は下野も上州も武州も方々の言葉まじが交

つて居るようでがんす」

番「お前何を云うのだ、黙つていろくくく」

多「それじやア番頭さん、私が暗い処わしぐれで何か云つていても分らね
いから、其処そこへ出やんしよう、これ八右衛門さん、アはくくく、
どうもはア騙すだまことは出来ねえもんだ、久しぶりで逢つたが、お
前めえ己を忘れたかい、お前めえは道連の小平という胡麻の灰へいだつけなア」

小「いよう」

と小平は恟りびつく致し、流石さすがの悪人あくども後あとへ下さがりました。

多「嘘は吐つけねえものだなア、小平ハア斯う知れてしまつたから、
己おれは胡麻の灰へいだと云つて帰けえつた方が宜かんべい、番頭さん、此奴こいつ
は道連の小平という胡麻の灰へいでがんすよ」

番「いえー胡麻の灰へいかい、それだから夜は戸を明けない方が宜いい
というのだ、大変な騒さわぎが出来た」

多「アは、、、、すんで既に八十両という大金を奪とられる処ところだった、去
年われ汝おれが己おれに刃物突付けて、すんで既のことで殺される処を助かつて此処
にいるだが、汝われはまあだ悪事が止やまねえのか」

小「妙な処で逢つたなあ、そうして貴様はどういう訳で此処うちの家
にいるのだ」

多「どうして居るって、己おら金を貯めて国へ歸けえるべいと思つて、
此処うちな家で稼いでいる処へ汝われが来たから分つたのよ」

小「エーおい番頭さん、私わっちア道連の小平という胡麻の灰へえで、実は
少し訳があつて此の書付が手に入へいつたから、八十両まんまと騙かたり

取ろうと思つた処が、山出しの多助の野郎に見頭みあわされ、化ばけの皮が頭あられてしまったから、此の儘じやア帰けえれねえ、さア此の大きな家台骨やていぼねから突き出され、ば本望だ、さア突出して貰おう」
番「突き出すつて、どうもこりやア困つた」

と番頭は頻りに心配致して居ります処へ、此の頃は只今とは違
いまして人力がございせんから、駕籠で大急ぎに参りまして、
トン／＼トン／＼「ちよつと此処をお明けなすつて下さい」と今
度は本当の吉田八右衛門という人が、涎よだれをたら／＼滴たらし這入つ
てまいり、只見とれば先程さつきの奴が自分の形装みなりで居りますから、八右
衛門は突いきなり然此の野郎と云いながら、一生懸命に這上がつて、小
平の胸ぐらを掴んで放しません。

八「此の野郎呆れた野郎だ、己が身体利かねえようにして、己が荷物から脇差から大事でいじな書付まで盗みやがった、盗賊どろぼう々々、此の野郎々々」

小「静かにしろえ」

と云いながら八右衛門の手を逆さかに捻ねじつて其処そこへ投げ付け、草鞋穿きの儘でドツサリと店先へ上り、胡坐あぐらをかきまして、

小「やい百姓、実は己おらア小平という胡摩のへえだ、上州で人ひしごころ殺しから足がつき、居られねえから其の場をふけ、猿田船やえんだぶねへ乗

つて江戸へ着き、先刻濱田さつきで飯を食いながら聞いていると、手前てめえが此の山口屋善右衛門へ八十両の為換かわせを取りに来たという事を聞いちやア遁のがさねえ地獄耳、手前てめえの跡を付けて来て、転んだ振り

荒稼ぎ、頭突ずつきといつて横腹よこつばらを頭で打ぶつて息の音ねとめ、お氣の毒
 だと介抱して吞ませた薬は麻痺しびれぐすり薬だ、手前てめえの身体がきかねえう
 ちに衣類きものから懐中物まで引攫ひっさらつて遁にげるのを、盗人どろぼうなかま仲間つぎで頭
 突つぎというのだ、あの時攫さらつた書付からまんまと首尾よく八十両、
 いゝ正月をしようと思つた所が、打つて違つて山出しの多助の野
 郎みあらに見頭みあらわされたから、もう破れかぶれだ、さア突き出せ〜」
 と云うので店の者は大きに驚おどき、頭かしらを呼びにやるやら何やら騒
 ぎ致しますけれども、小平は鉄挺てこでも動きませんので、持て余し
 ている所へ歸つて来たのは主人善右衛門で、これより小平を奥へ
 連れてまいり、意見を致しますお話は次回までお預りに致しまし
 よう。

十四

山口屋善右衛門の宅うちでは、道連と綽号あだなをされました胡麻の灰小平が強談ゆすりに参りましたが、只今では強談騙かたりをする者も悪才に長たけて居りまして、種々いろく巧者になりましたが、其の頃は強談をする者が商人あきゆうどの店先へまいり、サア打たき殺せと云つてどっさり坐り込みますと、表へ黒山のように人が立ちまして外聞が悪いから、余儀なく十か廿の金を持たして帰したのですが、只今ではそういう事は出来ません、直ぐに巡査おまわりがまいりまして、ハアこりやア分署へ参れ、なんと申しますから中々出来ませんが、昔は大家程たいけ

こういう事をされると困ったもので、山口屋善右衛門は宅へ帰つて見ると此の騒ぎですから、直ぐに医者を呼びにやりました。八右衛門を療治して貰い、表から此様な所を視き込まれてはならんからと云うので、奥へ通そうと申しても小平は何うしても動きませんでしたが、小平も段々考えて見るに、此処で言う事を聞かなければ為に悪いと思ひまして、奥の六畳の座敷へ通りました。すると主人善右衛門を始め多助も番頭もまいりまして、善「これは小平さんとか、始めてお目にかゝりましたが、私も今帰つたばかりで委くわしい事は知りませんが、お前さんは私共の大事な荷主に毒薬を服のませ、身体を利かなくして証文を持つて騙かたりしようと思つて店へ来た処が、宅うちの奉公人の多助がお前を知つて

いて化ばけの皮があら頭あわれたから突出して呉れろと云うそうだが、悪党の方には何ういう法があるか知らないが、宅うちでは縄付を出す事は好まない、多助が見み頭あわしたのは腹も立つだろうが、そんな事を云つても仕様がないから、私が得心の上で甘両上げよう、騙つたと云えばお前の罪も重くなり、私も心持が悪いから此の甘両を持つて帰つておくれ、殊に暮ではあるしするから、これで辛抱しておくんさい」

小「へい、有難うございやす、これはお初うにお目に懸りました、私わア小平しという胡麻へいの灰へいでございやす、先刻さつき番頭ばんとうさんにいう通り、八右衛門という荷主が山口屋へ為かわ換せを取りに往ゆくと云うから、少しでもそう云う事を聞いちやア打う捨ちつちやア置あけらねいから、暴

つぽい仕事だが頭で突いて毒を服のませ、生なま空ぞらを遣こつて此こ方ちの店
 へ来た所が、山出しの多助の畜生に見み頭あわされた上からは、私わア
 繩にかゝつて出るのは承知わさ、私わがどじを組くんだつて外とは違ちい、
 山口屋善右衛門さんという立派うな家かだから、廿や三十の目腐がれ金
 を貰けつて歸かつたと云いつちやア盗ぬすつとなかまへ恥辱はじだ、さアどうか突出
 して下くだせい、私わが突出わつちされくばお前まさんには遺恨いはねえが、多助
てめえ手前てめえを抱かいて往いつて臭くい飯いを喰くわせるからそう思おえ」
 多「何処いへ抱かいて往いくんだ」
 小「分わらねえ奴やつだ、牢らうへ連つれて往いくんだ」
 多「フウン、牢らうへ往いくのを抱かいて往いくといいうのか、手前てめえこれこで黙
 つて歸かれば、且ま那なが金かねを下くださるから黙もつて歸かつた方かたがよかんべえ

ぜ」

小「黙っている、此の才さいいづち榎野郎ちやろうめ、引込んで居やアがれ」

善「まあ、これは山出しで何なんにも知らない者だから、そんなに腹を立たないで帰っておくれな」

小「いんや帰けえらねえツたら帰られねえや、どうせ細そつくびつた素首すくびだから三尺たけ高い処いへ板付いたつきになつて、小塚原か鈴ヶ森さらへ曝さらされた時に、あゝ好いい気味だと云つて笑つて下せえ、其の代りに多助を抱いて往いかなくつちやア腹が癒えねえのだ」

多「これ小平、それじゃア是ほど旦那様が事を分けて云つても手て前は肯めえかきねえのか」

小「糞くらでも喰くらえ」

多「旦那様、誠に相済みません、貴方あなたに迷惑を掛けますめえと思
 ってるに、どう云つても聞かねえ、おい小平、旦那がお慈悲で二
 十両と云う金を呉れべいというに、それえ聞かねえと云わば仕様
 がねえが、これ小平、汝われは情ねい人だなア、私わしから事を起して旦那
 様に御迷惑をかけては済まねえし、汝われを突出して此やの家に難儀
 の掛るのを見ては居られねえから、己おれは悪い事をした覚えはねえ
 が、連れて往いくなら勝手にしろ、汝われの先へ立つて繩にかゝるべえ、
 殺すなら殺せだが、汝われ幾わら氣を揉んで己おれを殺すべえとしても、人
 間と云うものは命の尽きねえ中うちは死ぬ氣遣いのねえものだ、寿命
 が尽きたら幾ら助かりてえと思つてもだめだ、ハアどんな火の中
 水の中でも定じょうみ命しょうの有るうちは死なねえもんだから、殺すなら

殺すともどうとも勝手にしたが、だがマアよく考えて見ろ、
実に悪党と云うものは人の慈悲なさけも弁えねえと見えて、そんな横つ
倒しなア事を云つて、此の宅うちで斯う云えば彼あア云つて困らせる、
己おらア汝われを悪にくまねえが、其の心根が如何にも不憫だアから一と通り
の事をいうだ、汝われえ此こ処けえ八十両べえの金を強談ゆすりに来るため、大
事の荷主様に毒を服のましてよ、世界の人の身体を利かなくなるよ
うにして、そうして汝われえ種いろく々な物を盗み、脇差い差し、風呂敷
脊負しよつて脚半を掛け、草鞋穿きになつて此こ処けへ来て、田舎者の仮こ
わいろ声を遣つて取つた所が只たつた八十両べえの金、それに引替え己おらア
旦那様などは座蒲団の上に坐つて煙管を啣くわえ、はてなアと一つ首
を捻ひねり考えると、直すぐに五万や八万の金を儲ける事を御存じでいら

ツしやる、旦那様に比べれば汝われが稼わぎは誠に小せえ事ことで、此こ処こな
 台所の流しの下より未だ小せえ、旦那様が悪い奴やつに二十両の金を
 呉たれべいという心は大したものだ、また汝われが取り損たなつた金は只
 た八十両、何とまアあんま余あり小せえ稼わぎで氣きの毒どくだよ、己おらア此こ処こな宅うち
 に奉公ほうこうに来て、今では斯あうやつて草鞋くさぎを造つくり草履くさぢを直ただし、大騒おほさわぎ
 いやつて小せえ事ことをして居ゐるが、今に己おれがでかかなれば五万ごまんや十万じまん
 の身代みしろになるべいと思おもつて御奉公ごほうこうしているに、汝われえわけけ年ねんして稼わ
 ぎ盛さかりりで有ありながら、只ただた八十両はちりょうべいの金かねを取り、牢らうに入いつて命いのち
 を落おすかと思おもえば如何いかにも氣きの毒どくで、其そのの心こころが虫むしよりも小せえか
 ら己おらアああ然ぜんでなんねえから意見いけんを云いうだ、ええか、そんなに
 急いそいで獄門ごくもんになりたがらねえで、旦那様が二十両にじゅうりょう下くだされば幸さいえだだ

アから、頭でも剃落かして出家になるか、又は堅気になり、誠の商いでもするなれば、今までした悪事も自然に消え、畳の上で死なれるようになるがどうだ、此処で一つ二十両の金え貰い、改心して真の人間にならねえか、汝工母親は又旅のおかくと云つて、五十の坂を越して居ながら、汝と一緒に己ア家へ強談に来たり、おえいを攫つたりして己宜く知つてる、汝母親は悪党だが、親父はどうだか知んねえが、大方女房のおかくは悪党で、又汝よ
うな子が出来たから離縁をせねえばなんねいという処で、悪党は悪党連れだから、おかくが汝工連れて出たかも知んねえが、其の時は親父が善人ならば、別れた後の心持は何うだえ、あゝ彼奴が真人間ならば己心配はねえものを、悪党の子が出来たから仕方な

く追出したが、どうか堅気になつてくんろ、悪い心を廃め、真人
 間になれば宜い、今一度逢いていもんだと、親父が達者でいれば
 汝が事は片時も心に忘れる氣遣いのねえもんだから、親父に對し
 ても誠に己ア氣の毒に思うだ、己ア汝を悪むじやねえ、愨然
 だと思うから悪い事は止めろや、これ堅気に成れや、大騒ぎやつ
 て首を投げ出して取つた所が高が八十両べえの小さな金、旦那様
 のように一時に二万も三万も儲ける事を御存じの人に比べれば、
 あんまり小せえ考えだアから止めろや、やア」
 と信実心から説き諭され、悪人ながら小平は肝に感じましたか、
 黙然として腕を組み、俯いて何か考えて居りましたが、暫くして
 首を擡げ、多助の顔を熟々、見まして、

小「やい多助、此の野郎は妙な事をいう、此の畜生、申し旦那え、成程只今山出しの多助が云う通り、斯うやつて草鞋わらしばき穿きになり田舎者の仮色こわいろを遣つかい、大勢を騒がし、首尾よく往つた所たつが唯た八十両、成程是れは小せえちい、それに引換え旦那などは座蒲団の上で、くわ啣え煙管をしながら、一つ首を捻ひねれば五千も八千も儲かるといふ其の人に比べれば、虫より小せいと云えば成程小せい、それに此の野郎のいう通り、母親おふくろは私の餓鬼わっちの時分離縁になり、私わっちを連れて出て往ゆく時、親父は腕を組んで、ぼろりぼろり泣きながら、己の忤ごんに斯様な悪党が出来るとは何たる因果だろう、此の餓鬼が真人間ならばと云いながら、下を俯うつむいていたが、今まで斯様ごんなことは誰たれにも云わなかつたが、此の野郎は妙な事を知つてゐる、些ちつと

異つていらア此ち畜し生しょう」

多「何が異つてる、己おらア方で異つてるじゃねえ、汝われえ方の根性が

異つてるもんだアから、当あたりめえ然えの正直なことを云つても汝われがに

は違つているように聞えるのだ、己おら真直まっすぐの事を云うだよ」

小「可笑おかしい畜ちき生しょうだ、種いろく々な事を云やアがる、申し旦那え、

私わっちア二十両は入りやせん、此こいつ奴の前へ対しても金子を貰つちやア

きまりが悪くつて帰けえられやせん、旦那え私わっちは何だか変な心持にな

つて強い事も云えなくなつた」

多「駄目だなア、さつさと帰けえれ、だが、折角金え呉れべいと仰し

やるこんだから、戴いて往いくが宜いい」

小「なに金は入らねえが、旦那え、どうか裏口から密そつと出して下

せえ」

と小平はしお悄れ果て、衣類から脇差まで残らず置き、こそくと裏口から出て往ゆきました。後あとで皆々ほつと息を吐つき安心致し、尚なお荷主八右衛門に手当を致しますと、二日程経ちます中うちに大きに口もきけるようになりました。

番頭「やアお芽出とうございました」

八「どうもハア何とも始めて参り、斯ういう御厄介になろうとは心得やせん事で、併しかしお蔭さまで命には別条ねえで、大きに有難うがんした 国の方へは仔細を書いて二三日後にさんちおくれて帰ると書面を出しやんしたから、安心もしべいが、此方こちらで危ねえ事、金を取られようとしたが、多助どんとやらの意見で泥坊もたまげ、悄しおれ果

て、帰けえつたは偉えれえ奉公人だねえ、私わしたまげやした、年いまだ若わけいがねえ」

主人「誠に妙な奴で、時々変なことを申します」

八「兎も角も多助どんをお呼びなすつて下せえ、私わしもお目に懸かつて置おきていから」

善「多助やく、一ちよつと寸来な」

多「へい、なんでがんす」

八「やア多助どん、お前めえ実に感心な人だ、泥坊ぬいばに意見をするのを私わし傍わで聞いて居ゐやしたが、お前めえが此の泥坊ぬいばの馬鹿野郎ばかやろうと云うから、手向てむかいでもするかと心配しんぱいしていると、泥坊ぬいばが首傾くびかたげて、変な事をいう奴やつだアと云つて、たまげけえて帰けえつたが、誠に妙な人だ、お前めえの

お蔭で八十両の金子きんすウ取られねえで、誠に有ありがて難い」

と云いながら金子を紙に包み、

八「たんとではねえが、どうか此の二十両取って置いて呉われ、私江戸見物ちっ些と長くすれば、小遣になつてしまふのだが、余あんまり偉ええ奉公人で、襪ぼろ褌きを被きて炭を担いでる人には珍らしいから、どうかこれを取って置いてお呉あんなせえ」

多「宜しゆうございやす、入りやしねえ」

八「少しばかりだが、年季が明けて国けえへ歸かえる時の足たしにもなろうから取って置いてくれ」

善「有難い事で、大金だが折角おぼしめしの思召おぼしめしだから戴おいて置くがよからう」

多「有難うがんですが、私わしい金戴きますめえ」

八「そんな事を云わずに取つておけ」

多「何も貴方あなたに仕した事じゃねえから、私わし戴きやせん、此処うちな家の

旦那様には命い助けられ、大恩を受けた御主人様と大切に奉公し

て居りやす所へ、間違まちがえが出来やした故、家うちの事を家うちの奉公人がす

るのは当あたりめえ然ぜんでがんですから、どうか二十両という金を請取うけとる訳

はがんしねえから貰われやしねえ、駄目でござりやす」

善「折角仰しやる事だから戴いて置きなよ」

多「八右衛門様、あんた私わしに礼をしてえと云うが、主人へ義理に

斯う遣つてお出しなんすか、又眞実心から私わしに呉れべいとするか

え」

八「誠に困りやすが、何もサ見えも糸瓜へちまもない、唯お前めえの心持が

如何にも感心だから出すのだから、マア真実の心から上げるのだ」

多「そんなら何うか金で呉れねえで、お願ねがいが有りますが、叶かなえて

下せえやしようか」

八「私わしに出来る事なら叶えて遣りやしよう」

多「そんじやアいけねえ、慥たしかに叶えてやる、何でも聞くと返答

をぶちなさい」

善「そんな事をいう奴があるものか、併しかし八右衛門さん、此奴こいつの

事ですからさしたる事でも有りますまいから、どうぞ願ねがいを叶えて

やって下さいましな」

八「ようがんです、何でも叶えて遣りましょう」

多「あゝ有難ありがたえ……、此家こゝへ奉公して、外に何にも覚えたことはねえが、行く／＼十年も経ち、年季が明けて炭屋の店でも開くような事が有つたらば、其の時貴所方あんたがたから千両の荷を送つておくんなせい」

八「えゝ千両え、魂消たまげたねえ」

多「魂消ねえでも宜いい、唯貫うんじやがんせんが、あんたの方から千両だけの荷をマア先へ送つてくれゝば、私わしその荷を売りこなして、あんたの方へ金入かね工れるだ、金入かね工れゝば又荷送にいつて呉れる訳にするだから、あんたも仲間と得意先が一軒殖ふえ、私わしも儲けを見るだアから、お互に得の有る事だから、屹度きつと送つて下せえ」

八「よし其の時は屹度千両の荷を送つてやろう」

多「それじゃア若し荷送る事が間違つたら、千両の金を只遣ろう
という書付を一本下せえ」

八「これは面白い、書いて呉れべい」

と直ぐに硯箱を取寄せ、すらくと認め、店出しの折には必ず
千両の荷を送ろうという証文を書き、印形を捺して多助に渡す。

多助は大きに悦び、主人善右衛門に預け置きまして、八右衛門も
国元へ帰りました。是れから多助は主人大事と奉公をいたして居
りましたが、山口屋善右衛門方は毎度申上げまする通り、名に負
う大家の事でございますから、お大名様方にもお出入が沢山ござ
いまして、それが為めに奉公人も多人数召使い、又出方車力な
ども多分に河岸へ参りますゆえ、台所には始終膳が二十人前ぐら

いは出し放しばなになつて居り、出入のものが来ては食事を致します。多助は此の家に足掛いえけ四年の間奉公して居り、宝暦十三年の六月改元あつて、明和元年と相成り、其の年も暮れ、翌年明和二年十一月廿六日の事でございます。多助は毎日く炭を車に積み、青あおやましなんどのまちの青山あおやまいなばのかみ山信濃殿町の青山あおやまいなばのかみ因幡守様のお邸やしきへ往ゆきまするに、四谷へ来て押原おしはら横町よこちように車を待たせ置き、彼あすこ処から信濃殿町まで車力が炭を担いでまいります。此処に信濃守様のお邸がありましたから此の辺を信濃殿町と申しますので、多助は此の日大きに草くた臥びれました故、ちと遅く暮れかゝつた時分に帰つて参り、多「へい只今けえ帰りました」主「大分だいぶ遅かつたのう」

多「大きに遅くなりやんした」

善「何処へか寄り道でもしていたか」

多「もし旦那様お願いがございます、私^{わし}煤^{すす}掃^{はき}の時に頂戴した御

祝儀や、荷主様や出方の者から心附けをもらい貯めて、皆^{みんな}お預け

になつて居りやんすが、彼の金子をお足しなすつて、私^{わし}にどうぞ

二十両貸して下せえ」

善「あい廿両、それは貸しも仕ようが何^{なん}にするのだ」

多「少し訳がありやして買物がありやんすから、どうか貸して下

せえ」

善「買物があると云つて二十両と云えばお前の身^ちに取つては些と

多すぎるようだが、一体何^{なん}にするのだ、冗^{むだ}に遣^{つか}つてはいけないよ、

したが何も別に道楽もない男だから心配もあるまいが、何うしたもんだらうのう和平どん」

和「冗喰い一つしない堅い男ですが、二十両とは些と大金ですな、冗に遣つてはいかんぜ」

多「私冗なことには三文も遣いやしねい、天下のためなら遣いやす」

善「大きな事を云つて、何にするんだ」

多「左様なら旦那様申し上げますが、私毎日々々炭車に積んで青山へ往きやんすが、押原横町のお組屋敷へは車を曳込む

事が出来やしねえから、横町へ車を待たして置いて、彼所から七八町の長い間炭担いで往きやんすのだが、来年の二月頃までは霜

もどけ

解がして草鞋でも草履でもすべにつて歩けねえ、霜柱がハア一尺五

寸位もありやんして、其の霜解の中を歩いてまいり、歸りに水戸

様前ゆえの砂利の中へ入へいるもんだから草鞋も忽たちまちぶつ切れて、日に二

足位は入いつて誠むだに冗むだだアから、私わし思うに、押原横町から長安寺ちようあんじ

門前まで押原通りへずうツと残のこらずげんばいし玄蕃石えんぱんいしを二様ように並べて敷詰

めたら、誠まことに路が宜よろくなつて、皆みんなの仕合せだと思おもいやんすので、

石いし買いつて敷敷きていから金かね二十両お貸かしなすつて下せえ」

善「コウくお前も分わらねえ人間じゃアねえか、神田佐久間町の

ものが四谷の押原横町へ石を敷敷いて何なにうするのだ、入いらざる余計

な事ことじゃアねえか、殊ととに町内には組ぐ合あもあるし冗むだな事ことだ」

多「旦那様お言葉を返かえしては済すみませんが、貴方あんたのお考かんがえは些ちと

違おうと思いやんす、神田佐久間町と四谷の押原横町とは町内が違つて居るからと思召しては間違ひます、そりやア町内は違つて居りやんすが、押原横町の者も佐久間町を通る事もありやんすし、又神田の者も押原横町を通る事もあつて、天地の間の往来で世界の人の歩くための道かと私考^{わし}えます、江戸中の人ばかりじゃねえ、遠国近在の人も通るから石敷^{いし}いてあれば往来の人がどのくらい助かるか知んねえ、又此処^{うち}な家から毎日彼処^{あそこ}へ炭を送る時出方^{でけ}のものを五十人として、日に十足の草鞋を切るとした所が大い事だ、一足を十二文と積つても千足万足となれば何程になるか知んねえから、それよりは石を敷き詰めて置くと余程^{よっぽど}得でがんす、私聞^{わし}いて見たら百年は受合つて保つ^もといいやんした、極堅^{ごく}い幅^は広^{びろ}の

長い石が一枚五匁もんめだというから、十枚では五十匁もんめ、百枚で五百匁もんめだから、四百枚で二貫匁もんめ是だけでも敷けば百年ぐれえは持つて、草鞋の切れることもなく、貴方あんたのお得にもなり、天下の人が歩く度たびにどの位助かるか知んねえから、世界せけえの人のために石を敷きやんすので、決して四谷の押原横町と見て敷くのじやアねえ、矢張やっぱりお宅の前めえへ敷く心で居りやんす」

善「成程恐れいりました、感服だのう和平どん」

和「うっかり口出しは出来ませんア、此の間の藁草履の勘定で驚きましたよ、こりやア事に依よつたら得がついて返る事があるかも知れません」

善「二十両出して石を敷くのは宜いいが、お組屋敷で彼是いいやアし

ないか」

多「それも私が心配だから、彼処の手前の横町に石屋がありやすから、石を敷いて咎められやしねえかと聞いたら、傍にお筆筒町の鳶頭が立って居やんして、いうには、己がお組へ往つて届けて呉れようと、親切に石屋の親方と私と三人で一緒にめえり、お組屋敷のお頭に届けやんしたら、お頭も段々次第を聞き、大きに感心なことだ、往来の者の仕合で、決して咎めねえから早々と敷くが宜いと、実はお組のお頭も得心なせえやした事です」

善「早いもう、感心だ、そんなら早速金を持って往くがよい」

と金子を渡すと、多助は金を懐に入れ、提灯を携げて佐久間町の家を出て、聖堂前にかゝり、桜の馬場へ上つて参りました。只

今では彼の^あ辺も開けて佐藤先生の病院があり学校もありますが、
 其の頃は樹木^{じゆもく}が生茂り桜の馬場の^{あたり}辺はお邸^{やしき}ばかりで、とんと、
 日暮から往来するものもなく、時々^{おいはぎ}追剥などが出るくらい淋し
 い所へ、今多助が藁草履を穿き、すたく^やつて来る跡から、ピ
 タく冷飯草履を穿き、半合羽に小さいお太刀^{たち}を差し手拭^{ほうか}で
 被^むりをし、草履穿で、田舎^{こしら}帰りという拵^{こしら}えの男が、多助の傍へ
 寄り、

男「やい多助待て」

と声を掛けましたが、是は何者でございますか、次に申上げま
 しょう。

十五

多助のお話も大分長らく続き追々終いの方に相成りました。さて多助は道普請の金を持つて四谷の押原横町へ出かける途中で、呼掛けられましたゆえ立留つて、

多「はい、誰でがんす、誰方だえ」

と云いながら提灯の下から透して見ると、道連の小平でござい
ますゆえ恟り致し後へ退る。

小「やい多助、三年あとに手前よく己に赤恥をかゝせやがつ
たな」

多「汝まだ悪事が止まねえか」

小「止むも止まねえもあるものか、彼の時は手前てめえのために化ばけの皮を現あらわされ、立端たちばを失うつたから、悪事を止めて辛抱するとは云つたが、実は手前てめえを遺恨いこんに思おもつて附つけていたのだが、忙いそがしい身の上だから奥州おくへ小隠こかくれをしていた所が、又またづきが　　つ漸やっと江戸へ出て来て、通りかゝつた山口屋の前で、手前てめえが提灯ていとうを点つけて出かける時に、主人が金を持つてゐるから氣を注つけて往いけと云つたから、何でも手前てめえの懐ふところにたんまりあるだろうから出せ、金を強ふんだく奪はり裸体はだかにするのだ、殺ころしやアしねえが身体からだに疵きずを附つけて三年あとの意趣いきそを返かへすのだ、さ金を出せ」

多「仕様がねえ、性分しやうぶんとして汝われ悪事が止まねえか、己おのれがあれほどまで云つた意見をい用もちいねえで悪わるい事ことをするという心根こころねが如何にも

情ねえ、よこせたつて何うして此の金は遣られねえ、世界せけえの人の
 ために遣う大事でえじな金だ」

小「え、出しやアがれ」

と云いながら多助の胸ぐらを取り、力に任せて突き飛とばす。突か
 れて多助はひよろ／＼と横に倒れかゝりましたが、やつと踏こらみ堪
 えながら、

多「なににする、どうしても金は遣られねえ、誰か来て呉れ／＼」

と呶鳴るにも構わず小平は拳を固めて力まかせに打落せば、提
 灯は地に落ちて燃え上り、小平は多助を捻ねじ倒し、乗りかゝつて
 続け打にする。此の時に多助が盗どろぼう賊とか何なんとか云えばよいの

に、唯痛い〜と云つて居ります。痛いには違いないが、誰も助ける人はありません。多助は金を奪られまいと挑み争う。

小「此こいつ奴こぢから小力があるな」

と云いながら懐中からどす匕首どすを取出し、さア出せ、出さなければ

殺すぞ。と刃物を目先へ突付ける時、小平のうしろほう後の方に立つたる一

人の侍が、突然に小平の利腕を取つて逆さに捻じ上げ、エイの掛

声諸共に投げ付けますと、前なるお茶の水の二番河岸へさか逆とん

ぼを打ち、ごろ〜〜どぶんとおちい陥りましたゆえ、多助は地獄で

仏に逢つた心持で、

多「危ねい所をお救い下さいやして、何処のお人だか有難うがんした、あゝい痛い、頭が割れる程打たれた、丁度二十七打ぶ打ちやんし

た」

侍「打ぶたれながら勘定をして居るものがあるものか、貴様は何処のものだ」

多「はい、私わしは佐久間町の山口屋善右衛門の手代多助と申しやんすが、仔細あつて今夜四谷へ往いく道で、道連の小平という泥坊に逢いやしたが、三年あと私わしが意見をしたのを遺恨に思つて、私わしを殺すべいとする所を、お蔭様で命が助かり、誠に有難うがんです」

侍「なに多助とな、左様か」

と云いながら彼かの侍は宗十郎頭巾を被つたまゝで、後うしろに提灯を提げて立つて居ります御家来を見返つて、

侍「これ吉次きちじ、少々明神下に買物があるから、遅くなるかも知れ

んから先へ歸つて、且那様は後あとから直すぐに歸ると御新造ごしんぞにそう云え」

吉「へい、それではお提灯を置いてまいりましょうか」

侍「まア却かえつて燈あかりのない方が宜しいから持つて往ゆけ」

吉「へい、左様ならお先へ参ります」

多「おいお供さん、大きに有難かたじけうがんした」

と云う間まに早や家来は急いそぎ駈かけ下ります。跡を見送つてお侍が宗

十郎頭巾を取つて首へ巻き、

侍「これ多助、誠に懐かしかつたなア」

多「へい貴方あんたは何方どなたでがんです」

侍「三ヶ年前其方そちが屋敷へ参つた時は、義理あればこそ親子と名な

告^のらず、つれなく其^{そち}方を歸した後^{あと}で、母が愚痴ばかり申し泣いてばかり居^ゐつたが、皆手前の為^{ため}を思い、態^{わざ}と厳しく云^いつて歸したが、八^や歳^つの時に別れたゆえ碌々顔形も分らないがな、其^{そち}方の實の親の鹽原角右衛門であるぞ」

多「え、お父^{とつさま}様か、あ、逢^あいとうござりやした」

と云いながら泣出し、袴に取付き、

多「もし、三年あと、お邸^{やしき}にまいった時に、貴方^{あんた}が己^{おら}ア實の子じやアない、全く百姓角右衛門の子だが、同じ名前の義理で汝^{われ}を育てたのだ、自分の子ではねえと縁切つて向^むへ遣^こつた義理合を立つて仰しやりやんしたから、お顔をも見^けえずに歸^えりやしたが、彼^あの時^{とき}の御意見が身に染み渡つて、山口屋に只今まで辛いのを忍んで奉

公して居やんす、私決して悪さして国出たわけではがんせん、後
で細かにお話をいたしやすが、申せば却つて御苦勞を掛けようと
思い、詳しいお話を致しやせんだったが、只川一筋向のお屋敷に
両親がありながらお顔を見る事もならず、何うしておいでなさる
か、達者で御奉公なさるかと人の噂を聞いては悦んで居りやんす
が、あんたも追々取るお年、病み煩いのねえ其の中に一遍お顔が
見てえと思ひまして、信心して居りやした、どうぞ私国へ帰り、
家を立てるまでお達者でおいでなすつて下さるようになと思つて
願ひが届いて、汝が実親の角右衛門だと仰しやつて下せえまし
て、私何より嬉しく有難うございやす」
角「此の方に於ても実に悦ばしい、段々様子を聞けば、山口屋善

右衛門方かたへ忠義を尽し、実体じつていにして居おる由、誠に感服なるぞ、
 屋敷内うちでも其方そちの評判が宜しいから蔭ながら悦んでいた、又沼田
 の角右衛門の分家太左衛門と申すものより書面が来た所、何か後
 妻の悪心よりと、其方そちの妻さいの心得違いいより多助は家出を致せし後あと
 にて、家は潰れ、多助には聊いさかも悪い所はないという事が知れた
 ゆえ、能よく々な仔細くもあろうと常に其方そちの噂ばかりして居つた、
 何うか身体を大事に奉公して国へ帰り、立派に鹽原の家いえを立てろ
 よ」

多「はい、家いえを立てゝえと思**う**ばかりに此様こんな難儀を致すの
 でがんですが、お父様とっさまに此処でお目に懸ろうとは実に思**い**やせん
 でした、有難い事だな、提灯を持って往つてしま**い**やしたから、

お顔が見られねいから、何処か明るい所へ往つてお顔を宜く見てえもんでがんす」

角「左様なら、それまで同道してまいろう」

多「お屋敷までお供して往き、お母様にももう一遍お目に懸りていもんです」

角「いや／＼また逢う時節も有ろう、夜中金などを持って外へ出るな、山口屋善右衛門の宅まで送つてやろう」

多「身分が違うから仕様がねえが、貴方でもお母様でも加減の悪いような事もなかんべいが、若し有つたらば山口屋の手代多助と云つて呼びに遣して、私逢わしておくんなせいよ」

角「おゝ宜しい、其の燃えた提灯を拾いな、さア同道致そう」

と一方は戸田様の御家来にて三百石取りの身柄のお方が、見る影もない炭屋の男を送ると云うも親身の父子、多助は嬉し涙に暮れながら山口屋まで送られて帰りました。是から四谷の押原横町へ石を敷詰めて、道普請を致しますお話ですが、其の石は明治四五年の頃まで残って居りまして、只今でも彼の横町の溝の縁に石片や何かゞ積んで有りますが、玄蕃石の余程厚いもので、側面に山口屋善右衛門手代鹽原多助と彫り附けて有りますわたくしたしるを私も慥かに見ました。正のお話でありますが、細々しい所は面白味が薄うございますから申上げませんが、多助も山口屋方へ奉公中追々金を蓄め、国の家を立てたいという精神を貫きましよいえうとするうち、月日の経つのは早いもので、十一年が其の間奉公

に陰かげひなた陽ひなたなく、実に身を粉こに砕くだいての働き、子ねに臥ふし寅ふに起き、

一寸いっすんの間まも油断せず身体を苦しめ、身を惜まらず働きます。十一

年目は丁度明和八年で、其の年の七月の盆は御案内の通りお商あきん

人衆どしゆうは掛けりなどお忙がしいものでございりますが、段々月

末に相成りますると大概用も片付きました。多助は今年三十一歳、

山口屋善右衛門は五十三歳と相成り、主しゆう従ひたし親みの深い事他たに

勝すぐれ、善き心掛けの人ばかり寄りまするとは実に結構な事で。

善「多助やく、ちよつと此処へ来な」

多「ヒエ、お呼よびなせいやしたか」

善「家うちのお内儀かみさんとも話をして居るんだが、お前もまア家うちへ来

てから最もう十一年になるが、月日の経つのは早いもんだのう」

多「はい、早いもんでがんすなア」

善「お前も十年の年季は勤め、礼奉公を三年勤めようと云つて骨を折つて呉れるお蔭で、身代の助けになつた事も毎度あるんだが、最^もう奉公も十分だから、こゝらで国へ歸つて、日頃望みの国^{いえ}の家を立てたら宜かろうと思う、それにお前も隠して居るから私^{わし}も聞きもしなかつたが、一体お前の国は何処だえ」

多「はい、誠に有難うがんす、只今まではお尋ねが有りましたも、国^{うち}の家の事^{わし}や私の身の上を申しやせんでしたが、もう年季通り勤め上げ、お暇^{いとま}が出て国^{けえ}へ歸るのも近いこんだから、お隠し申しやせんが、実は上州利根郡沼田^{ごおり}下新田という所の百姓、鹽原角右衛門の忰多助と申す者でがんす」

善「ふん、下新田と云うのは、それは大分だいぶん、なんだナア山の中の様子だのう」

多「はい左様でがんですが、私種わしいろく々申すに申されやせん間違まちげえが有つて、国の家いえが潰れかゝりやんしたから、辛つれえのを忍んで居りましたが、母や女房こころえちげが心得違こころえちげえの者で、私わしをマア殺すべいとまでに悪わる企たくみをされやしたから、私わしも殺されては国の家いえを立てる訳にもいけねえから、私わし出れば潰れるとは思しいやしたが、江戸へ参めえつて奉公をし、金を蓄ため国へ帰けえつて家いえを立てよう、命有つての物種だ、跡あと方かたは潰れてもそれまでと思しいきり、国の家いえを出て江戸へめえりやしたが、頼るものはなく、仕様がなくなつて、忘れもしません十一年あとの八月二十日の晩に昌平橋から身い投げしようとす

る所を旦那様に助けられ、御当家へ参り、長い間御厚恩を戴き、お蔭さまで炭の事から、書けもしねえ手も帳面ぐれえは附けられ、算盤も教えて下さり、実に旦那様の御高恩は海よりも深く、山よりも高く、死んでも多助は忘れやせん」

善「あいゝ誠に其の志が如何にも感心だのう」

妻「ほんとうに感心だねえ、だから旦那様が毎もお前を誉めて、

あの多助の志は別段だと云つてさア、それに入りのものや店のものまで皆な誉めて居るよ、私や旦那様が誉めると他の奉公人は嫉み^{ねた}が有つて悪く云うものだが、お前計りは誰も悪く云わないのは全く不断の心掛けが良いのだと、旦那様と自慢してお話をして居るんだよ」

多「旦那様へお預け申したものは何の位どくれえになりやした」

善「預つたものか、あいよ、和平や、鳥渡帳面ちよつとを持って此処へ来な、あい〜」

と帳面を受取り、繰返し見ながら、

善「多助、お前は給金なしに奉公をして呉れ、拾つた物を売り、

預けた金に追々利が増して百四十二両と二貫文となつたが大きな

ものだのう、それからお前が国へ歸るのに私わたしも何ぞ骨折の礼をし

なくつちやアならないが多分の事も出来ないが、百両やる積りだ、

それから悴しみが十両、お内儀かみさんが十両、番頭ばんとうが千疋びき、店の者中で

千疋、車しやりき力ちから鳶とびの物ものの出方でかたじゆう中残ちゆうざんらずで五両、其の外荷主様に戴

いた御祝儀、煤掃すすはき歳暮お年玉何や彼かや残ざんらず帳面に付けてある

処を番頭に寄せてもらつたら、丁度三百両になるが、微塵も積れば山だのう」

多「大く蓄りてかやしたなア、そうは蓄るめえと思ひやしたが、えれえもんでがんす」

善「此の金を以て国の家いえを立て、極りが附いたら、今まで長い間心易くしたものだから、年に二度ぐらいつつ江戸へ出て来る訳にはいくまいか」

多「はい、国の家いえを立てれば二度でも三度でも旦那様のお顔も見てえから出てめえりやすが、私家わしうちは国でも三百石の田地持で、山もえらく持つて居りやんしたが、母かさまの心得違でんぱいから山林田た畠たは人手に渡り、家いえは焼けてしまつて無ねえのですから、国へ歸

り家を建て、田地を買い戻し、馬の二頭も買うには三百兩では足りねえようでがんす、それだけ蓄つた金ではあるし、それに国で稼いでは百が錢を儲けるにも大騒ぎだから、最う些とべい此の江戸で稼いで見たいと思いやすが何うでがんしよう」

善「何ういう稼ぎをして見る積りだのう」

多「はい、私別に覺えた商売もねえが、長い間此の家に御厄

介になつて居りましたから炭の事は少しべい覺えやんした、炭よ

り外に何も知りやせんから炭屋を始めて見てえと思いやんす、就

きやして私此間お使の歸りに、本所相生町を通ると、其処に誠

に好い明店が有つて、間口が三間半、奥行六間で小さい穴蔵が

一つ有りやんして、前の河岸附に小さい河岸納屋が有りやすから、

炭の荷を揚げるにも極都合ごくごうの好い事で、それから直段ねだんを聞いて見たら二十五両だと申しやすが、尤も畳建具残らずで、竈へつついはありやせんが、それは後あとで買つても好いが、二十両位にぶんねぎつて買おうと思ひやすが、どうでがんしよう」

善「至極宜かろう、独りでやつきとやれば又それだけの事は有りましょう、炭は己の方から送るから仔細はないが、此の金を資本もとでにして始めるが宜よい」

多「其の金は貴方あなたに悉皆みな預けて置き、私独わしりで稼わぎ出しやす、どうか此の金を月々幾許いくくという細くも利を産み出すよう一つ御工夫なすつて下さいやし、其の内二十両だけお借り申して家いえを買つて始める積りでございます」

善「それは宜よいが、二十両で家いえを買つてしまつてはマア炭や何かを買出すにいけないが、それは何うする積りだな」

多「買出さねえでも炭はハアえらく有りやす」

善「何処どこに有るんだ」

多「へい、私わし十年の間粉炭こなずみを拾い集め、明き俵へむやみに詰め

込んで、拝借致しやした大い明き納屋おおきへ沢山打積えらくぶつんで有りやすか

ら、あれで大概たいげえ宜かんべいと思つて居りやす」

善「拾い集めた炭じやア仕方があるまい、粉計ぼかりだろう」

多「へい、粉炭でがんす」

善「其そん様な物を買人かいてがあるか」

多「有りやんすとも、貧乏人には一俵買は不自由な訳で、中々一

俵は買えねえもんでがんすから、冬季ふゆきなどは困つてきんたまひばち火鉢の中へ消炭けしずみなどを入れ、ブウ／＼と吹いて震えながら一ひとばん夜明かすものが多い世の中で、裏うらだな店や何かで難儀して居て一俵買が出
 来ねえで困つて居るものが有りやんすから、其そん様な人に味噌みそこし漉ひに一杯ぺい、高いか知りやせんが、七文か九文に売りやんせばでか大きく益になり、買う人も寒さを凌しのげるから助かりやすゆえ、是を始めたら
 屹度繁昌しべいと思いやす」
 善「是は感心、うまい考えだ、成程宜よつほどかろう、何か粉炭ばかり売
 るも宜しいが、余程貯よつほどつたかえ、直ぐに売り切れるようでは
 かんがどうだえ」

多「へい勘定をしやしたら七百二十俵べい貯りました」

善「なに、七百二十俵だと、えらいものだなア」

多「へえ、年にどんな事をしても七十俵ぐらいは貯る勘定になつて居りやんすなア」

善「ふん、そんなに粉が出るかのう」

多「^{すた}「廢るものだが、斯うして有れば売れやすが、あれで始めれば沢山^{たんと}お借り申しても二十五両でやる積りでござりやす」

善「始めろく」

多「そんなら金をお貸しなすつて下さい、家^{うち}を買つて来やすから」

と主人より二十五両の金子を借り受け、直^{すぐ}に本所にまいり、彼^かの家^{いえ}を買い取り、樽代を払い、近辺へ店^{たな}振舞^{ふるまい}を致し、其^{そこ}処^こに住み込み、粉炭の俵を前の納屋に運び入れ、これから毎日^か彼の粉炭

を籠に入れ、味噌漉を中に置き担ぎ歩きながら、

多「計り炭はようがんすか、計り炭はようがんすか、味噌漉に一杯ぺい五文と七文でがんす」

と云うのでございますが、この時分には計り炭を売るものがないから珍らしくもあり、一俵買いの出来ない人々は便利な事でございますから一いちにん人買ににんい、十人百人と好よいことは忽たちまちに広まり、彼あすこ処此処で計り炭屋々々というように相成りました。それから昼間売り歩き帰つてまいり、夜分は又門口に大きな高張たかはりを立て、筆太に元祖計り炭鹽原多助と記し、轡くつわの紋を付け、店で計り炭を売りますと、裏うらだな店のおかみさん達が前掛の下に味噌漉を隠し、一杯お呉れというので大層商いがございます。八月の十

五夜から引続き十一月まで追々繁昌致して居りました。すると其の隣りに明き樽買いの岩田屋久八と申し、此の人は年三十九歳になる独身ひとりもので稼ぎ人でございます。多助も稼ぎ人なれば互に睦まじく、毎日休む処が極つて居ります。それは四つ目の藤野屋ふじのやも左衛門くゞえもんと申してお駕籠御用達しで、名字帯刀御免ぶげんの分限ぶんげんでござります。其の藤野屋の裏手の板塀いっぺいに差掛け葎よしずつぱり簧張はるばりを出すつんばば 龔こん婆あさんの店あがあります。春は団子だんごなどを置き、平常ふだんはするめの足あしか茹玉子あじろぐらいならを列ならべ、玉子たまごはない事が多いが、塩煎餅しんせんは自分で拵こしらえますから何時でもあります。其の外駄菓子よはお市、微塵棒みじんぼう、達磨だまら、狸りの糞ふんなどで、耳は遠いがお世辞よこしまの宜よい婆おばさまでございます。婆「おやお早うございますねえ、何時でもお噂ばかりして居ます

よ、どうも炭屋さんと樽屋さんは毎日期限違たがわず入いらつしやると申してねえ、まことに稼いぐお方は違ちがつたものですねえ、今日はいつもよりお早いようです、まアお茶を一つ」

と差出すを受取り、

多「久八さんはもう来そうなものだなア、来たく、久八さん今日は負けたんべいと思つたが、矢張やっぱり己おれが早かつた」

久「やア多助さんか、今日ばかりは私わしが先まきだと思つたのだが、負けやした、私わしは粗そつ々つかしいから宜く物を忘れるのだよ、今日も樽うちを買かつた家うちへ手拭てぬぐいを忘れたものだから取りに返り、遅くなつたのだよ、婆おばあさんお茶を一杯お呉れ」

婆「お天氣が宜く続きます、毎度あなた方のお噂ばかりいたして

居りますよ、此の塩梅あんべいではお天気も続きましよう、どうも春にならなければお団子も売れませんよ」

久「聾だからあんな事を云つてる、お茶を一杯おくれ」

婆「はい、これは気が付きませんでした」

と云いながら汲んで出すを久八は受取り、

久「多助さん、いゝ商しょうべい売うを始めたなア」

多「まア仕合せな事でお得意先が日にちく々増えるばかりさ」

久「好いい事を考えた、これは別だよ、誉める人もあり、中には悪くいう人もあるが、何しろ考えがうまいねえ」

多「あんたも折角樽を買つてお歩きなさい」

久「だがねえ多助さん、こうやって刺さし子の筒袖ツッコを着、膝の抜け

た半股引を穿き、三尺帯に草鞋がけ、天秤棒を担いで歩くのだが、末には立派な旦那といわれるようにお互にならないでは填うまらない、旨い物は喰わず、面白いものは見ず、こうやって居るんだものを、まア一生懸命に十年の間稼いだら滅法に金が貯たまろうと思うが、多助さんは幾許貯める積りだね」

多「私わしは金蓄かねためる積りは有りやせん」

久「そんなら何だつて稼ぐのだ」

多「そりやア稼げば金かねが蓄たまるが、金かねを蓄めるような心じやア駄目だ、私わしア蓄らないようにする積りだ、なんでも金蓄かね工めて油断をしてはなりやせん、これ金宜かねく聞かけ、己おらア見ろ、雪が降つても風が吹いても草鞋穿きになつて寐ねる目も寝ねずに稼いでいるに、汝われは何

だ、錢箱の中へ入つて、楽をしようたつて、そう旨くはいかねえ、稼いで来う稼いで来うと金の尻つぺたを打つと、痛いもんだからピヨコ／＼出て往つて稼いで帰り、疲れたからどうぞ置いておくんなさいと云つても、己アこうやつて稼いでいるに、汝そんな弱い根性を出しては駄目だ、稼いで来うといつて又尻ぺたを打つと、痛いから又びよ／＼飛出しては稼いで来る、終えには金が疲れ最う働らけねえから何うか置いておくんなさい、最う何処へも往きません、貴方の傍は離れませんかと云うから、そんなら置いて遣るべいという、これが本当に天然自然に貯る金と云うものだよ」

久「フ、ン始めて聞いた、金の尻ぺたを打叩くつて、これは妙

だのう、そうだが多助さん段々金が貯つて来ると使わなくっちゃ
ならない事が出来てくるぜ、交際つきあいで否いやでも応おうでも旨い物を喰い、
好いいい衣服きものを着なければならぬように成つてくるよ」
多「私わし中々そうはさせねえな、着物が私わしが身に付こうとすると、
飛んでもねえ着物だと云つて寄付よせつけず、又旨い物だつて己おらア口へ
入へいろうとしても、そんな汚けがれた物は己おらが口へ入れられねえと云つ
て寄付よせつけねえで打叩ぶつたくからそうすると喰くいもの物も段々に疲れて来て、
そんな事を云わずに何うか少しべい喰つてお呉んなせいといい、
着る物も貴方あんたの傍を離れねえから、何うか着てくんろと己おらア身体
へ附くつ着いて離れねえというから、そんなら着てやろう、喰つてや
ろうと云うのだ、これは求めずして天より授かる衣食というもの

よ

久「へい成程考えたねえ、旨い考えだなア、フーン」

多「お前は明樽めえ あきだるかい買よ、私は計り炭屋わしさ、お前は精出まえして明樽を

買おれい、己は又なんでも構わずせつせと計り炭を売る、これが天地

への奉公よ、計り炭屋は計り炭屋、明樽買は明樽買、お侍はお侍、

大尽は大尽、旦那様は旦那様、これは皆其の人の徳不徳にあるの

だから、何でも構わずそれだけの稼うぎをせつせと遣うるがようがん

す、金を貯る心を起してはいけねえ、何でも貯めねえよう、家うちに

は寄せ付けねえように働かせ、己貧乏おらアだなんという心を廢よしにして

しまつて、唯無茶苦茶に天地へ奉公をして居さえすれば、天運で

自然と金が出来、天がそれだけの樂をさせてくれるから、何でも

よこしま
 邪な心を起し、一時にでかく儲けべいと思つて人の物を貪るよう
 な事をしちやアいけねえ、随分大い投機を工んでやれば金が出来
 べいが、其の金は何うしても身に附いてはいねえ、若し其の身に
 附いて、も其の子の代には屹度消える訳のもので、火事盗難とい
 う物が有るから、どんな大い身 上でも続いて十度も火難に出
 逢い、建る度に蔵までも焼いたら堪るものじやなかるう、だから
 何うしても無理に貪ると又無理に出て往く訳だから、無理のない
 様に金は働かせ、遊ばせねえようにするのが肝心だよ」
 久「成程多助さん、そこへ考えが附かなかつたから、斯うやつて
 齷齪辛いのも厭わないで稼ぐのは、今に立派な旦那になろうと
 思うからだが、能くなるのも悪くなるのも皆其の人の徳不徳で、

明樽買は明樽買かねえ」

多「立派の旦那様にならねいでも、正直にして天地の道に欠けねえ行いをして居れば、誰にも愧はじる所はねえから、何も構つた所はねえ」

久「恐入つたねえ、成程えれえもんだ、これからは金の尻しりツぺたを打ぶつたくとしようよ、毎日此処へ休みながらお前のみんないう話が皆みんなになるよ、あの先せん達だつてちよつと聞いたが、神田の方ではお前の樽が高いよ」

多「なに誉められたつて油断は出来ねえ、悪く云われようが善よく云われようが此方こつちでさえ間違まちげえをしなければ恥る所はねえから安心みんなだ、皆天地への奉公、死ぬまで骨折つてやりやしよう」

と茶を喫みながら四方山よもやまの話をして居りますも、自らおのずかに経済法が正しく、儉約の道にかな適つて居ります。樽屋の久八も根が正直な人故肝ゆきもに銘じて感心をいたし、兩人で長話をして居ります処へ、年頃四十八九にもなろうかと思ふ女乞食が、にわかめくら俄盲と見えて感が悪く、細竹の杖を突き、十歳とおばかりの男の子に手を引かれながら、よぼ／＼して遣つてまいり、ぼろ／＼した荒布あらめのような衣服きものを着、肩は裂け袖は断切ちぎれ、恐しい形なりをして居ります。子供は菫よ簧しず張っぱりに並べてある大福餅を見付け、腹へが空つたと見え、子「お母つかああの大福餅を買つておくれなえ、」母「そんな事を云つてもお前せお銭ぜが有りません、何を、大きいのを、そりやアとて迎も買えやアしねえ、こゝに三文しかないから三文

だけお菓子を売ってお貰い、もしお願いでございませうが、小僧が
お腹なかが空すきました、お店の大福を見て喰たべたいと申しますが、三
文しかございませうが、これで一つおまけなすつて売つて下さい
ませうか」

久「おい、お婆さん、小僧がお腹なかが減つたから大福を売つてくれ
ろと云つてるぜ、負けてやんねえよ」

婆「誠に好いいお天気で」

久「あれ仕様がねえなア、乞食が大福餅をまけてくれると云つて
るんだ、銭ぜにが足りねえというから負けてやんなよ」

婆「はい、ナニ負けてくれる、持つていきな、負けてやるよ、あゝ
無闇に手を出してはいけない、さ、まけてやるから焼過ぎて堅く

なつたのを持って往きな」

母「有難うぞんじます」

と云いながら大福餅を受取り子供にやる。子供はがつくして喰べているのを、多助は其の母の姿を見て悔り致しましたが、此の乞食母子は何者でございましょうか、次回までお預りに致しましょう。

十六

多助が彼の葭簀張で盲目の乞食を見て悔りしましたは、十一年前沼田の下新田で別れた一旦自分の母親になりし実の叔母おか

めにて、沼田の家も此の毒婦のために潰れたのでございますから、
 多助は心の内に、あゝ叔母御も心がらとはいいながら盲目乞食と
 まで成り下るとは、皆天罰と思えども、傍を見ると樽屋の久八が
 居りますから声も掛けられず、何か心に思案を定めまして、
 多「久八さん私少し用が有りやすから、誠にお気の毒だが何うか
 一足お先へ往つておくんなせえな、直に後から出かけやす」
 久「ハア、そんなら先へ往きましよう、おやゝこゝの所は三軒
 ながら明き店になつた、こういう日あたりのいゝ所が明いては困
 るねえ」

と云いながら荷を担ぎ、

久「明き店はございゝ」

多「おい久八さん明あきだるじやアねえか」

久「そうだった、粗そつ忽つかしいから仕方がねえ、明樽はござい〜」

と流して往ゆく後ろ影を見送って、多助は右の穢きたないおかめの手を取って、

多「叔母さん此こ処けえ掛けなよ」

母「はい、何方どなたさま様でございますか有難うぞんじます、俄盲目で

感が悪うございまして難渋致します」

多「まア此こ処けえかけなよ、子供も掛けな、叔母さん貴方あんたはまア何

うして此こんな様に零落おちぶれたよ」

かめ「はい何方どなたさまでございますか」

多「十一年あと沼田で別れた貴方あんたの甥の多助でがんすよ」

といわれて、おかめは顔色変え、

かめ「え、多助どのか、面目ないくくく」

と云いながら思わず識しらず縁台から下へ落ち、大地に両手を突いてパラくくくと涙を流しまするを見て、

多「叔母さん、面目ねえという事が分りましたかえ、情ねえ、あなたもマア元は八百石取のお侍いえの家に生れ、お嬢さまとも云われた身が、若い時分から心掛けが悪く若侍と不義をし家を駆出し、

縁あつて子供が出来たが、其の男が死んだ後、縁とは云いながら私わしが八歳の時に貰やつわれて往つた養父鹽原角右衛門様の後添となり、

仮にも一旦親子となる中うちに、父とつさま様が不凶江戸から連れて戻つた

お前の実の娘おえいを、父ちすじ様が血統いとこの従兄弟同志ゆえ夫婦にした

ら睦ましかろう、此こ様な芽出てい事はねえつて、死ぬる臨終いまわに枕
 元でおえいと婚礼の盃をしたに、貴方あんたは死んだ父様のお遺言を忘
 れ、四十に近い身を持ちながら、原丹治と密通をするのみならず、
 私わしという亭主のあるおえいを勧め、丹治の忰丹三郎と密通をさせ、
 実に畜生とも何とも云いようのない行いではがんせんかえ、あの
 時に私わしがこれを荒立てれば血で血を洗うようなもの、詰り家の恥
 になりやすから、鹽原の家名きずに疵きずを附けめえと思ひ、堪こえてい
 と、二十歳はたちにもなるものを小僧子こぞうこのように使ひし、それで私わし
 虫を堪えて居りやんしたが、終しめえに殺すべいとすから、私家わしい出を
 すれば其の跡へ原丹治親子が乗込んで来て、鹽原の家は潰れてし
 まうのは知つては居いれど、命さえあれば江戸で奉公をして金を貯

め、国へ歸けえつて来て又家を立たてる工夫もあるべいと思ひ、辛つれえのを忍しのび国を出る時に纒わすかに六百の錢を持つて来たが、途中で悪者にであ出遇であい、難行苦行して漸だく江戸へ着いた所が、頼る所もねえので身み投なげて死しのうかと思ふ所を助けられ、其の人の家うちに十一年の間奉公をして、漸よう々人になりやした。只今では担かまどぎ商たていとは云いながら、何うやら斯うやら小せい家うちを一軒持ち、竈かまどを立たてる身になりやしたから、これから稼あいで金を貯め、国へ歸けえり、鹽原の家いえを立たてる積りでがんですが、貴方あんたのまア其の形なりはなんだえ、それから私わしい宜よろく知らないが、国の家いえは焼けてしまつたつて、あんたはマアどういふ訳で乞食になんなすつたえ」

かめ「はい、面目次第もございませぬ、お前に又此処で逢うの

も皆みんなな天の罰でございます、お前がいう通り血統ちすじの甥を私の子に
 して娘を妻めあわせ、何一つ不足のない身の上となつたのに、思案の
 外ほかのいたずらとは云いながら、年甲斐もなく原丹治と密通をいた
 し、お前を虐いじり出した跡で丹三郎をおえいの養子に入れたのも、
 名主と話合ひの上、村方で誰一人非の打ち人てのないようにして婚
 礼をさせようとする処へ、分家の太左衛門が聞附けて来て大變に
 立腹はらだし、掛合を始め、大間違が出来、丹三郎は若氣の至りで腹
 立ちのまゝ五八を切殺し、太左衛門も斬つてしまふと云つて追掛
 けて往ゆくと、飼馬が馬小屋から飛出して丹三郎に噛み付き、おえ
 いも丹三郎の様子を案じて其処そこへ往ゆく所を馬が噛み付き、兩人と
 も馬に噛かみ殺ころされ、お前の鬻かたきを馬が討つたようなもので、今考え

れば天罰とは云いながら怖しい事だと思つて居ります、すると太
 左衛門が逃げて触れたと見えて、村方の百姓が大勢集り、私達を
 打殺せぶちころと騒ぎ立て、垣の周圍まわりを取巻れた時は、仕方がな
 いから有ありがね金を小包にして身支度をし、おえいと丹三郎の死骸を
 藁小屋に投込んで火を放つけ、漸々よう／＼裏手から落延びまして、四万しま
 の山口村へ身を匿かくして居ますと、因果と懐妊いたしてねえ、其の
 翌年よくとしの九月産み落したのは此処に居ります此の四萬太郎しまたろうとい
 う倅で、これはお前とは敵同士の原丹治の子でございませう、それ
 から故郷忘ぼうし難がたしとは宜く云つたもので、最もう一度江戸を見たい
 と思ひ、お尋ね者の身の上だが、丹治殿と私は、生れ落ちてまだ
 間のない乳児ちのみを抱えて山口を立ち、江戸をさして来る道の横堀村

で、又旅のおかくばいあ婆に出遇い、其の家に泊つたのが運の尽き、道
 連れの小平という悪者が丹治を斬殺きりころしました、尤も丹治もおか
 く婆と同類の仁助とを殺しましたから、其の隙ひまに私は死物狂い、
 どうかして落延びようと思いましたが、小平のために吾妻川あがつまがわの
 深い所に蹴落けおとされ、既に私も此の子も助かりようのない所へ北きたむ
 牧村くむらの百姓清左衛門せいざえもんという人が通りかゝり、助けてくれました
 所、縁あつて其の家いえにずる／＼べつたり、連れ子をして後添にな
 つて居ますうちに、清左衛門は三年あと亡なりましたゆえ、其の
 悴きりゆうが桐生から帰つて来ました所、私の心掛よんどころけが悪い所から遂に
 離縁となり、此の子と一緒に追よんどころい出され、抛よんどころなくまた四万の山口
 へまいり、実は湯場の賄まかない女をして居ますと、一昨おとし年からの眼病

で、去年の暮あたりからばつたりと見えなくなり、感が悪いもの
ですから賄い処じやありませんゆえ、出て往けくと虐められま
しても泣き附いて居りましたが、仕方がありませんから此の子を
連れ、此の七月下旬から江戸へ出て来ます道々も、乞食をしなが
らの事ゆえ道も抄取らず、野州路へ 漸々の事で江戸へ来ま
したも万ひよつと一したらお姉あねえさま様にお目にかゝる事もあろうかと思
い参りましたが、一昨日おとといから何も喰たべず、私は厭いといませんが此の
子が如何にも不憫でございませぬ、私は心からでございませぬが、親
の因果が子に報い、何なんにも知らぬ此の子が如何にも不憫でござい
ます、見る影もない此こ様な形なりでお前さんに逢い、実に面目次第も
ない事で、斯ういう身の上になりますのも多助さん、皆みんなお前の罰

だ、私は今始めて気が附きました、目が覚めました、面目ない、何うぞ堪忍しておくんなさい、許しておくんなさいよう」

多「お前めえまア許してくれ堪忍してくれと云うが、物の理合りあいを宜く考えて見なせい、人と云うものは息ある物の長つかさと云つて、此の位くれえな自由自在な働きをするものはねえのだ、向うへ往ゆきてえと思えば自然むこうと向へ歩いて往いかれ、寝たけりや横になり、喰いたけりや茶碗と箸を持って飯まんまをかつこむように拵そなわえてあつて、肩があるから着、口があるから喰うように具そなわっている人の体だから、只能よく働いて天道に欠けず、骨折つてさえ居れば自然に喰たべられるようになつてあるのだから、喰くえねえ着られねえという事はねえ筈だが、そこがそれ情慾に迷つて、思う儘欲しいまゝに貪り、憎いの

可愛いかあいの、嫉みねただの猜みそねだの、詐りいつわ僻みひがなどと仇あだならぬ人を仇に
して、末には我から我身を捨てるような事になり、路頭に迷う人
も世間には夥いけえことあるが、仮令たと一遍悪い事をしたつて改心する
時は直すぐに善人だから、あんた全く私わしが罰だった、私わしに済まないとい
心附いたらば助けて上げやしよう、だが死んだ親父の位牌いへいに対し
ても済まねえから、家の鬩うちしきを跨またがせることは出来ねえ義理だから、
裏あきだの明店あきだへ入れて置き、食物くいものだけは日にち々送くつてくれべい、そ
れから此の子が最もう些ちつと訳が分るようになったら、己おらア家うちに引取
り、真しんの他人と思ひ奉公に置いて、算盤や手習ぐらいは私わしが仕込
んで、喰い方の附くように工夫してやんべいが、貴方あんた私わしを甥わしだの
前の忤わがだのという心を出しては済まないよ、叔母とも甥わしとも思わ

ず真の他人と思つて居なければ、国の亡父おやじのお位牌いへいに対して濟まないよ、えゝかえ」

かめ「それじゃア敵かたきどうし同士の此の丹治の子をお前は得心の上で目を掛けて育てゝおくんなさるか、誠に有難う存じます、どうぞ助けておくんなさい」

と両手を合せ、多助に向い神か仏のように只ひたすら管くだ拝かみまするを見て、

多「そんなに心配しんぱいしなさるな、何どの様ようにもして遣るから」

と多助は茶代を払い、彼かの汚い見る影もないおかめの手を引いて炭の荷を担いで帰りましたが、霜月の事でございますから人通りも滅多には有りませんから、誰も知るものは有りません。する

と先程より藤野屋左衛門の娘お花と申して今年二十一歳に相成り、近辺で評判な別嬪の娘ですが、不思議な女で、御用達のお嬢様で有りながらやわらかいもの絹布を着た事は有りません。尤も外へ出ます時には、御両親のお恥になると濟まないと申して着ますが、宅うちにいる時は何うか綿服めんぷくにして下さいと申し、頭も飾らず、白粉おしろいなどは更につけず、誠にさっぱりとした娘でございますが、自ずと氣象が気高くても強味こわみはありません、心掛けの宜よい娘でございます。多助が日々にち／＼裏の茶見世へ来て話をするのを聞いて感心致して居りましたところへ、今日はおかめという叔母が参りましたのを、多助が段々と意見を加え、敵同志かたぎの親子をば助けて遣ろうと云う志は、誠に感心な事だと、年はまだ二十一歳でございますが、心

ある娘で、多助の往ゆく後うしろ影かげをしみ／＼眺め、見惚みとれて居りますと、広間の傍わきに土廂どびさしを深く取った六畳の小室こまがございます。其処そこに藤野屋左衛門が居りまして、

空「花や／＼何を見て居るのう」

と云われてお花は心づき、

花「お父とっさま様、あの毎日あすこの葭簀よしずばり張に炭屋さんが休んで居りますねえ」

空「彼あれは中々感心な男だ、只の人間じゃない、計り炭を売るなぞと何うも工夫が旨い、それに云う事が皆みんなな異かわつているよ」

花「毎日明き樽を買う人と話をして居ますが、どうも不思議なことを申します、あのお方は今に立派のお方になりますねえ」

杳「尋常者じやないのう」

花「お父様家へもいくらも人が来ますが、本当にあの炭屋さんのようなお方は有りませんねえ、今日という今日はつく／＼あの炭屋さんに私は惚れ……」

と云いかけ親父の顔を見て、恥かしそうに下を俯き真赤になりました。

杳「何か、彼の炭屋に花は惚れたか、うん惚れても好い、好く惚れた、己も惚れている、感心だ、あの襦袢の半股引刺子の筒袖で真黒けえに成っているのだから、色香に惚れたのではない、炭屋の心に惚れたのだろうが杳左衛門も鼻が高い、流石は藤の屋の娘だ、宜しい、貴様が強つてあの炭屋の所へ嫁に往きたいと云うな

ら遣つてやろうか」

花「お父様とつさま本当でございますか」

柰「往ゆきたいか」

花「本当にあんな人はないと思います、彼処あそこへ嫁に遣つて下さい

ますれば、どんなにもお父様とつさまに孝行致しまする」

柰「おゝ感心だ、宜く云つた、何うも平常ふだん乙な理窟を云うだけお

前の心しんてい底が宜しいが、併しかしあの炭屋は何処のもんだか家うちが分ら

ないで困るが、明樽買いと懇意な様子だから、彼奴あいつを呼んで聞い

て見たら分ろうが、然るべき媒なこうど妁を頼み、娘を貰つて下さいと

云つたら、屹度炭屋は御用達の娘は嫌いだが随分云かい兼ね

え男だから、兎も角も明日あした明樽買いが来たら呼んでくれ、相談を

して見ようよ、これくよしや、明日のう、あの粗々そゝつかしい明樽買いが来たら、少し用があるから呼んでくれ、門の方から入れずに裏口の外庭の方から入れてくれる、いゝか」

下女「かしこま畏りました」

と其の日は暮れ、翌日に相成りますと時間たが違わず例の通り、

久「明樽はござい〜」

と流して参りました。

下「ちよいと明樽屋さん」

久「へい〜どなたさま何方様でございます」

下「あの旦那様が、何だか鳥渡ちよつとお目にかゝりたいからと仰しやいますから、どうぞ庭の開きから入って下さいまし」

久「何方様どなたさまで、藤野屋様で、是は誠に有難いことで、成なるたけお直段ねだんを宜く頂戴致しますから、外へお払いにならず、私わたくしが頂戴致

しとうございます、え、樽はお幾つございます」

下「旦那様が少し御相談申したいことが有りますから」

と云いながらギーツと開き戸を明け、

下「此方こちらへお入んなさいよ」

久「でございますか、へい」

と中へ這入りますと、庭の清潔きれいなこと、赤松の一と抱えもあるのがあり、其の下に白川御影しらかわみかげの春日燈籠かすがどうろうがあり、檜ひの木の植う込えごみ錦木にしきぎのあしらい、下草の様子、何やかや申もうし分ぶんなく、鞍馬あまと御影の飛石とびいしに敷松葉しきまつばから霜除けの飾かざり縄なわ、打水うちみずを致

し洗い上げてあります、土廂どびさしが深くなっている六畳の茶の間が有りまして、其処そこに杓左衛門が坐つて居りまして、

杓「さア樽屋さん、ずっと此方こちらへ来ておくれ、構わず開けて此方こつちへお入り、よしや入れてあげなよ」

久「へい、只今草鞋を脱いでまいります、石が斯様に洗つてございますから」

杓「いや構わず、遠慮をしてはいかん、ア、松葉の中へ踏み込んではいけない、其の天秤棒を片付けておくれ、あ、石灯籠へ立掛けては困る……宜くお出でゝあつた」

久「お初にお目にかゝります、私わたくしは岩田屋久八と申します樽買いでございますが、何分御贖肩を願います」

空「まアこれへ腰をかけておくれ、石の上に手を突いてゝは困るよ」

久「誠にお立派なお住居すまいでございます、斯ういうお広いお宅うちは初めて拝見致しました、あの凹へこんで居ります処は何と申します」

空「あれかえ、あれは床の間だアね」

久「へい、私わたくしは凹へこんで居りますから凹へこの間かと思ひました、お座敷が大層続いてございますなア、彼方あつちの方に小さいお座敷が有りますが、あれは何でございます」

空「あれは便所だよ」

久「へい誠に結構なお住居すまいでございます」

空「花やお茶をあげなよ」

花「はい」

と恥かしそうにお茶を汲んで久八の前に置く。

久「へいへい、是は有難う存じますく」

と云いながら茶碗を手に取上げて見まするに、古染付ふるそめつけの結構

なたつぷりした煎茶茶碗を象眼入ぞうがんいりの茶台に載せて出しますから、

久「へいへい、恐入ります、惜しい事に周囲まわりがポツく、元はげて居り

ますナ、些ちとお茶がお温ぬるいようでございます」

空「いや、余あんまり熱いと苦くて飲みにくいからだよ」

久「へい、戴きます、大層甘うございます、お砂糖でも入れてありますかな」

空「お菓子を上げなよ」

花「はい」

と云いながら蕎麦饅頭時雨饅頭なんぞを紙の上に山盛に致し、

久八の前に差出さしいだす。

久「こんなには戴けません」

空「皆喰みんなべなくつても宜しい、余つたら持つて帰つて子供にお上

げな」

久「これは恐入りました、御大家様は違つたもんでございますな、
ちよつと

一寸お菓子にも饅頭を三十も四十も積上げてお出しなさる、大

きなものでございます、矢張やつぱり其の人に備わる徳不徳で、私わたくしなぞ

は精出して明樽を買つて歩くのでございますな、有難うぞんじま

す、時に樽はお幾つございますな」

空「樽を売るのはじゃない、少し相談をしたい事が有りますのだが、久八さん誠に恥入った事ですが、藤野屋空左衛門折入つて、此の通り手を突いて願いたい事があるのだが、何うぞお聞濟みを願いたい」

とこれから縁談の事を申入れるというお話でございですが、一息つきまして直すぐに申上げます。

十七

多助が身代を仕出しますには、女房が悪くつてはとて迎まも身代を大まきくする事は出来ません。多助の女房になりますのは前まえ回えに申上

げました通り、御用達藤野屋左衛門の娘お花で、実に別嬪でございます。女は容貌形ばかり美しくつても心掛が悪くつては何にもなりません。此のお花さんは海も山も備わった、実に何んとも云えない佳い娘で、此の御用達の娘が計り炭屋へ嫁に行くと云うは実に妙なもので、縁と云うものは不思議な訳で、随分大阪ものも東京ものと夫婦になり、東京のものと長崎のものと夫婦になり、只今では欧羅巴ようろっばの人と日本の人と教会で葡萄酒を飲んで婚礼をするという世の中になりましたが、縁は妙なものでございます。之を障子に譬たとえて見ますと、障子に遣つかう木は何国の山いずこの木か知りませんが、それへ美濃で製した紙を張つて障子になります。骨ばかりでも紙ばかりでも障子にはなりません。此の二つが持合いで

一つのものになりますから、心掛の悪い女房を持つても悪い亭主を持つても捨てる事は出来ません。わたくし私のような穢きたない衣服きものは南部で出来た表に、青梅飯おうめはん能辺のうへんで出来ました裏を附けますと一對の夫婦で、表は亭主裏は女房ですから、折目正しく整ちやあん然ぜんとしていれば一對の夫婦でございりますが、それを亭主の方で浮氣しゅきの汚しみをつけたり、女房の方で嫉やきもち妬ねたの焼け穴でも拵こしらえたり何かすれば、これを離して外の裏と合せると再縁になるようのもので、合せものは離れものでございます。いつでも折目正しくして居れば整ちやん然ぜんとして二世も三世も夫婦になつて居ります。夫婦は三世という縁合のものですから少しの恪氣ぐらいで私わたくし出でて往ゆくから一本お書きななんて、全体女が男に一本かけなんと云うのは可笑しいわけでご

います。其の時御亭主が癩癩が起つて居りますと、直ぐにみくだり三行
 半はんを渡して出されますと、合せものは離れもので、再び歸るこ
 とは出来ないから、嫉妬やきもちの起つた時は、嫉妬腹やきもちばらを立てはい
 けません、愒気は疑り、疑りは愒気の玉子です。女房が旦那は何
 処かへ女か何か出来やしないかと思うと、これが嫉妬やきもちの玉子で、
 すると御亭主のする事なす事そう見えます。旦那が少し春気はるけで頭
 髪たまが痒かいゝから床屋を呼びにやってくれと云うと、はてな、まだ
 毎いっもより少し刈込みがお早いが、それには何処かへお出いでなさるの
 だろう、それに此の間香水いの良いいのを二本買つてお出いででなすつた
 のは変だなと、胸がムカ／＼と愒気が起つて、そうすると声の出
 方が違います。

女「お召し物は何が宜しゆうございます」

亭「そんなに良いのはありません、結城紬ゆうきつむぎの着物に、絹けんちゆう紬ゆう

の羽織で宜しい」

と云うと、いつもはお召縮緬めしちりめんの召物めしものだが、今日は渋いお装なりをして見せようと思つてと、又モヤ／＼として、

女「車を言い附けましょうか」

亭「車は外そとで乗りますから宜しいよ」

というと、ハ、ア家うちへ知れないように外でお乗りなさるなど思
い、又またモヤ／＼としまして極ごくお毒でございます。其の嫉やきもち妬もちの
起つた時結構な一首の歌がありますからお教え申します、「雲晴
れぬ浅間の山の浅ましや人の心を見てこそ止やまめ」という歌です

が、モヤ／＼と火の燃えるようで誠に浅ましい了簡で、御亭主が浮気をしたか何うだか、宜く見て愒気を起せばいゝに、そこで人の心を見てこそ止まめというのでございます。それですから愒気の起つてモヤ／＼とした時には「雲晴れぬ」そうはいけませんがお気をお注^つけあそばせ。扱^さて多助のお話でございませうが、お花は多助の志を見抜いて嫁に往^ゆきたいというのですから、浮気のようにで浮気でない。親父もお花が多助の所へ嫁に行^ゆきたいというのを聞いて心嬉しいから、

空「さて樽屋さん」

久「誠に有難いことで、樽はお幾つございます」

空「樽ではない、お前さんと毎日一緒に家^{うち}の側^{よしず}の葎^ず簧^{ぱり}張^{はり}に休ん

で話をしている炭屋さんは何処の人ですえ」

久「あれは私の隣で」

杓「お前さんの家を知らない」

久「本所相生町でございます」

杓「あの炭屋さんはお内儀さんがありますか」

久「え、彼の人は八月の十五夜に店を開いたばかりで、まだお内儀さん所ではありません」

杓「へい、何処の人だえ」

久「上州沼田の人だと申しますが、誠に面白い人でございます」

杓「左様かえ、あの炭屋さんに女房を一人世話をしてお貰い申したいが、強つて往きたいという人があるんだから、女房に持つて

呉れようかね」

久「へい、それはお宅の御飯炊ですか、彼の方は男振は宜しゅうございますが、何しろ真黒に成つて働きますから、紺屋なら真つさお

青だが、炭屋だから真黒でどうも」

空「誠に恥かしいが、これに居るのは私の娘で、年は廿一に成つて臺とうに立つて、誠に良い縁がありませんが、あの炭屋さんを見て嫁に往ゆきたいと云い、私も遣りたいと思うが、お前さん媒なこうど灼どになつて貰もらいたいものだ」

久「何方どなたさま様をえ」

空「これに居る娘で」

久「へい、このお嬢様、アハ、ハ、ハ、御冗談ばかり云つて、

御大家様などはお閑ひまでお退屈でいらつしやるのだから、樽買を呼んで遊ぼうという御冗談でございましょう」

杳「詐いつわりではありません、藤野屋杳左衛門は帯刀御免であります、此の通り手をつけてお願い申します」

久「そんなら本当でございませうか、あの間違いではありませんか、計り炭屋でございませうか」

杳「左様」

久「何処がお見込でお嬢様は嫁に入いらつしやいますな」

杳「姿なりかたち形に惚れたのではない、唯たつた一つ娘の見込があります、

只たつた一つ臍から二寸ばかり下に見所があるのサ」

久「へい、お嬢様は何どち処のお湯ゆうに入いらつしやいます」

柰「なアに心にさ」

久「ハ、ア成程、心は二寸ばかり下ですな、お嬢様本当でござい
ますか」

と云われ、流石さすがは処女おぼこげ気に真赤になりました。

久「あれは感心でございませす、佐久間町の山口屋善右衛門の所に
奉公をして白鼠と云われるくらいで、あれは變つて居ります、そ
れをお嬢様が見抜いて嫁に入らつしやる、貴方が遣りたいと仰し
やる、彼あの人も仕合せですな、宜しゅうございませす、屹度お世話
致しまししょう」

柰「本当かえ」

久「どんな事がありましたも屹度お世話をします」

空「あゝ、そんなに煙管で青磁の火入ひいれを敲たたいては瑾きずがついていけないよ、そして其の煙管は私のじゃないか」

久「これは旦那様のお煙管で、とんだ粗忽そそつをしました」

空「おい何処へ駆出ゆして行くんだ」

久「あゝ又間違えた、煙管の吸す口くちを洗おうと思つて私の口くちを洗つた」

空「何の事だ」

久「宜しい、屹度お世話申します」

空「あゝ、まだ用があるよ、おい〜其方そつちへ行つちやアいけないよ、アラ垣根を跨いで出て行つてしまった、粗忽そつかしくつて仕様ががない」

それより久八は急いで多助の宅へ参りまして、

久「多助さんく」

多「何うした、もう帰つて来そうなものだと思つて待つていた、

あゝく草鞋を穿いたなりで家へ上つちやアいけないじゃないか」

久「多助さん慌てなさんな」

多「お前が慌てゝ居るんだよ」

久「多助さん、お前の云う通り運は天から授からア、お前知つて
るだろう藤野屋左衛門さんを」

多「むゝん、藤野屋、知つてるよ」

久「どうも頭髪あたまがこんなでどうも」

多「藤野屋の頭髪あたまがか」

久「なアにお嬢様がサ、年が廿一で美い女おんなだねえ、それがお前の所へ嫁ゆに往きたい遣りたいと云つて、藤野屋の旦那が縁側へ手をついて、お前さんに媒なこうど妁どを頼むといつて、どうも美い女おんなだ、お前に見せたいよ、あゝ云う大家たいけから嫁が来るつてお前はどうも仕合せだ、どうも大きな家うちだよ、座敷が幾間いくまもくゝあつて、庭も大變立派だよ、其の代りに掃除が届かないね、松葉が一杯にこぼれて居るよ、そうして良菓子いを、あゝ忘れて来た、惜しいことをした、それで茶を入れて、温ぬるいのがいゝのだから、甘い良茶いで、どうもあのお嬢様お前お貰ちいよう、お貰ちいよう」

多「お前のいう事は何だか些ちとも訳が分らない」

久「嘘じゃアない、お貰ちいなさい」

多「藤野屋の娘は己見た事はあるが、いゝおんな美女だ、全くそう云うのか」

久「全くつて藤野屋の旦那が手について頼み、お嬢様が真赤になつたよ、ほんとう真実だよ」

多「お前は今年めえの十五夜から交際つきあつていて、口と心と違つた事はねえから正直な人だと思つていたが、お前めえ遊ぶじゃアねいなア」

久「遊ぶじゃアねえ、お前より此方こっちが遊ばれると思つていたら、本当だつた」

多「本当に藤野屋左衛門が一人娘を己に呉れると云えば、藤野屋は横着な奴だなア」

久「何で横着だ」

多「己が働きを見抜いて彼奴あいつが嫁によこそうと云うのは、どうも油断がなんねえ、駄目だから断つてくんねえ」

久「なに断る、多助さんお前勿体ねえ事を云わねえもんだ、彼あれを貰えば長持が幾いくさお棹、田地が幾いくら許来るか知れねえ、これが本当の天から授かつて来た宝じやアねえか」

多「駄目だねえ、私わしア計り炭屋、先方さきは御用達で金はあるべいが、幾ら有つても使えばなくなつてしまふ、己おらア稼せぎじやア夫婦ともか俱か

稼せぎでなければなんねえに、先方さきはお嬢様だから飯は炊けねえ

し、味みそこし噌漉を提げて買物けいものにも往いかれめえ、己おらア家へ来ても女中

でも一緒に附いて来て朝寐あさねをして、お引ひきずりで銀の股引を穿いた箸をチャラ／＼云わして飯を食つて居ちやア、飯が食えねえ、そ

うすると幾ら有つても直ぐに金がなくなつてしまふ、身代の為にならねえ、釣合わぬは不縁の元だからお断り申す、往つて断つて来てくんねえ」

久「フウン成程、お飯は炊けねえ、己ア一途に宜いと思つて、屹度世話をすると言つたから断るのは間が悪いねえ」

多「間が悪くつても断つてくんねえ」

久「あゝ、鼻の先にぶら下つている宝を取らねえのか、残念だなア、仕方がねえ、往つて断つて来よう」

と云いながら久八は藤野屋へ参り、

久「へー参りました」

柰「今度は表から来たか」

久「先刻戴いたお菓子を持つて参ります」

杓「炭屋さんに話をしましたか」

久「へい、話しましたがどうも」

杓「うっかり返事をしますまいねえ、御用達の娘と炭屋とは釣合わない、釣合わぬは不縁の元ぐらいの事は云いましたろう」

久「あなた立聞をしましたらう」

杓「なアに立聞はしません、彼あの人だから其の位の事は云いましてらう」

久「其の通り云いましたよ、夫婦ともかせ俱とも稼かせぎをするのだから、金は使えばなくなる、お嬢様だからお飯まんまは炊まけず、味噌みそ漉こを提ひげて買物ゆにも行ゆけねえ、お引摺りでは身しんしょう上うのめにならねえからお

断り申すと云いました」

空「成程至極尤もだが、何ういう人の娘なら嫁に貰うだろうね」

久「計り炭屋でございますから、明樽買いの娘でもあつたら貰い
ましよう」

空「お飯まんまを炊くのは習わせなかつたが、柔らかい物を着るのは嫌
いで、針仕事も覚え、髪も自分で結いますが、飯めしを炊くことは知
りませんが、宜いい、久八さんお前さんに娘を遣りましょう、お前
さんの家うちに一年でも半年でも置いて、お飯まんまも炊かせ、徳利を提げ
て買物に往ゆかれるようにして、多助さんの所へ嫁にやつて下さい
な」

久「あわたくしの私の娘に、本当でございますか」

空「嘘は吐かない」

久「宜しい、これで多助さんが貰わないと云えば喧嘩をします、
忘れないでお菓子を載いて参ります、左様なら」

と又帰つて、多助に藤野屋の申した事を話しますと、多助は首
を傾けて思わずハタと膝を敲きまして、

多「成程面白い、明樽買へ彼れ程の大家の娘をくれて、計り炭屋
の嫁に遣りたいと云うなら貰つても宜しい、お前の娘なら貰おう
が、私わし一存で定めきる事は出来ない、主人に相談して主人が持つて
もいゝと云えば貰おうから、暫く待つておくんなせえ」
久「そんなら早く往いつて相談して来るがいゝ」

とこれから多助が参りますのでございますが、中々むだ冗には歩き

ません、炭荷を担いで、「計り炭は宜しゅう、計り炭は宜しゅう」と商いをして儲けながらまいります。山口屋の納屋の所へ荷を下しまして店の方から入り、

多「番頭さん御無沙汰をしました」

和「いや暫く来ないが何うしたえ、旦那様も案じて入いらつしやる、色々風聞も聞いたが大分繁昌だそうで、誠に結構だねえ」

多「え、直すぐに旦那様にお目にかゝり、お話し申してえ事があつて参めえりやした」

和「そうかい、台所の方へお　り」

といいますから、多助は草鞋を脱いで上ります。番頭は多助のまいりました事を主人に知らせますと、主人も大きに喜んで、

善「誠に宜く来た、私も逢いたいと思つていたが、尋ねもせず、一人で嘸忙がしかろうと思つて案じていた」

多「誠に御無沙汰を致しました、切めて一日置きにもお見舞に出
てえと思つて居りやしたが、見世を出して夜も商いをしやすから、
忙しくつてつい御無沙汰をしました」

善「却つて無沙汰の方が宜しい、誠に宜く来た、何か用があつて、
何か話したい事があるそうだが何だえ、おいお前、多助が来まし
たよ」

女房「宜くお出でだねえ、此の間芳に尋ねてやれと云つたけれど
も、寄りもせず、塩梅でも悪い時には独りものだから、薬を煎じ
る者もなくつて困るだらうと思つていたが、大層繁昌だそうで、

蔭ながら喜んでいますよ」

多「誠にそれもこれも皆旦那様のお蔭で、誠に繁昌して、此の節は粉炭も無くなりましたから、旦那様の炭を買って打毀ぶこわして売ろうと思つて、そうして私わしもこれから稼いで金を貯めて、国へ帰けえつて家を立うちてゝいと思つて居りやす」

善「それは誠に結構な事で」

多「就きまして私嫁わしいを一人貰えと云つて、人が世話をしやすが、一人口は食えねえが二人口は食えるという譬たとえもありやすから、旦那さまがまあだ早いといえば持たずに居やすし、持つても宜いいといえば貰おうと思つて、旦那様に相談に来やした」

善「世話をする人があれば貰うがいゝよ、媒なこうどぐち介口と云うものは

うま
甘い事を云うものだから、能く先方を問糺して貰うが宜しい、再縁でもする女か」

多「旦那斯ういう訳でございます」

とこれから明樽買の世話で、親元はこれくと申して、明樽買の娘にして貰おうという事を話しますと、山口屋善右衛門は案外の話に実に感心しまして、

善「多助それというのもお前の心掛にある、神かみほとけ 仏のお恵みにあるから、これを貰わないと云う訳はない、貰えくくく」

多「はいくくく」

女房「誠に思掛けない話じゃないか、其の親が遣ろうというのも感心だが、娘がお前にサ、お前だって男は悪くはないが、担ぎ商

いをするのを見抜いて来たいという其の子も感心ではありませんか、ねえ旦那」

善「誠に結構だ、己が媒^{なこうど}妁^{なこうど}をしましょう」

多「それはいけません、藤野屋から来るなら山口屋の旦那様の媒^{なこうど}妁^{なこうど}が宜しいが、明樽買の岩田屋久八の娘にするのだから、山口屋の旦那じゃアいけません、少し過ぎますが、番頭^{うち}さんが家^{うち}を持って、夫婦一対揃って居るといふから、和平さんにお頼み申しましょう」

善「宜しい、そんなら和平に言い附けるが、婚礼は何日^{いつ}だえ」

多「先方^{さき}は何といふか知んねえが、十二月の十五日と定め^きました」

善「それは何う云う訳で」

多「日は吉いか悪いか知らねえが、私が国を出たのが八月十五日で、店を出したのも十五日だから、大切の日を忘れねえ為め十五日にしましょう」

善「左様さ、三日さんじつだから至極宜しかろう、それだが隣から直すぐ来るのは変だろうから、何処へか 　　って来るかえ」

多「なアに直ぐに来やす」

善「何処か高張でも出す所があるだろう」

多「婚礼は何うか昼うまの午ねげの刻ねげに願ねげえてい」

善「それは可笑しい、お大名の婚礼なら午の刻だが、計り炭屋の婚礼に昼は可笑しい、夜がいゝよ、夜がいゝよ」

多「どうかそれだけは昼にして下せえ、夜は出来ねえ」

善「何故夜は出来ない」

多「それでも夜すると商いが出来ねえ」

善「商売は一日ぐらい休んでも宜いじやアないか」

多「それは私わしア構わねえが、方々の内儀かみさん達が待つて居るから、

朝は商売に出なければなんねえ、又夜は家うちで商いをするから、遠

くから内儀かみさんが前掛めえかけの下へ味噌みそ澆こしを入れて買かいに来るのに、

今日は家うちが婚礼だからと云つて断ると冗むだ足あしをするべいじやねえ、

炭がなければ此の寒いのに木片こっばを焚こいてブウ〜云つてあたるく

らいで、大勢の人に寒い思おもいをさせなければなんねえから、朝商

いをして夜商いをして、それから寐ねせえすればよかんべい」

善「そりやア寝るのは宜いいが、成程人の難儀になるのだから其の

方が宜かろう、それじゃア上かみしも下しもを着るかね」

多「どうして〜」

善「先方さきが藤野屋左衛門だから婿むこも上かみしも下しもぐらいは着なくつち

やアなるまい」

多「なアに私わしア此こゝの筒袖つっぽで宜うがんす」

善「どうか身の出世だから袴羽織でやつて呉れ」

とこれから和平を呼んで話しますと、和平も大きに悦んで承知しました。

多「旦那様ちよつとどうか一寸着物と羽織を貸しておくんなせえ」

善「何処ゆへ往くんだ」

多「これから往つて来る処があるから」

善「どんな着物がいゝな」

多「なアに一ちよつと寸したので宜うがんす」

善「これ悴のを貸してやれ、結城紬ゆうきつむぎのが宜しい」

とこれから着まして、多助が戸田様のお屋敷へ参り、実父鹽原角右衛門に会い、婚礼の事を相談を致しますというお話でございますが、一ちよつと寸一息つきまして申上げましょう。

十八

多助は主人山口屋善右衛門から着物と羽織を借り、これを着まして戸田様の屋敷にいる実父鹽原角右衛門の所へ往ゆきましたが、

丁度十ヶ年ぶりでございます、尤も五年前危難の節実父には逢い
ましたが、そうそつ 卒に別れましたゆえ、今日は染しみ々々、物語をしよ
うと思ひまして屋敷へまいり、

多「お頼み申します、お頼み申します」

男「どれ」

多「手前は山口屋善右衛門の手代多助と申します、旦那様へお目
通りを願ひやす」

男「左様か、少々控えて居れ……え、山口屋善右衛門方の手代多
助と申すものがまいりまして、旦那様へお目通りを致したいと申
します」

角「なに多助がまいつたと、どう如何なりいう形なりでまいつた、また筒袖つゝぼを

着てまいったか」

男「いゝえ羽織を着て参りました」

清わたくし「私もあれぎり逢いせんから、どうか貴方お義理堅いのも程
がありますからお逢い下さいまし」

角「多助をこれへ通せ」

男「はい」

と云いながら玄関へまいり、

男「此方こちらへ通らっしゃい」

多「はい」

と云つて座敷へ通りましたが、母の顔は十年ぶり、父の顔も五
年前ぜんに見たが真の闇で見たのですから能よく分りません。多助は実

に懐かしく胸が塞がって、

多「御機嫌宜しゅう」

と云うなりにピッタリ畳へ頭を摺付けて居ります。

角「誠に久しく逢いません、人の噂に山口屋善右衛門方の奉公を勤め上げて、何か本所辺へ店を出して、大分繁昌の様子も聞いて居つたが、何か用事があつて参つたとか、用向を申せ、互に無事
でいてめでたい」

多「私もお目に懸りてえと思つて居ても、奉公の中は只お屋敷で御両親様のお達者で入つしやると云う事を蔭ながら聞きますばかり、私も望みが叶いまして山口屋を首尾好く十一年勤め上げ、相生町へ店を出し繁昌して忙がしいので間合もなく、夫故お屋敷へ

も出ませんでした。今日は御機嫌伺いながらまいりまして」

清「誠に旦那様もお年をとるし、最^もう尋ねて来そうなものだと思つていても、旦那様はお義理がお堅いから沼田の養父に済まんと仰しやつて、お逢いなさらなかったが、今日は立派になつて来て誠に嬉しい事で」

多「私^{わし}も嬉しいゆうござえます、就きまして国へ歸^{かえ}ろうと思つて居りましたが、山口屋に預けた金が三百両ばかりで、国に歸^{かえ}つて家を立てべいとは存じましたが、江戸で稼いでもう七八百両貯めてから歸^{かえ}るべいと思ひやして、店出しをしやした所が、有^{あり}難^{がて}え事に繁昌します、私^{わし}もまだ三十一だから今年も稼げば国の家^{うち}も大^でく立てられ、親類の家^{いえ}も立てべいと思つて居りやした所が、女房

を世話をする人があつて、主人も得心でござえますが、持つても宜しいか宜しくねえかうかげ伺えにめえ参りやした」

角「誠に手前が堅くして居る所からそう云う訳になるので、誠に恐悦の事だ、何ういう者の娘じゃ、山口屋善右衛門が得心で持たせるといふ女房なら宜しい、それは結構だ」

清「最もうこんな立派に成つて来ましても、矢張ちい少さい心持で居ります、女房を持つようになつて誠に結構だねえ、先方せんぽうは何う云うもので、女房の身分は」

多「身分はこれ〜」

と前ぜん申上げました藤野屋の事から、明樽買の娘にして貰う事を細かに申すを聞いて、角右衛門は学問のある人だけに暫く考えて、

角「多助、誠に得難い幸いだ、貰えく、向うも藤野屋左衛門の娘、たとえ仮令樽屋からよこしても、婚礼の時は世間へ対して振袖ぐらいは着せてよこすだろうな」

清「そりやア貴方たとえ仮令炭屋でも婚礼の席は立派にしなければなりませんから、嫁も地赤じあかに縫い模様かの振袖に白の掛位かけは着なければなりません、多助も世が世なら上かみしも下ぐらいは附けなければなりません、運悪くあゝ云う事になったから、どうか貴方御紋付を遣つて下さいまし」

角「そうサ、上かみしも下も入るなら遣るから持つて往くがいゝ」

多「主人から紋付の着物と羽織と袴を祝つてくれましたからいいません」

角「何を出せ、袴と盛景もりかげを出せ」

と備前盛景の一刀を出させまして、

角「これは手前の身の固めの祝いとしてやる、又此の五十金も遣つかわす」

多「誠に有難い事で、お身に附きました物を戴きますのは誠に有難うございますが、お腰の物は炭屋には入りませんから頂戴致しません」

角「左様で無い、町人でも脇差の一腰ぐらいはなければならんものだ、これは祖父様おじいさまからのお譲りものだから取つて置け」

多「へい、それでは戴きやすが、此の五十両は戴きません」

角「だが、宜く考えて見る、沼田の鹽原角右衛門殿は同姓の交誼よしみ

で手前を藁の上から取上げて育て、八歳に成つて返す時、礼として五十金を贈られ、拙者は其の五十金を持つて身姿みなりを整え、江戸へ出て只今斯うやって三百五十石頂戴致すようになったのは、角右衛門殿の恩義、其の時申し受けた金を只今返金に及ぶのだから、此の金を以て沼田の家いえを立てる足しにすれば、己の氣も済むから、これは強たつて受取れ」

多「御尤もでございますから、此の金を以て養父の法事をいたし、余りで馬でも買いますようにしましょう」

角「婚礼は幾日いくかだな」

多「え、来月十五日でございます」

角「夕景から行つて模様を見たいな」

多「婚礼は正午の刻に極めました」

角「はてね、何ういう訳で」

多「これには深い訳があります」

角「左様か、立派にやれ、立派にやれ」

清「あゝ是は挿さしふる古した櫛こうがい笄むかしもの、昔物ゆえ気には入るまいけれ

ど、嫁御よめごへ私が心ばかりの祝いわいもの物、常に此の櫛こうがいと笄しゅうと

姑しゅうとめが側に居ると心得、油断なく家いえを思い、夫を大切に致すよう私

が申したと云つて遣つかわしておくれ」

多「ハ、有難く戴きます、左様なら御機嫌宜しゅう」

と暇いとまご乞いをしますと、両親が玄関まで送つて来まして、嬉し

涙をこぼしますを見て、

多「左様なら時節があれば又お目に懸ります」

と云いつゝ別れを告げ帰つて来まして、早速久八を以て藤野屋へ挨拶を致しますと、藤野屋のお嬢様はこれから十五日まで樽屋久八の家で御飯炊ごぜんたきの稽古を致して居ましたが、扱さて十二月十五日となりますと、女親は妙なもので、たとえ樽屋へ遣つても嫁に往ゆく時の品とて拵つえて置いた縫模様ぬいばしらの振袖は多助に話をして、当日だけは着せて遣りたいと云う。多助は袴羽織でお花は縫模様の振袖と大和錦の帯を締め、髪は文金の高たか髷まげにふさくと結いまして、少し白粉おしろいも濃く粧つけまして、和平夫婦が三々九度の盃さかずきを手に取り上げる折から、表の方かたから半合羽はんがはを着きて、今河岸の船から上つて来たという様子で這入つてまいりましたのは、炭の荷主で、

飛駒村の吉田八右衛門でございます。

八「はい、御免なさい、誠に無沙汰しやした、和平どんも此方か
ね」

和「これは何うもお珍らしい、当方も芽出度い事がありました参
つて居ります」

八「店出しをするという事を聞いたから、炭荷を送らなければ多
助さんに嘘をついたようだから、何うか送りてえと思つて居たが、
中々千両の炭が集まらねえのを、漸ようく々集めて、十三艘の船へ積
んで河岸へ持つて来たが、川が狭せめえから棧橋が邪魔になつて仕様
がねえ」

多「はアどうも有難うがंस、私わしが家うちは今日婚礼でがंसから、

マア上つて俱ともに一盃ペイあがつておくんなせえ」

八「婚礼処じやねえ、炭を揚げなくつちやア他の舟の邪魔になつて仕様がねえ、炭を揚げてから婚礼を仕なせえ」

と云うから、多助は紋付の着物の片肌脱ぎて臀しりを端折はしおつて、向う鉢巻を致しまして、せつせと炭を担ぎ始めました。そうすると嫁も、

花「私の振袖を結んで下さい」

和「何をするんだ」

花「何でも宜しい」

と云うから結んでやりますと、子供が水悪戯みずいたずらをするような形なりをしてお花は両裾を高くはしより、跣足はだしで河岸へ出て往ゆきました、

花「旦那様お一人でお忙がしゆうございましょうから、私も担ぎましようから、軽そうなのを下さいまし」

多「好く来た、担いでくれ」

花「はい」

と云うので、これから担ぎますから、久八、和平も手伝つて担ぎましたから、忽ち家の見えないうちに炭を積み上げ、芽出度婚たちまいえ礼を済ませて、八右衛門は媒なこうど灼と共に別れて帰ります。これから夜になると夫婦で商いをしますと、多助の家へ嫁うちが来て、これと云うから、嫁を見ながら方々から買いに来ます。これから商いをしまつて愈々いよくとこさかずき床 盃と相成ります。

多「芽出度めでていなア、己おらア斯うやつて真しんの親父に貰つた紋付の着物

を着て、お前めえと話をするだア」

花「はいく」

と恥かしそうな顔をして居ります。

多「誠に不思議な訳で、己おら家うちへ嫁むすめに来て己おら醜ぶおとこ男おとこで誠に何処

と云つて取り所も何もねえが、己おら精神しんげんを見抜みぬいてお前めえの親父様

もくれたゞから、未長く成るべいが、夫婦ふうふは初しよけん見けんにあると云う

から、婚礼こんりをする時に堅く約束やくそくをしなくつちやアならねえが、己おら

アような者でも亭主ていしゆに持てば、己おら言葉ことばを背そむかねえか」

花「はい、決して背そむきませんが、不束ふつつかものでございますから、

宜く御用ごんようをお言い付けなすつて下さいまし、漸げんく御飯ごぜんは炊炊けるよ

うになりました」

多「そうだつてなア、お前めえと六八十までも夫婦になるだが、お互たげえに氣に入らねえ所が出来る、どうも嫁は彼処あすこは宜いい此処こが氣に入らねえ、どうも腹ア立つていけねえと云えば、お前めいも、己おらア旦那あすこはどうも彼処あすこはいいが腹ア立つていけねえとか何とか思う事があるものだが、お互たげえにいけねえと思うと、一つ所とこにいるのが厭いやになるから、いけねえ所とこは取とつて打棄うっちゃつてしまつて、善いい所ところべいで夫婦になつて居いべいぜ、いゝか」

花「至極御尤もでございます」

多「そうサ、これより尤もつともな事はねえ、そこでお前めえは御用達の娘で、計り炭屋へ嫁に来て、味噌みそ漉こしを提あげると云う心は此の多助が仇あだには思おわねえ、己おれも死おに身めになつて働えき、お前めえも働えいて此の身代あを

大くして、人には云えねえが、時節次第しでいで少くも本所半分は己おれが地面にしべいと思うのだ、そうはいくめえが棒程願つて針程叶えだから、大くやるべいや」

花「はいく」

多「それには儉約をしなくつちやアいけねえ、吝嗇けちにするのじやアねえ儉約をするだよ、吝嗇けちとは義理も情も知らねえで、奉公人などに食う物も喰わせず、着る物も着せねえで人を困らせても構わず無闇に金を貯ためるのを吝嗇けちと云つて極ごくいけねえのだ、それから自分が一杯べい食う物を半分食つて、彼あれは欲しい、買いてえと思つても堪忍してやれと云つて半分にして置く、それが儉約の本もとだ、それを天地に預けて置けば利が附着くツいて来る、其の時は五枚めいでも

十枚めいでも一時じに着られるようになるから、十年が間稼しゅがなければなんねえ、今に子供でも出来ると骨え折れるから確しつかりやって呉れ」

花「どのようにも儉約を致します、御膳は一度ぐらいにしましよ
う」

多「お飯まんまはどんと食つてもいゝのだ、そこで儉約がいゝと云つても、明日あすが日死ひなねえものでもねえ、其の時此うちの家へ来て芝居見物一つ花見一つしねえと思うと愚痴うちが出て死ねねえものだから、己おれが一遍は見せる、花見でも芝居でも花火でも何でも一遍は見せる、美しい着物も一遍は着せるが、二度とはいけねえ、一遍ずつだよ、それを駄目だと云うなら今の中帰うちかえる方が宜いい、早い方がいゝ

よ、それが気に入らなければお前は器量があつて、何処へでも往ける立派なお嬢様だから、立派な処へ嫁に往くがいゝ」

花「私は立派な処へ往きたければ此方へは参りはしませんから、どうかお見捨てなさらないでお置き下さいまし」

多「見捨ると云う事はねえが、まあだ気に入らねえ事がある、お前の着物は皆なあんなに袖が長いが、彼の袖があれば子供の着物が一つ出来る、冗じやアねえか」

花「振袖物は皆な彼なに長うございます」

多「彼の袖だけ冗だから、彼れを鉈で打切つてしまふから此処へ持つて来う」

花「はいゝ」

と少しも逆らわず、嫌な顔もしず松竹梅の縫模様の振袖を持つて来ますと、

多「これを打切るだアよ、己ア家じやア入らねえから」

花「あゝ申し旦那様、貴方は昼からお働きでお草臥れでございませうから、私が致します」

と云いながら振袖を薪割台の上へ乗せて、惜気もなくザクウリツと二つ三つに切りました時は、多助も思わず手を拍つて、

多「好く切った、それでこそ鹽原の女房だ、多助の家は此の振袖の袂にある」

と云つて大きに喜んで、実に玉椿の八千代までと新枕を交せ、それから夫婦共稼ぎを致しまして、少しも油断をしませんか

ら、たちま忽ち身代を仕出しましたに付、つぎ多助は予ての心願通り沼田の
いえ家を立派に再興致し、分家の家も立てまして、こんにち今日まで鹽原の
いえ家は連綿と致して居ります。また多助は江戸表に置きましても稼
しゅっせい業に出精おほしまして、遂に巨きな身代となり、追々に地所を買
 入れ、廿四ヶ所の地面持とまでなり、本所に過ぎたるものが二つ
 あり、津軽大名炭屋鹽原と世にうた謡わるゝ程の分限ぶんげんに数えられ、其
いえの家益々富み栄えましたが、只正直と勉強の二つが資本もとしてでありま
 すから、皆様能く此の話を味あじわつて、只一通りの人情話とお聞取り
 なされぬように願います。此の話も余り長くなりましたから、未
まとまだ纏りのつかぬ道連の小平と盲人めくらのおかめ母子おやこの事などは、鹽原
ごにちのもの多助後日譚として、尚なお追々お聞きに達しますことゝ致し

まして、一先ひとまず此処で打切りに致します。長らくの間御愛顧に相成りました段は深くお礼を申し上げます。

(拋若林珣藏、酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の十二」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

1975（昭和50）年2月5日3版

底本の親本：「圓朝全集卷の十二」春陽堂

1927（大正15）年発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返しの記号は原則としてそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ

「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：仙酔ゑびす

2011年3月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹽原多助一代記

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>